

# 奇譚クラス

新しい風を吹かす



1  
月号

カバールガールを縛る辻村隆

奇譚クラス

KITAN CLUB

1

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Leimatsu

Osaka Japan



定価二百円



限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル達の緊縛姿股にて埋めました。  
(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います)



前頭	淺間起珍子	前頭	武州鉄栄子
小結	虎疾風千恵	小結	深鍋富江
関股	花吹雪弥生	関股	勇駒保子
大関	山親登重子	大関	昇藤美登和
横綱	美也の川芳子	横綱	林屋播政江
東	蒙御免	西	



東都  
良版  
社巴

大日本少女相撲協会  
春場所両横綱勝悠之図

南村





# 奇譚クラブ 新年特大号 目次

目次表「悦庵川柳ムード集」……佐保忍・作 滝れい子・画  
少女大相撲「美世の川、核塵播を倒すの図」……南川 俊平

美しき緊縛……………塚本鉄三・構成  
美と凌辱……………梨花悠紀子 黒り 責め……………大塚 啓子  
足のいたみり……………大塚 啓子 黒い 手 巻……………相川 文代  
カバール・ガール……………竹野ひろ子 ビニール袋の機密室……………竹野ひろ子  
献身の極致……………相川 文代 白髪と首飾……………梨花悠紀子  
憂鬱の囚女……………梨花悠紀子

## 第一口絵

泰安折願の生贄……………牧 高志幸・滝れい子・画  
踊子の訓練……………石橋 純一画  
奇妙なドレス……………石橋 純一画  
尻の玉屋……………南村 俊平画  
新年歌留多取り……………滝 れい子画  
重 量 感……………香川ナミオ画  
人 妻 椿……………西馬 孝画  
十五夜……………滝 れい子画

## ラビヤ

捨てられた人形……………(大塚) 縛り人形の横顔……………(大塚)  
連続組写真……………マリアフォト 奴隷哀歌  
女性の血紅切腹……………(梨花) 吊り上った瞬間……………(梨花)

## 第二口絵

超写真逆手吊りの変化……………(梨花) 圧感に咽ぶ……………(大塚)  
女主人と奴隷——足抵めの囃回……………新しい目ざなし……………(竹野)  
撮影会風景……………(大塚)

## 第二口絵

続・ろ子要諦記「おしめ・カバール・ガール」……………辻村 隆  
緊縛フォート撮影の実態……………  
——逆エビ縛りの一例——……………塚本鉄三

懸賞応募作品 「うつぼかすら」……………栗 羊三郎・画  
女性逆手吊り——十五夜……………石井 卓彦・画  
告白 女の復讐……………山岸 操・画  
私の経験 「女学生生活」の幸福……………長瀬 喜伴・画  
マツ屋敷記 美しき脅迫……………恒川文彦・画  
伏の夜の夢……………少女のお灸折檻……………水本清一・画  
告白 私の美しきと涙腫プレイ……………江波 好子・画  
長瀬 喜伴 宇宙のどこかで……………佐伯 龍彦・画  
運まじき空想「ヘルニヤ少年特別検査」……………森 太一・画  
創作「雪貴抄」……………北 園 朗・画  
馬化狂道傳 乗馬風流傳……………會 仁 蔵人・画  
わが生涯の良き日(愛野家の日記)……………(おまかせ)……………(おまかせ)

## 奇クサロン

伏見はエロ誌カ……………白 鳳と 龍  
巻に似る「活劇」の娘……………原作「少女」取調べ  
ガン作・マニヤのノート……………写真「私の切腹」  
ゆ 女 秘 蔵 園……………ベッパの女神  
まぞ川 柳 自 註……………最近片断校閲  
マリ屋敷「ボート」……………女奴隷に憧れる  
写真「檻」……………成る 別 冊 事件  
六対味入会の手引……………短箱住家、アブストラクト  
男性 友 愛 趣味……………成る 別 冊 事件  
春川文史に奉仕した二日間……………私の 夢 願  
「博の乙女達」探訪記……………

告白・体験 釜ヶ崎の女……………長 田 進・画  
女斗美小説「御土産女相撲」……………内山 景三・画  
女斗美小説「あやの一颯」……………香崎 京人・画  
「リズ」……………瀬 川 四郎・画  
蛙腹と妊婦賣めのアイディア……………近 藤 一・画  
川端多奈子嬢に「悦庵と愛情と」……………久我 芳一・画  
体験小説「柳」……………久我 芳一・画  
麻生保氏の生活と意見……………辻 村 隆・画  
奇譚二十九夜物語……………東 一 郎・画  
病床日記「白い部屋の片隅から」……………須藤 律志・画  
成るトルコ娘の偏執……………針とお貞と……………角 田 三 郎・画  
創作「体液銀行」……………村 田 雪夫・画  
体験小説「夜の告白」……………岡 千 春・画  
色艶 絵物語「狂熱の鞭」……………岡 千 春・画  
読者通信……………



# 悦彦川柳ムド集

佐保忍作

ようね 光る肌 淹れ子画

**濡**

らしたら  
ダイヤの



**痛**

く  
な

意気



**ズ**

ロースの  
覆  
面されて馬になる

**ゴム**

肌の  
ぬめり恋しき

**商**

賣気



**恋**

人よ貴女

の足は塩っ  
ぽい



離

れな  
気持と

芸妓

言

振  
ぐつわ



**納**

屋の隅

性  
み女の逆さ吊り





美しき緊縛

構成 塚本鉄三









美  
と  
凌  
辱





擦  
り  
責  
め







足のいたぶり



黒い  
手  
套









カバール・ガールひろ子







竹野ひろ子









ビニール袋の機密室









献身の極致

---

絹川文代



白 壁 と 首 枷







憂 愁 の 囚 女







泰安祈願の生贅夙 (牧高志案・滝れい子画)

天災悪疫から天下の萬民を守るため宙天に飛ばす奉納の女夙。



踊子の訓練（石橋 純一画）

調教師は若い踊子のピチピチした肢体の動きの方にむしろ興味があつた。





### 奇妙なドレス（石橋 純一画）

手も足も一つになった袋の中で、芋虫のように這いまわる二人の女。

# 尻の玉屋（南村 俊平・画）

「旦那、どうです。みんなイキがいいですね。お望みなら、直ぐ尻の玉抜いて差し上げますあ。」







新年歌留多取り（滝れい子・画）

こんな美しい令嬢の馬にだったら、僕はいつでもなりますよ。



重量感（春川 ナミオ・画）

「うわッ、助けてくれ！ 潰れてしまう。」





人妻椿（四馬孝・画）

「お前に恨みつらみは無いんだが、お前の亭主にちっとばかりしかりがあるのでネ。悪く思うなよ」



十五夜（滝れい子・画）

「切腹というものは、こういう風にやるのだ」



捨てられた人形







縛り人形の横顔



連続組写真

女性の血紅切腹







奴  
隷  
哀  
歡



『マゾ・モデル募集』



へ出演している男性モデルは應募した読者です







組寫眞

逆手足吊りの変化

梨花悠紀子



吊り上げた瞬間！





女主人と奴隸

足舐めの構図





圧感に咽ぶ

愛川悦子







攝影會風景

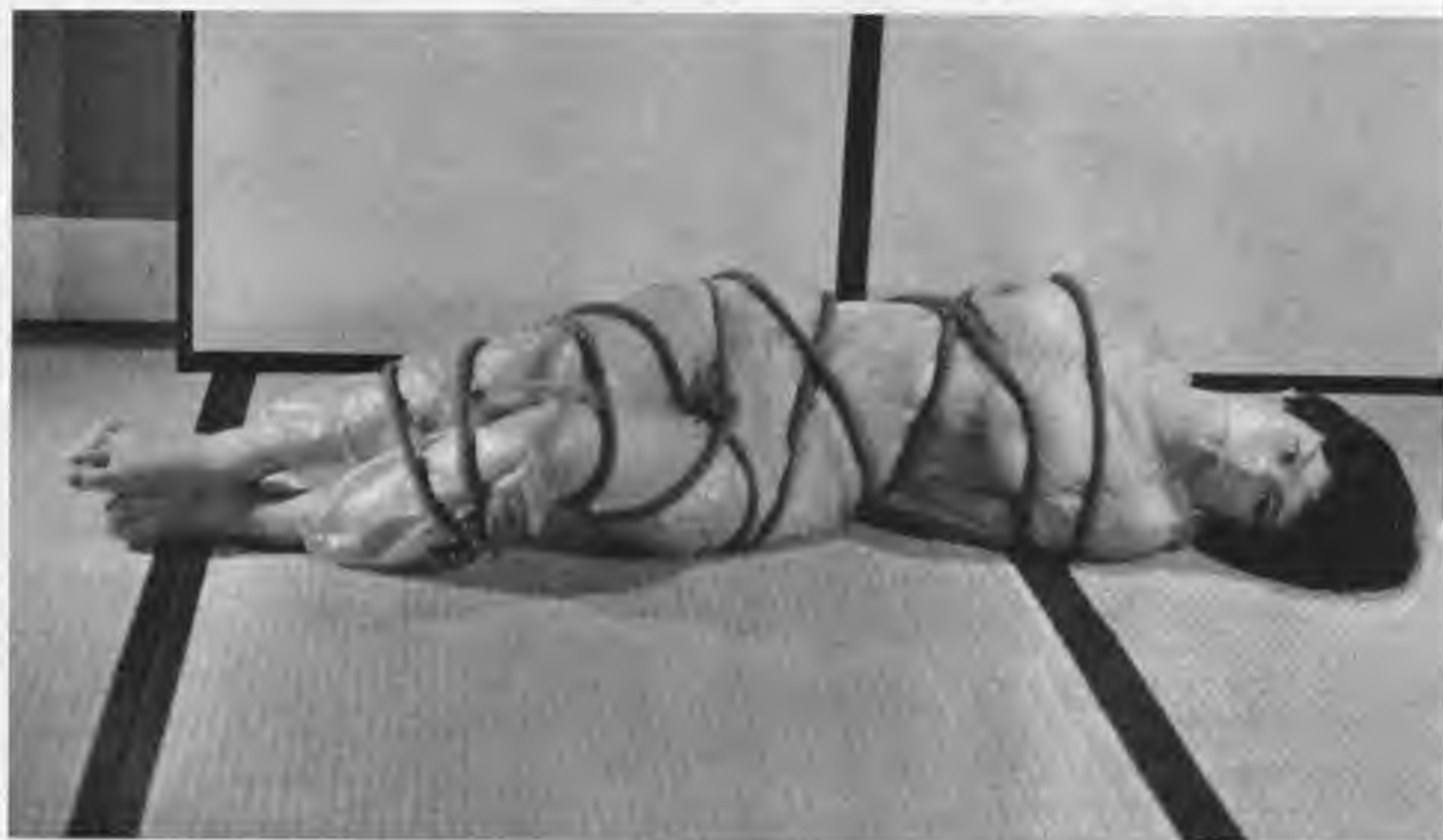






# 新しい目ざなし

竹野ひろ子





続ひろ子緊縛記

「おしめ・カバー・ガール」

辻村 隆



竹野ひろ子との初めての出会いは、今にして思えば、実にタイミングがよかった。

あの日から、数日ならずして、例の第二室戸台風が近畿を襲ったからである。

K氏の浜寺の別荘は、海岸に近いだけに、風当りも強く、彼の日頃自慢の庭園の、松は折れ、楓は根こそぎ倒れ、惨胆として、見る蔭もなくなったそうだ。

瓦も相当飛んだらしく、留守居の婆さんひとりと、恐ろしさに震え上って、懸命に御題目を唱えていたというから、風速三十米近い台風を浜辺から真向に受けたのだらう。

竹野ひろ子からは、その後、編集部を通じて私宛の簡単な台風見舞の葉書が一枚来たりで、それには、先日的一件は一行も認められてはいなかった。

彼女の意図した、古川裕子式のレインコートやおしめカバーを使わなかった、私の極く普通の緊縛に彼女は失望したのではなからうか。

金を払ったモデルの場合は、おおむね彼女達は、マネーの為、私達のいいなりにポーズをとり、或いは緊縛に、されるが儘になっている。

竹野ひろ子は、その点が違っていた。だか



ら金銭の授受をとまなわなだけにプレーは彼女の欲求するものに、極力協力し、同調してやらなければならない。

箕田氏も、私の撮って来た密着映画を見た時、案に相違した面持だった。

「おやおや、折角僕が持っていてやってやったのに、全然使っていないね——。これじゃ、彼女満足しなかっただろう？」

「どうもね——、矢張り自分の趣味が出て、モデル嬢をとる時と、同巧異曲になってしまったよ。けれど、鎖や手錠は、結構役に立ったよ——」

「全部脱がしたの？」

「紳士だからね。約束はチャント守ってやったよ。もう一押しすれば、不可能ではなかったろうが、そこが辛いところさ」

箕田氏はフフと声なく笑って、意味ありげに私の顔を覗き込んだ。

「図々しい奴が、よくそこでもう一押ししなかったね。ところで、写真はこれで全部かい？」

私も意味ありげにニヤッと笑って見せた。

正真正銘パンティを脱がさなかったが、ひろ子と私と二人きりの撮影であれば、どうとられようが言わなかったって水掛論である。すっかり



箕田氏に写真をもって来たのであるが、彼は、未だ奥の奥があると思っているらしい。

「うまく飼育して貰った様だから次回は、塚本君同行と願うか——」

「あゝ、いゝともさ。」

「おや莫迦にあっさりだね。」

「何もない証拠さ——」

こんなやりとりをして、行き掛り上、私は箕田氏の家から、早速和歌山の竹野ひろ子に電話した。

女の声が出て、竹野ひろ子と呼んで貰うとすぐ代って、彼女の鈴やかな声が受話器に響いた。

「もしもし、辻村です。分る……」

「えゝ……。先日はどうも、大変失礼しました。お交り御座いませんか？」

周囲に気を兼ねての、取り澄ました応答だ。

「明日の午後一時。場所はナ



ンバのU喫茶。差支えない？」

「あっ、左様で御座いますか、はい、承知致しましたわ。え、どうぞ、皆様にもよろしくね、ハイ、確かに——じゃあ、さようなら」

× × ×

張り切った塚本君の、行々しいカメラ道具一式の嵩高いのに辟易し乍ら、私達はひろ子を待っていた。私は今日はカメラ一つの身軽さである。準備万端、塚本君が整えて、大きいボストンバッグに携えている。

駐車場のない場所だけに、私達はタクシーを拾うつもりで、今日は車でこなかった。

大阪市内の行きつけの旅館で撮る予定だったからである。

「遅いですね。」

塚本君は何回目かの腕時計を殊更に見てつぶやいた。初めて会う、竹野ひろ子に、心は逸り切っているらしい。

「せいては事を仕損じるよ。」

「善は急げって云いますからね。」

「フフ、これが善かね。」

私は禅問答をしている様で、可笑しくなった。和歌山からの特急が、ナンバに到着したのか、南海電車の降車口から、ぞろぞろと人

が吐き出されて来た。

人の義れを、喫茶の二階から、私は凝視する。

まぎれもない。竹野ひろ子が急ぎ足に、ブリーツのスカートをはひるがえして横断して来る。

「来たよ。」

私は、自分の嬉しさを隠すように、塚本君の肩をドンとどやしつけた。

「えっ、来ましたか、どれどれ、どこに——」

「喋べっているうち、ホラ、もう上ってくるさ——」

大柄なひろ子が、つむじ風のように、私を見つけてかけよって来た。心が急いだのかうっすら、鼻の尖端に、玉の汗を沁ませている。

彼女は、私に何か云おうとして、フト塚本君の存在に気付いて、口をつぐんだ。

「編集部の塚本鉄三、カメラマンのベテランだ。縛りに





かけては、彼の右に出る者はない。その道でも亦ベテランだよ。」

塚本君は照れ臭そうに頭を下げた。ベレー帽ぐらい脱いで挨拶すればいいのに――。

彼女は出鼻を挫かれたかのように、フト白けた顔付になった。きっと、私一人だと思っていたのに違いない。

私だけでなく、今日は亦、更に一人、異性に肌を見られる羞恥が先に立ったのか、困惑げな顔付で、軽く頭を下げ乍ら、そっと瞳を伏せた。

塚本君はカメラマンの、彼特有の癖で、ジロジロと遠慮なく、まるで肌までも透視する程の熱っぽさで、ひろ子を見つめていた。

その眼を感じてか、彼女は私に、もの言いたげにした唇を、再びカキの殻のように閉じて、頭を垂れた。

一度、つき合えば、塚本君の馬鹿正直で、純情で、フェミニストな、いゝところがすぐ分るのだが、何しろ、とっつきがこの様にジロジロやるので、誰しも最初は、警戒し敬遠するらしい。

梨花悠紀子など、今では、すっかり塚本君びいきで、私には其の後、トンと音沙汰ないけれど、彼が電話すると、何をおいても飛ん



で行くらしい。

非道い緊縛をし、逆さ吊りのような人間放れた行為をしても、その行為の合間にフト覗く、いたわりの気持が、一連のモデル嬢の心に、しみじみと、つたわって行くのだろうか――。

塚本鉄三とは、誠に以て、得な性分に生れた奴である。

「辻村さん、おひとりだと思ってましたわ」  
竹野ひろ子は、やっと思ひ切ったようにそう云って、軽く、うらめしげな目で私をにらんだ。



「いや、僕が、是非って頼んで引っ張って来たんだよ。彼は、嫌だ嫌だって、尻込みしていたんだがね」

塚本君は、そうだそうだと云わん許りに大きくうなづく。チェッ、勝手にしやがれだ。「じゃあ、そろそろ出掛けようじゃないか」

塚本君は、ひろ子のそんなデリケートな神経など無視して、そわそわと立上った。一刻も早く、彼女の豊満な裸身を拝みたいらしい。

その気配に氣押されて、彼女も不本意そうに立上る。

氣の早い彼は、伝票を掴むと、両手一杯の道具を抱えて、せかせかとレジスターに近附き支払いをすませると、トントんと先に下へ降りていった。「わたし——厭だわ……」

ひろ子はゆるゆる階段を降り乍ら、そっと私の指に指をからませて、ぎゅゅとしめつけた。

「無視すればいいのさ。奴はカメラを操作するだけ。君の体に指一本触れさせないよ。いゝものを撮ろうと思えば、カメラ屋はカメラ——、私は縛ったり、構成したり……。そうしなきゃあね。貴女が満足する様に、今日は色々準備して来たよ——」

私の囁やきに、頬を染め乍ら、ひろ子はそれに対して一言も応えなかった。唯、指先の力が一入強く、私の小指をしびれる許りにしめつけて、その意思を伝えていた。

理知的な面が影を潜めて、そこには情熱のおもむく儘に被處に耽溺しようとする一個の若い女性の赤裸々な姿が浮き上って来た。決断して、ひろ子は指を離すと、私の先に立って裾をひるがえして、リズムをとり乍ら階段を降りていった。

× × ×

塚本君の持参した長襦袢の上から、太い縄で後手に尋常に縛り、猿轡を嵌めて、一向感激の色なかった竹野ひろ子が、パンティ一枚にして、全身にビニール布を巻きつけて、その上から、綿々と太縄で緊縛して行った時、初めて強い反応を示した。

透明のビニール布の下で、豊かな双つの乳房が激しく波打っていた。閉じた脛が、微か





にヒクヒクとけいれんして、喘ぐような呼吸をした。

容赦なく、私はその唇に透明なナイロンの猿轡をはめた。呼吸する度に、ナイロンが、唇の辺りで、ペコペコとへばりついてはふくれた。頭の下に、ほんの僅かの空隙をつくっておいて空気を流入させたが、徐々に、ひろ子の顔は紅潮し、大きく息を吸う度に、肩がゆれた。

「苦しいかい」

ひろ子は微かに首を横に振る。

「呼吸が出来る？」

そっとうなづく。

「これを撮り終えたら、次は古川裕子だよ」

私は塚本君に眼くばせし、悦楽に苦悶するひろ子のポーズをねらわせた。彼のOKの手が挙ると、私は太い縄をといていく。ナイロン布はぐっしりと彼女の汗に濡れていた。

フーッと、深く深く、ひろ子は大きく深呼吸した。

おしめカバーをはかせ、黒い眼鏡をかけさ



せ、頭部から首へかけて、おしめカバーをかぶらせた。猿轡は、生理帯の替ゴムだった。首縄から犂々と菱形に細縄をかけると、ひろ子はくぐもり声で、自分の姿を鏡にうつして欲しいと欲求した。

激しい息づかいが替ゴムの隙間から洩れ、彼女はウットリとした様に、己れの曝し者の姿を鏡に写して見惚れていた。

襖を開くと、壁一杯にはめ

込まれた姿見は、ひろ子の全身を隈なくうつし出している。彼女の眼中には、最早私もなく塚本君もなかった。背をよじって、後手に縛られた我が背を眺め、私達の眼下で、彼女は態々な肢態をとった。彼女の心を去来するものは、古川裕子の小説の文中の一節であり、そして彼女自身裕子になり切って、自己耽溺に浸っていたのである。

待望のおしめカバーが彼女の首許でフニャフニャと、彼女の位置の代るにつれてまとわりついていった。

替ゴムの猿轡に、ゴムの包いを胸一杯に吸って、堪能したようにひろ子は畳に伏した。夢に見、憧れた、この浅ましい我が姿が、ひろ子にとって、どれ程憧れの的だったことだろう。

おしめカバーガールは、漸やく、私達の存在を意識の中に取戻したのか、私のなすが儘に進んで、色々のポーズをとった。





替ゴムの狼嚙を外してやるとひろ子は放心したように、その場にうづくまっていた。

「ビニールの袋に入れるんだ。きつと彼女喜ぶよ——」

塚本君は私の耳にそっと囁やいた。

彼は、エバーソフトを格納する、大きいビニールの袋を、バリバリと拡げ始めた。人ひとりゆっくり這入る大きさはある。

塚本君の意に応じて、私はひろ子の両手足を一纏めにして縛った。太腿と胸が密着するようにかまませ、胸から腰へと、太腿ごとぐるぐる巻きに縛り上げた。人間の御荷物だ。エバソフトの袋の口を大きく拡げると、臀部にあてがい、片手で背中の縄を握って、ぐいと体をこじ上げ、袋の口に臀から入れた。ついで、そろそろと袋をたぐりよせて彼女の体に袋をかぶせて行く。

遂にすっぽりと袋の中へ彼女

は納まった。

袋の口はホックになっているが、外れ易いので、改めて、細い紐で縛り、しっかりと口をしめた。袋の中の僅かな酸素が、数分は彼女に呼吸を与えてくれるだろう。

私は嗜虐に憑かれて、彼女の身体を袋ごと抱きかゝえ腰の辺りまで持ち上げて、ドサリと敷布団の上に投げた。袋の中で悲鳴が走った。不安定な袋の中の住人は、落下の姿勢から、やがて保てず横に倒れた。達磨のように起したり、転がしたり、しばし私は、そこにカメラのある事を忘れ、このプレイに没入した。その都度、嗚咽と悲鳴と、叫喚が袋の中で交錯して湧き上った。

袋にぐっと顔を近づけて、ひろ子の顔色をうかがうと、外気に遮断された袋内の熱気に彼女の額は汗にべとつき、頬はきらきらと涙か汗かぬれて見えた。

これが最後のつもりで、尚も私は袋ごと、彼女を引曳り廻した、ヒイヒイと苦悶の悲鳴が大きく洩れ始めて、私は手を止めた。

袋の口の紐をとき、ずるずると袋から引曳り出した時、彼女は、全身汗にべとついて風呂から上った様に濡れていた。

私自身、ひどく疲れを覚えていた。咽喉が



カラカラに渴き切っていて、私は思わず備付の電気冷蔵庫を開いて、角氷を口に運んだ。一つ二つ、彼女の口にも放り込んでやった。両手足の縄をとき、胸と太腿を密着させた縄をといてやると、浴衣を胸に当てたまゝ、彼女は長々と布団の上に伸じた。

誰しもが、この間殆んど無言だった。私と塚本君との時偶の言葉も、カメラアングルがライトの事ぐらいで、私の行為を彼は適当に撮っていた。

「彼女、一休みすれば、もう少し撮ってい、だらうね——」

飽くことなき塚本君のファイトである。私はなげやりにうなづく。

精魂を使い果した後の様であった。あのポリニームのある、ひろ子の肉体を二度三度抱えあげては投げる、その労働に屈したのであるうか。

塚本君は、疲れの見た竹野ひろ子に近寄り、独りつぶやき乍ら縛りにかゝった。彼女は最早、なすが儘にされている。

逆海老縛りや、顔にX字にかけた黒紐の緊縛にも、私は手出しする事なく、慢然と呆然と、それを眺めていただけであった。

ファイター塚本君は、早撮りで、パチパチ

と半時間程の間に二三本のフィルムを消費していた。私のカメラの中では、一本のフィルムが、一枚の彼女の肢態も映像にせず、あくびをして眠っていた。そうだ——。今日は私は一枚も撮ってはいない。只管に、ひろ子の緊縛に時を費やし、ひろ子の趣味に合致する様全力をあげて奉仕していたに過ぎない。

水着の彼女にビニールの細い電気コードが、強く喰い込んでいるのを見つめ乍ら、私は彼女の執拗な耐久力と被虐に耐える肉体に感嘆していた。時間にして二時半——、

次々彼女は手を代えて、縛り続けられ乍ら、時には苦痛の呻き洩らしても、一向にやめようと云わないのは、どうした事だろうか。

彼女の体内に住む、被虐の執念が燃え尽きる迄、緊縛のプレイは続くのであろうか流石にタフな塚本君が、タオルで

汗拭い乍ら、フト思い出したように私に声をかけた。







「辻村さん撮らないの？」

「撮る必要ないよ。君の手ですっかり撮り尽したじゃないか——」

「じゃあ、今日はこの位にしておこうか。」

それに応えず私は竹野ひろ子に云った。

「止めますか——」

「ええ、どちらでも……」

いゝと云うのか——、驚いたこれは——。

縛られた儘、彼女は凝固したように、その態勢を愉しんでいるかのようであった。

x x x

街は日暮れていた。

ミナミの空は明るく赤く光っていた。アルサロのネオンが夜空にくっきりと点と線を書いては消していった。塚本君と別れて、私とひろ子は御堂筋に面した洋酒喫茶で、秋の雰

囲気にひたっていた。

一杯のジンフィズが、ひろ子の眼蓋をほんのりと紅に染め、私も数杯のオンザロックで酔いを感じていた。酔いがひろ子の口をなめらかに、度ぎつくした。

「私、マンキツしたわ。」

「えッ、マンキツ？……」

今日のプレイに満喫したのだと、納得するまでに数十秒要した。とかく才女は難かしい事を仰有る。

「又、お目にかゝれますか？」

「ええ、いつだって……」

「私、お願いがあるの——。写真とるの、もう沢山、だから今度は辻村さんだけと、カメラなんかにならずにわされず、ゆっくりプレイをたのしみたいの。でないと、室内の気分こわれちゃうわ。」

「……………」

「そうでしょう。気分がのりかけたら、あゝしろ、こうしろと、いろんなポーズばかり注文されて、ちっとも、私の心なんか汲んで下さらないもの——」

「そりゃ、写真をとる為にはね。彼だって精一杯、いゝのをとりたいたいのには山々だからネ」  
「私、モデルじゃないわ。今日だって一円の





で、貴女を満足させたんじゃないかったかな」  
「フフ、随分とったわね。私、教えていたけど、フィルム七八本はとったわよ。どうせ塚本さんたら、ポツポツあれを本に發表するんじゃないだろうね。」

「早く見たいだろう？」

「見たくもあり、見たくもなしだわ——。ね」

「だから、努めて貴方の希望に添うよう努力したつもりだ」

「嘘！ 貴方は半分だけで、あとはずっと、うしろで見ていただけないの」

「被虐の美しさに見とれていたんだよ」

「うまいこと云って——」

「けれど、カメラでとるからこそ、色々の被虐のポーズをし、更に又、手を代え品を代え

「早く見たいだろう？」

「見たくもあり、見たくもなしだわ——。ねえ、約束して、今度は撮らないでプレイだけするって——」

「するよ。約束したよ」

「きつと——」

「うん」

私は二人きりの秘密な逢瀬に発展しそうに思えて心が疼いた。

洋酒喫茶を出ると、月が綺麗に御堂筋の空

に澄んで輝いていた。

地上の騒音が余りにもわずらわしく思われて仕方がなかった。私達は手を組んでペープメントを歩いた。何処へとあてもなく、ただ足のむく儘に……。

「あい見ての、のちの心にくらぶれば、昔はものを思わざりけり——って百人一首、知ってる？」

「その気持分るさ。けれど僕には、女房子供があるんだぜ——」

「関係ないわ。そんなこと——。プレイよ…… プ・レ・イ。ね、わかったでしょう」

私はうなづいて、組んだ腕と腕の中で、彼女の指を握りしめた。

カレンダーガールのハスキーな歌声ゴーストが流れてくる。

「おしめカバーガールか——。それも悪くない。善は店げ！ 早速これからでも……、フフ、善かこれが……。塚本の奴、知ったらどんな面するだろうかな」

私と竹野ひろ子は、何時の間にか恋人然と手を組んで心齋橋の人込みを歩いていた。

竹野ひろ子がその夜、終電車と歌山行に間に合わなかったことだけを蛇足とする。



# 緊縛フォト撮影の実際

— 逆エビ縛りの一例 —

塚 本 鉄 三

## 撮影の要領

- モデル……………絹川文代
- 撮 影……………塚本鉄三
- カメラ……………マミヤレフ・C2型
- レンズ……………セコール105ミリ、F3.5付
- フィルム……………ネオパンSS
- 現像液……………D76・D72
- 印画紙……………シーガルF2
- 照明用具……………ベビー・フラッド二五
- W三個、三〇〇W一個、クリップ三個
- 小道具……………古綿ロープ数本
- 場 所……………十帖と六帖の二間続きの和室

ベテランのベテランぶり

絹川文代嬢のファンは大変多い。その華麗な姿態をグラビヤ口絵に現わすと、発売と同時に夥しいファン・レターが殺到する。この「緊縛写真撮影の実際」にも、登場せよという強い要望があとを断たないので、かねてからベテラン絹川嬢のベテランぶりを是非御披露したいと思っていたのだが、残念ながら、平素至極丈夫だった彼女が今年の本の芽時頃より、働き過ぎと遊び過ぎがたたったのか、身体の調子が悪いということだっ





たので、五月、六月の絶好の撮影シーズンを徒らに無為に過ぎてしまった。



七月、八月と酷暑の候となって心配していたのだが、暑さにも負けず、このところ彼女はずっかり以前以上の元氣さに回復したということなので、九月二日の土曜日久方ぶりに誘いをかけると、早速、やってきてくれた。

今年は一度も海へ行かなかった、というだけあって裸になると抜けるように肌は白い。「色の白いのは七難かくす」と云われるが、女の色の白いのは、全く好ましい。新緑初夏の候をずっと家で手芸をしたり、テレビを見たりして過していたというだけあって、元々色白のところへもってきて、陽に焼けないのだかクリーム色の肌が写真電球の光線にキラキラと輝いて、目のくらむような美しさだ。

勿論、身体全体が白いのだが、足や太股、それに胸のあたりが殊に白い。写真に写すのだから、白くても小麦色でも黒くても構わないようだが、女の肌の健康的な白さというものは、見ていてもほのぼのと楽しい。写真だけを見ても、肌の白さがよく分るだろうと思えるくらいの白さである。

その真白い肌に縄が掛って締めつけら

れると、その附近がほんのりと桜色に染まる。これは、肌が絹川文代嬢のように真白で





ないことにはよくわからない。白くて柔軟な餅肌、これが彼女の肌を表現するのに丁度恰好の文句である。

彼女の性質は明るく陽気である。そして本誌の口絵に登場してから大分になる。今ではベテラン中のベテランとして、押しも押されぬ地位を占めてしまった。私は彼女の全身の美しさを、「緊縛」というモチーフを通じて、立派な作品として残しておきたいという意欲にかられる。

今日は、彼女の手足の美しさを強調する意味で逆エビ縛りの一つ方法を順を追って撮影していった。このポーズは「海老責め」と同様、長時間放置されたときに、最大の苦痛を現わす。よく読者から、完成されたポーズでは縄の掛け方や配り方が、どうしてもわからないので、分解した写真にしてほしいという要望があるが、そういった希望の一部でも満たすことが出来れば幸いである。

### 撮影の実際

ライトは二五〇Wのベビー・フラッドを天井から一灯、左右四五度の角度から二五〇W一灯、三〇〇W一灯の計三個を配した。被写体との距離は二―三米。

カメラは六帖の間に据え、シャッターを二十五分一秒にセットした。フィルム六六判十二枚を連続で撮影してしまう予定なので、最初ピントを合せた位置でカメラを三脚にすえ移動しないことにした。被写体も殆ど位置を変えないので、一応、この態勢で連続撮影することにきめる。

さて、撮影の準備が万端整ったところで、愈々緊縛にかゝるわけであるが、使用のロープは約十米のものを二つ折りにして用いた。先ず、うつ伏せにした彼女の左手を逆にとり、その手首に縄を三巻きして止める。ピンク色に奇麗にマニキュアした指が、縄を締めつけるとヒクヒクと動く。引きあげれば、手首が水平以上に肩先近く逆手になる柔軟さだ。

続いて右腕をも逆にとり、素早く縄を一巻き二巻きとからめてゆく。ぐぐぐと縄を

持ちあげれば、よく手入れされた真白い指が痛さに、ふるふると私の目の前で痙攣する。







すらりと伸びやかな美しい指であるだけに、

もっと、もっととひどく虚めてやりたい気持ちに

かられる。両の手首を引きあげる度に、畳に顎をつけた彼女は「う、ううう」と呻めく。甘い息がそこから洩れてくるような気配がする。三回、四回と、繰り返すと縄が手首に次第に喰い込んで、指先が青白く血の気を失ってくる。

「うゝゝ、手首が痛いワ」

と、ベテラン文代嬢も思わず声を出す。然し、緩めてくれとも解いてくれとも云わないのはさすがである。まだまだ、逆エビ縛りの序の口であるからだ。

両手首をきっちりと締めつけたロープは、右の二の腕から胸を通って背後へ回される。抱え起したときの肌の感触の柔かさこの柔かい肌に、垢じみたきたならしい古ロープが思いきり喰い込んでゆくのだ。

回されたロープを背中中の縄に通して引っぱれば、縄は二の腕から胸に埋れるように喰い込ん

でゆく。彼女は苦しいので締めあげるたびに上半身を起し、「うーん」と声を出す。緩めでは締め、締めては緩め、一筋の縄を操って彼女の上体を上下させる。整った美しい顔が一瞬苦痛にゆがむが、それも、ほんの一瞬间であって、すぐ元の顔に戻る。

縄を引っぱりながら、彼女の顎に手をかけて、ロープを胸の下に潜らす。肘の上に縄が掛って、尚一層彼女の二の腕、胸をぎゅっと締めつける。きつと、相当の緊縛感であろうか、彼女は鼻孔から荒い息を吐きながら、身体を右に左に転がすようにする。それが、かえって、肌に縄を喰い込ますことになるとは知らないだろうか、見ていても、肌が真白で柔かそうなだけに、とても痛々しく見える。喰い込んだ二の腕の縄の附近は、ほんのりと紅色に変色し、丁度、酒に酔った肌のようだ。

ふっくらと肉づきよく肥った指は、まるで蚕のように、縄にくびられて、うごめていてる。もう大分手首も痺れてきたことだろう。私は、縄を締めあげるのを止めて、背中中の真中で結び目をつくる。これで、高手小手縛りの一段階は完了した。次は、足首の縛りである。足首の方は、もう最初から、交叉して組ましてあるので縛り上げるのは容易である。



背中では止めた縄を伸して、左足首へぐるぐ  
ると三巻きし、更に右足首を括る。これで両



手首と両足首は一本のロープで連結されて、  
逆エビ縛りが出来上ったのである。

輝く宝石のような逆エビのポーズが、  
芸術品さながらの美しさで、畳の上に置  
かれている。彼女は両手首と両足首が、  
自分の背後で引きつめられているので、  
もう完全に自由を奪われてしまつて、自  
分自身の意志ではどうしようもないので  
ある。上半身を締めつける激しい緊縛感  
もさることながら、交叉したまゝ、これ  
以上曲らないというところまで引きしほ  
られた両脚、最初から、きっちり括ら  
れ、既に血の気の失せた両手首。今や  
彼女は最高の拘束を受けている。

私は、彼女の頭を跨ぎ、ロープを力ま  
かせに引っばる。目の前に白い両足が、  
ぐぐぐと迫ってきて、彼女の下半身は、  
逆エビに反りかえってくる。如何に踊り  
で鍛えた若い女性の柔軟な身体だといっ  
ても、思えず、口から悲鳴に似たものが  
洩れてくる。

両手首と両足首とが連繫されているの  
で、曲げた両足は伸ばすわけにはいかな  
い。彼女は肩口で畳を支えて、逆立ちに  
なつたまゝ、この苛酷な試練に耐えよう

とする。







どさり、と下半身を畳の上に投げだし、私は縄尻を彼女の背中へはった。このまゝの姿勢で彼女は、どの位辛抱できるだろうか。

私はフィルムの入替えを行うと、ゆっくりとカメラを被写体に近づけた。絞りを16に合わせ、シャッターを殆どした。逆エビ轉りの手足の表情をアップで捉らえようと思ったのだ。絹川文代嬢ほどの美しいモデルだったら、手足のアップをやっても、十分鑑賞に耐え得る。

それに、私は、彼女がこのような姿勢のまゝで、どのくらい辛抱できるかということにも興味を持っていた。それで、殊更、ゆっくりとした動作でピントを合せ、スロー・シャッターで、縄にくびれた足の指先のおのきや握り合わせられた手の拇指の動き、

或は縄を埋めるように肌をへこました二の腕など、肌の生毛のそよぎまでキャッチ出来るほどの鮮鋭さで、レンズを向けていった。

——三分、四分、五分——

私はあくなき非情さを以て、彼女の全身の動きと表情の変化を見守っていた。彼女は一言も発しなかったし、私も一声も発しなかった。只、身動きも出来ない彼女の肌の上を、執拗なまでにカメラのレンズが這いまわり、時々、低いシャッター音が、この静かな部屋に響くだけであつた。じつと、レンズが自分の肌を舐めつくすのを待っている彼女の気持は果してどうであつたろうか。

私は彼女の全身を、最もリアルにフィルム上に印すべく、熱中していった。入れ替えたフィルムの十二コマのシャッターが切り終えられたとき、私は夢からさめたように、カメラを離れ、温かい被写体に触れてみるのだった。

完全に写真を撮り終えたという合図をするまでは、この責任感の強いベテラン・モデルは、じつと、いつまでも、この難行苦行に耐えていたことだろう。

(完)



新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新年特大号

1962年 1月号

(第16巻 第1号 通刊第161号)



## 懸賞原稿募集応募作品

## うつぼかずら

——学名、ネペンテス。熱帯性の  
食虫植物にして葉の先がつぼ状の  
捕虫囊をなす。こん虫を捕えて消  
化する——

巽 羊 三 郎

泥沼の底でのた打つような重苦しい悶えの中で由美子は苦しみ腕  
いた。一度意識が醒めかけたので、由美子はその苦しみの源を確め  
ようとするように手足をわななくさせたが、再び麻酔剤特有の昏冥状  
態に陥ってしまった。

二度目に、漸く夢から醒めたように意識が甦えってきた。だが、  
この夢には続きがあった。恐ろしい悪夢のような現実である。

豊かに盛上った乳房から腰にかけて、粗い、麻のような肌触りの  
胴衣が纏いつき、ひしひしと全身を締めつけていた。両腕は後へ廻  
されて手首のところで縛り上げられ、同じように括られた足首との  
間を三十糎程の短い紐で互に繋ぎ合わされていた。このため由美子

の身体は、膝を打ち曲げただけでは足りずに弓なりに後にのけ反つ  
た儘、殆んど自由を失いかけていた。

“うつ、うつ、うつ”

由美子は思わず呻き声を洩らして、芋虫のように身体をにじらせ  
た。すると太腿にざらざらした粗い布の肌触りを感じた。

(裸にされている)

そう覚ると由美子は、かっと全身が火のように火照った。知らぬ  
間に素肌の上にこんな気味の悪い胴衣を着せられているのである。

由美子の肌から、じりじりと汗が滲み出し、それが瞬く間に胴衣  
の生地吸われてゆく。余程吸湿性に富んだ布地とみえて、まるで



熱い砂が水を吸いとるように、胴衣は由美子の肌の僅かな湿めり気をも吸いとってみるみる膨張してゆく。そして、それは当然のように由美子の身体をひしひしと締めつけてきた。始めは稍きつめのコルセットを嵌めた程度であったものが、やがて、永いこと蒸し風呂に入っているときのような息苦しさを伴って、胸と腹を圧迫してくるのである。

由美子は漸くこの胴衣の恐ろしさを覚って背筋を震わせた。

「た、助けて、誰か来てえ」

由美子は無我夢中でそう叫んだが、胴衣に胸を締めつけられているせいか、声は力弱かった。仮りに思い切り声を張り上げたとしても、厚いコンクリートの壁と、ラワン製の頑丈な扉に遮られて、決して外部には洩れなかったであろう。

どうやら此処は湘南の別荘地帯の一角であるらしかった。しかも地下に設けられた倉庫と思われる一室である。部屋の内部は、暗くてよく分らないが、油の浸みた工作台や、そこに取つけられたグラインダーや万力、スパナなどの工具類、それにバルボルに似た計器や、小型トランスなどの電気器具の類が雑然とおかれていたのが、たった一つの明りとり、厚ガラスを通す微かな明るみの中で認められた。

部屋は少し微臭い臭いがしたが、どこかに通気孔があるとみえて、そこから微かに通う空気は潮の香りがして湿っぽかった。

(やっぱり海に近い所なんだわ)

由美子は休みなく締めつける胴衣の責苦に呻き乍らそう考えた。だけど、何のために、こんな非道い目に合わなければならぬのか、それはいくら考えても分らなかった。彼女にしても、もう十八

になっていた。男があんな時何を考え、何をするかということは、おゝむね見当がつく。

併しそれならば彼等は何故こんな廻りくどい、余計な手間をかけるのだろうか。あの時私に乱暴をしたのは、常日頃青二才のように考えて相手にもしなかった十五、六の坊や達ではなかったか。また、それだからこそあの時、彼等の申し出にいうっかり面白半分に応じてしまったのだ。

五、六馬力の小型ボートは房総半島を左手に見て快く波を分けていた。由美子を含めて四人がともの方へ集ったので、吃水線は深く水中に没して、冷たい飛沫が頬をくすぐった。高校最後の夏休みを、楽しく過そうと考えている由美子にとって、第一日目のこの小事件は、スリルを味わうのに恰好であった。

逗子に別荘を持つまり子に再三誘いを受けて、由美子は約二週間の留守番役を受け、身一つで逗子駅に降り立ち水泳客の雑踏にまぎれて、つい海岸端へ海を見に来てしまったからの出来事である。

どうせ急いで行ってもまり子の所は家ぐるみ留守である。否、一人だけ由美子も顔見知りのつたと云うばあやが残っていて由美子の世話をしてくれる筈であるが、それさえ除けば何の心配も気兼ねも要らぬ現在の状態である。

三十分で沖を一廻りという約束が時計をみるともう二十分余り経っていた。帰路も同じ時間がかゝるとすれば約束の時間を越えてしまふ。由美子は船首を海岸に向けるよう梶取りの少年を促した。今までボートは真直ぐに沖に向って疾走していたのである。海辺ははるか向うにかすんで見え、伊豆の山なみまで、時には波のうねりに隠れてしまふのだった。

“もう約束の時間よ、早くして”  
由美子は胸の動悸を少年達に悟られまいと、平静を装い乍らいった。

“あゝいゝよ、ほら、もう直きだ”



ボートの進む彼方に、赤い小旗を立てた一般の和船が波間にただよっており、その舟板にサングラスを掛けた四十年配の男が寝そべって煙草をふかしていた。

ボートはエンジンを停め和船に横づけになる。由美子は本能的に危険を覚って身体を硬ばらせた。和船の男がむっくりと起直り、由美子の顔をサングラスの奥からじっと見詰め小さな缶の蓋を開けて白い布切れを掴み出す。

“あれえーッ。誰か、誰か来てえッ”

叫んでも甲斐ないものとは知りつつ、やはり由美子は大声で叫びを挙げずにはいられなかった。同時に両脇から少年達に腕をとられて、無理矢理舟べりに仰向けに捻じ伏せられる。坊や達がこんな力を持っていたのかと、今更乍ら驚きと後悔の思いが胸を痛くする。

“だ、だめよ。離してっ、は、はなして”

頻りに身悶えする由美子の鼻先に、にゅっと太い男の腕が延びて、布切れが鼻と口とを覆い、骨張った掌がびったりと頬を包んだ。つうんと鼻腔を刺し通す、強い薬剤の匂い。

“いっ、いやっ。いやいや”

必死に首を振って、もがくと、由美子は口の中で叫ぶ。

“いやいや。いやっ”

ともう一度叫んだとき、急に波の中へ引き込まれるような感じがして意識が遠のいていった。

——あの少年達には、こんな意地悪い仕打ちは出来っこない。あの時だって、私を押えつけるのが精一杯で、



腕や肩を、あんなに硬く震わせていたではないか。きつと、あの男が――。

由美子は苦しい息の下であの男の顔を思い出そうと努めた。しかし男の顔はサングラスを掛けていたせいとか、どうしてもまとまりがつかなかった。ただ、湿ったような暗赤色の唇と、稍々角張った薄い顔とが臉の奥に焼きついていてはかりだった。眼は、眼はどんな色をしているのだろう。冷たい灰色の眼、蛇のように細く冷酷な眼、きらきらと情慾に輝く眼。そんな事柄があとからあとから想像されて由美子は居ても立ってもいられないように思いに駆られた。由美子は再び芋虫のように、冷たいコンクリートの床の上で身悶えを繰り返した。しかし、どんなに跳いても手足の縄目は小緩みもなかった。その上、焦れば焦る程、例の胴衣がきつく締って、まるで蜘蛛の巣に捉えられた羽虫のように身動きもなくなってしまう。吸う息よりも吐く息の方が多くなり、乳房が胴衣の下で激しく上下に弾んでくるのがわかる。

(この儘、息が出来なくなってしまうかも知れないわ)

腋の下から冷たい汗が、ツーツと流れてゆくのだった。

この時部屋の扉が開いて、冷たい外気と共に人の這入ってくる気配がした。由美子は思わず臉を閉じた。恐ろしいものを見る気には到底なれなかったからである。心臓が今にも破れんばかりに音を立てて鳴った。

フェルト底のぞうりを履いたような柔かい足音が、弓なりに横たわっている由美子の背後に近ずいて止った。由美子は石のように身体を硬ばらせて声も出ない有様だった。やがて由美子の頭の上へ、コトリと音をさせて丸盆に乗せた大きな土瓶が置かれ、足音が再び

反対側にもどってゆく。その途端、ふと鼻をかすめた化粧品匂い。はっとして由美子はその後姿に顔を捻じ向けた。確かにそれは女であった。しかも凡そこんな所とは場違いの涼しげな浴衣姿。年恰好も四十を過ぎた年配の、よく肥えた女である。いずれにせよ由美子は喜びに上気した声を思いきり振り絞っていた。

“待って。行かないで、助けて下さい。ね、ねっ……助けてえ”

そんな必死の叫びにも無関心な様子で、女は振り向きもせず扉の陰へ消えてしまう。

再び救いようのない絶望の淵に陥った由美子は今更乍ら胴衣の圧迫をひしひしと身にかけて、切なく身悶えを続けるのだった。

それから十分程して、再びぎいっと扉のきしむ音、由美子はきつとなつて顔を上げ部屋の片隅の扉の方を凝視した。やがて由美子の眼はそこに釘づけになり、みるみる背筋が凍っていった。今度扉を開けたのはさっきの中年の女とは違つて、男、しかも薄暗い部屋の中でさえ、由美子は本能的にあの男であることを覚った。男は緩くりと工作台の方へ歩いてゆき、柱にとりつけたスイッチを押した。天井から吊り下げた螢光灯が二つだけ灯って、由美子を中心に部屋の隅々が明るく照らし出された。

それまで男の動きを追っていた由美子の眼は、眩しい光に焦点を失って硬く閉ざされてしまった。

眼を閉じた今、針のように磨ぎ澄された敏感な乙女の肌は、痛い程明瞭に男の視線を感じ取っていた。露わな肩や太腿は勿論、胴衣の下に息づいている乳房や腰、背中から丸いお尻に至るまで、男の視線に刺し貫かれているような感じだった。

“ああッ。ああッ”

由美子は形のよい唇を半ば開いて呻くような、絶え絶えの悲鳴を挙げた。それは胴衣に締めつけられる苦しさよりも、羞恥という見えない糸で我れと我が身をぎりぎり縛りつけてしまう。その重苦しさに耐えかねての悲鳴であった。

「おうよしよし。苦しいかい、今、水を飲ませてやるから、じっとしているんだよ。」

そう云い乍ら男は由美子の頭の方へ廻った。そう云えば由美子は随分咽喉が渴いていた。だからいつもならば感謝せねばならない男の好意が、今はぞっとする程厭であった。このような姿で水を与えられるということだけではない。男の言葉の裏に何かいやらしい意志を感じ取ったからである。だから由美子は夢中になって叫んだ。

「お、お水など欲くありません、それより早く縄を解いて……か、帰えして下さい。」

「ふっふっふ、折角の頼みだが、当分そうはいかないのだよ。」

「あ、あなたは誰ッ。な、何故こんなことを？」

「ふっふ、それも後のお楽しみに、いずれゆっくり聞かせて上げるとして……。さあ強情を張らず水を飲みなさい。」

男の静かな口振りとは逆に、由美子の額は大きな掌で乱暴に掴まれて無理矢理上向きに捻じ向けられるので、首筋がきりきりと腕れるように痛む。

「あっ……」

由美子が思わず悲鳴を挙げて、僅かに腰のあたりをくねらせる間に、由美子の顔は左右から男の膝に挟まれて、痛い程膝頭で締めつけられてしまう。

「やめて、やめてえっ」

由美子は、叫び乍ら瞳を大きく見開いて、上から覗き込んでいる男の顔を、初めてまじまじと見詰めていた。

それはさっきから想像していたような恐ろしい顔でも、醜い顔付でもなかった。むしろやや硬い感じの角ばった顎と薄い唇とが、整った感じを与える平凡な顔付であった。只、切れ長の細い目が鈍い光を放って由美子の瞳の奥を覗き込んでいるような感じだった。

男の強い視線と出逢うと、由美子は硬く硬く唇を噛みしめ、金輪際口を開くものかと歯を喰いしばった。男の一方的な仕草が、由美子の心を踏み躪り、頑なな抵抗に踏み切らせたのである。

しかし男は、いとも簡単に由美子の意志を挫いてしまった。

男は右手に土瓶の弦を掴んで持上げると、左手を延ばして、拇指と人差指の腹で、物干鉄でもつまむように由美子の小鼻のあたりを軽く摘んだ。

「うゝッ。う、う、う。」

白い咽喉をひくひくと上下させ、堪りかねて唇を開く。同時に土瓶の口が、咽喉の奥に直接冷たい水を送り込む。水といっても、実際はよく冷えた番茶なのである。

「ぐうッ／ぐ、うゝゝ……」

ごぼごぼと咽喉が鳴って、濃緑の液体が半分は食道へ、半分は唇の外に溢れ出す。

絶え間なく注ぎ込まれる液体に、由美子は激しくむせ返える。しかしそのむせ返える胸でさえ、苛酷な胴衣の圧迫のために思うさま震わすことも出来ない有様なのだ。

男は由美子に一息つかせて、再び土瓶の水を注ぎ込む。

「ぐっ、ぐっ」



と由美子の咽喉が鳴る。

“いやっ、いやっ……”

無我夢中で叫ぶ声までも、注ぎ込まれる液体と共に身体の中へ吸い込まれてゆく。

男は由美子の呼吸をはかって気長に作業を続けていった。

土瓶の水があらかた尽きる頃は、由美子は、それこそ息も絶え絶えという所まで追いつめられていた。

男はぐったりした由美子の身体を離し、手を延ばせば届く程の近くから、改めて由美子を鑑賞し始めた。

由美子はもとも肉付きの良い方であったから、きつく締った胴衣との境い目などは、肉がくびれて、その分が外にはみ出すように盛上っていた。といっても贅肉がついているわけではなく、全体が程よい硬肥りの美しい身体なのである。四肢はのびのびと発達して優しい丸味を帯び、十八の娘盛りが匂い立つばかりの、清純な色香に満ちていた。

殊に胸の双つの隆起は、友達にしばしば羨ましがられる程、美しく形が整い、且つ豊かであった。

由美子の身体は後向きに、弓なりに反っているの、乳房は自然前へ突き出た恰好になって、胴衣をこんもりと脹らまし、激しい息使いと共に、上下に波のように揺れ乍ら、その形を強調していた。

男は四十男の執拗な視線で、由美子の身体を隅々まで眺め廻し乍ら、何事か由美子の姿態に変化が現れるのを待つ様子だった。しかも、その変化は案外早くやってきた。

ものゝ十分とは経たぬ間に、由美子は下腹を走るある種の鈍痛に、思わず悲鳴を洩らし太腿を互に密着させて全身を慄わせた。それは

思いもかけぬ生理の欲求であった。耐えようにも耐え得られる性質のものではないのだが、由美子は歯を喰いしばって無理にも耐え抜こうと決心した。胴衣の苦しさも、手足の縛しめの痛さも忘れ、由美子は懸命になって小用を耐えた。

男はそのような由美子の身の動きを、微かに唇を歪めただけの冷酷な表情で見守っていた。彼はもう直き、相手の肉体が到底堪え切れない限界に達することを知っていた。

彼は、ついさっき由美子に飲ませた番茶の中に適量の利尿剤を混ぜ合わせておくことを忘れなかったし、よく冷えた番茶が案外利尿的な効果を顕わすことも知っていた。第一、彼女は、もう四時間余り冷たい床の上で転がっているのである。

由美子の決心とはうらはらに、下腹の飽和感、激しい痛みを伴って、上げ潮のように確実に高まっていった。

“うっ。あ、あ、……うっ……”

由美子は、消え入るような悲鳴を洩らしたが、この際、声を立てることも禁物であった。勿論身体を動かすことなど、最早や不可能だった。下腹を錐で揉み立てられるような疼痛がうづき廻り、火をつけられたような灼熱感が、その合間を縫って走る。もう意地にも何にも耐えるすべがなかった。肉体が自らの緊張に敗れ去る限界が、もう、すぐそこまで迫っていた。愚図々すると、死ぬ程羞かしい醜態を演じなければならない。

“ト、トイレへ行かせて……”

普段なら到底口にし得ないような言葉が口を衝いた。

しかし男は、身を切るような思いで由美子が口にした、その哀願も、聞えたのか聞えぬのか全く無表情なのである。

“ど、どうかトイレへ……お、お願い。はやく……”

由美子は再び声を慄わせて哀願した。ともすれば緩みそうになる全身の筋肉を引立て、太腿を硬く合わせることに、由美子は辛うじて最後の一线を守っていた。

“おやおや、トイレかい?”

男はわざと緩くりした口調で云った。

“この部屋に、そんな設備などありはしないよ。まあいゝ、恰度女物の便器があるから、それで用を足さして上げよう”

男は工作台の下から、平たい瀬戸引きの便器を引出して由美子の足元に置いた。ひやりとした瀬戸の感触が由美子の下肢に触れた。

“い、いやです、そ、そんな……”

“我儘を云うもんじやない、あんたの両手は当分自由にしないつもりだから、どうせこれからは人の手を借りて色んな用を足さなければならぬのだ。さっき盆を運んだ女が世話を焼くだろうが、今日は始めてだから私が用を足してやろうと……”

“いやいや、いやッ……”

“聞き分けのない子だな、さあ強情を張らずに早く楽にならなさい。その膝の力を抜いて、両足を開くようにするんだ”

“いやですッ、いやッ。あ、あれえっ……”

膝頭に軽く触れた男の手に逆らおうとした途端、飽和点を越えていた緊張の一

線が、あっという間に崩れて耐えに耐えていたものが一気に外に向って押出された。

狂おしいような羞恥の中で、硬ばっていた筋肉が快く緩んでゆき、あられもない行為とうらはらに、由美子の全身は深い快美感の虜となって意識が遠くかすんでゆくのだった。

その翌晩、由美子は同じ地下室の片隅で大きなマホガニーの椅子に座らせられ、据え物かなんぞのように身を竦めていた。

身には僅かに風呂敷大のサテン地の布が腰の廻りに巻きつけられているばかりである。部屋の中は四基の螢光灯が灯されて、昨夜よ





り一層明るく由美子の哀姿を照らし出していた。

昨夜から一刻も外されたことのない両手の縛しめは、ここでも当然のように左右の手首に硬く喰い込んだ儘であった。そればかりではない。手首は椅子の背の上部を越えて、背後のフレームにしっかりと括りつけられていた。このため由美子の両腕は顔の両側に高く差上げた恰好となり、真白な上膊部を余すところなく剥き出しにしていた。

椅子は中世風のひどく古めかしいものであったが、ところどころに手の加えられた跡があり、その部分は新しい材質が取付けられていた。細長い鼓形の丸材をいくつか縦に繋いだような四本の脚は、型破りに長く、このため由美子の爪先は床に届かず、宙に浮き上がっていた。

前部の一對の脚には、上下二カ所に黒光りのする皮のベルトが取付けられ、由美子のしなやかな両肢は宙ぶらりんの儘、そのベルトでしっかりと椅子の脚に固定されていた。膝の下で一箇所、足首のところで一箇所、合計二カ所である。

昨夜からの激しい責苦にも拘らず、由美子の肉体はたいした衰えも見せていなかった。それどころか今夜の由美子の肌は、昨夜に比して一層美しい輝きを増してさえいた。

彼女は昼の間、鎮静剤を与えられて十分な睡眠を取らされたし、こうして椅子に括られる直前に、昨夜の中年の婦人の手で、たつぷりと温湯のシャワーを使わせられていたのだ。

湯上りの若肌は生々と甦えり、桜色に上氣した胸元は匂い立つばかりであった。

男は由美子の正面に腰を掛けて座っていた。由美子が括りつけら

れた大きなマホガニーの椅子と比較して、これはまた何と小さくて貧弱な廻転椅子であらう。脚が低いため、男の顔はせいぜい由美子の胸の高さに止まり、由美子を下から見上げるような恰好になっている。男の右脇にはデコラの移動卓子が据えられて、その上に真新しい和筆や洋筆や、色とりどりの筆の類が凡そ五、六本も並べられ、その隣には大小三つばかりの鳥の羽毛が並べて置いてあった。

それがどんな役目をするものか、由美子はもとより知る由もない。彼女は只、極度の羞恥と憎しみを眉間に漂わせて、きつと横ざまに首を振じ向けた儘、男の視線を必死に避けているばかりである。ふっふっふ。今日はお前の聞きたがっていることを色々話してやろう……

男は由美子の乳房のあたりに目を留め乍ら言葉を続ける。

“わたしのこと、お前のこと。そしてどうしてお前がこんな目にしなければならぬのかというようなことをな。しかしその前に、どうしてもお前にしてもらわなければならないことがある。……”

由美子は啖々とした男の言葉を仕方なく聞いていた。そんな説明よりも一刻も早く自由にしてもらうことが先決である。由美子は、それを口に出して叫びたかったが、手足の縛しめの硬さを今更乍ら意識すると、それも無駄だと思ふ諦めが先に立って、黙って相手の言葉の続きを聞くしか方法がないのであった。

“してもらわねばならない事というのは、まず東京のお前の家に手紙を書いてもらうことだ。”

“……………”

“逗子の岡部まり子の家には、今朝早く電報を打っておいた。病氣のため当分留守居役を見合わせるとな。だがお前の家には電報では

具合が悪いのだ、娘が自分で書いた安着の手紙が、どうしても必要なのだよ。”

“そ、そんな手紙……書きたくありません。”

由美子は不安と憤りに堪りかねて、思わず声を高めた。

男は偶然ではなく、私の事情を、ことごとく知りつくしているのだ。それに、この儘何の連絡もなければ、由美子の家では早晚娘の身の上の異変に気がついて、警察等へ捜査願いがなされるだろう。そのことを由美子は昨夜から強く心頼みにしていたのである。

“ふっ、ふっ、書きたくないと言っても、どうしても書いてもらう必要があるのだよ。そうすれば少くとも二週間は誰もお前の居所を突き止めたりはしなくなる筈さ。”

“いやです。そんな手紙、何度云われても書きませんわ。”

二週間も此家に引留めておかれたら、その間にどんな目に合わされるか知れたものではなかった。昨夜一晚ですら、由美子にとっては死ぬ程の羞恥と苦痛の連続であったのに。

彼女は硬い決意を秘めて、痛い程下唇を噛みしめた。

“わしの前でいやということは一切言えないことになるだろうよ、一週間も経てばな……”

男はそういつて、移動卓子の上から先の尖った太い和筆を一本取り上げ、由美子の腋の下のあたりに目を移した。

“わしは、お前をうんと言わす方法をいくつか知っている。辛い思いをせぬ中にもう一度考え直して、素直に手紙を書く気になつてみないか。うんと言え、いっでも両手を自由してやるよ”

“いい、いやです。だ誰が、そんなこと……”

“どうしてもいやなら仕方がないな。まだ時間は充分ある。わしは

明日の朝までに手紙を書いてもらえばいいのだから、ふっ、ふっ、”  
男は含み笑いをして、筆の柄を長目に握り締め、尖った穂先を一方の腋の下に近ずけた。

“あ、あつ、やめてえ……”

由美子は椅子の背に身体を蹴りつけるようにして叫んだ。まさか身体を擦ぐられるとは思ひも寄らぬことであった。しかし、擦られるのだということが解ると、却ってあらゆる皮膚が擦ったさに敏感になってしまった。彼女はがくがくと身体を震わせた。

“ふっ、ふっ、由美子。お前も十八、今が擦りたい盛りだから案外こたえるだろう。まだ始めたばかりで辛いのはこれからだよ。”

そんなことを口にしながら、男は前よりも強く穂先を動かす。

“いやっ、いやっ。あ、あつ、誰か来てえ……”

由美子は魂消るような悲鳴を挙げて精一杯身を退く、退くといつても窮屈な椅子の上での限られた動きでしかない。上半身が幾度も弓のようにのけぞり、こんもりと豊かな乳房が、上下左右に歪んで踊り出す。その乳房から一面に汗が滲み出て、むっと女臭い匂いが男の鼻先に漂うのだった。

男は筆先を一方の腋から他方へ動かす。その途中で可愛い胸のふくらみを緩くりと筆の先で撫で廻してゆく。

“いやっ。あれえ、やめて……く、くすぐったいから……や、め、てえッ……”

由美子の唇から絶え間なく黄色い悲鳴が洩れる。敏感な乙女の肌に取っては、まるで鋭い針の先で肉体を突き刺される程にも感じられる堪え難い苦痛なのである。

“どうだい。もうそろそろ降参して、わしの言う通り手紙を書いて



は……”

男はちょっと責める手を休めて、由美子に声をかける。由美子が人並みに息を継げるのはこんな時だ。彼女は大きく肩で息をし乍ら、それでも夢中でいやいやをする。救いの手を自ら断つような手紙だけは、どうしても書いてはならないのだ。

男は黙って新らしい筆をとり上げる。今度は巾の広い房々した牡丹刷毛だ。どうやら彼は、由美子に手紙を書かせることよりも、びちびちした由美子を念入りに責め悩ますことに興味を感じてきた様子である。

やがて前と異った。柔かい牡丹刷毛の感触が由美子を夢中にさせ

る。それは腋の下ばかりでなく、首筋や、脇腹など、皮膚の薄い敏感な部分に、あらゆる方法で押しつけられ、撫で廻される。

“いや、いやっ。あっ、止めて、お願い”

由美子は夢中で身を振る。刷毛で触れられる度に、その部分の肌がひくひくと引きつるようになり、それが波紋のように全身に広がって、遂には身体中がとめどもなく震えおののいてしまうのである。鋭く硬い穂先で擦られるよりも、はるかに鈍いが、それだけ羞恥心が頭を出して擦ったさが募るから、由美子は余計辛がって夢中になる。

“う、う、うっ。いやあ……”

彼女はあっちこっちへ顔を振り向けて身悶えする。今、彼女の身体中で自由に動かせるところといったら首から上だけである。

男はつと立上って由美子の顔を固定しにかかる。これから一層強い刺激を与え、するために間違えて舌でも噛まれては、こゝとだからである。

椅子の背の上部には、恰度床屋か歯医者者の椅子のように頭を凭せかける枕状の部分を取りつけてあった。男は厭がる由美子の髪を掴んで、無理矢理そこへ頭を押しつけ、巾の広いリンネルの生地で目隠しを兼ね乍ら由美子の頭を固定してしまった。これで由美子は美しい咽喉元を



一杯に反らせて、顔を仰向けにし、物を見る自由すら失ってしまったのである。

男は再び自分の椅子にもどって、前よりも一層近く由美子に対した。

男の声は由美子のすぐ耳元で、囁くように聞えた。

“ふっふっふっ。今度は今迄とは、ちっとばかり違うかも知れないよ……”

“う、……う……う……”

“今から鷹の羽根の味をゆっくりと味わってもらおう。昔から擦り責めにはこれが一番効くということになっているんだよ。ふゝゝ”

“いやっ、いやっ。助けて、助けて……”

由美子は滑っこい咽喉笛をひくひくさせて、そう叫んだ。けれども、余りにも強く首と胸とが反っているので、折角の言葉も半ば声にならない状態であった。

男はにやりとして卓子の上の、黒い、艶のある一本の羽毛を取り上げた。それは猛禽類の天翔ける翼の一片に相応しく、硬さと弾力を兼ね備えた一流品であった。

男はその効果を験めすように、わざとふっくらした二の腕のあたりに触れ、それから徐々に下方に向って撫で下してゆく。

“あ、あっ、やめてっ。も、もうやめてえッ。”

男の警句が利いたのか、それとも実際に鷹の羽毛がこれ程までに肌を刺戟するものなのか、恐らくはその両方であったろうが、由美子は未だ本格的に責められる以前に、早くも消え入るような悲鳴を挙げ、狂ったように身を跳き始めたのである。そのため、頑丈な椅子が微かに軋んで音を立てた。

男は由美子の必死の様子には凡そ無頓着な表情で、そろりそろりと羽毛を腋の下にずらしてゆく。

“ひ、ひっ、ひいっ……”

やがて由美子の口から、絞り出すような絶叫が洩れた。ジリジリと身をせり上げる彼女の胸元に、玉のような汗が浮んでは流れてゆく。余りの擦ったさに、声が言葉にならないのだ。

男は猶も続け様に腋の下を責め続ける。若い娘の異状な姿態が益々男の嗜虐心を唆り、今はもうその作業に熱中し切って、他を顧ないといった様子である。

“うゝっ、うっ。まって、ま、まって。あゝっ……”

由美子は今にも絶え入りそうな声で絶叫する。意地も張りも氷のように溶け切って、今は只この苦しみから逃れるために、男の要求を受け容れるしか方法はなかった。

しかし、由美子はそれだけの意志表示をする暇がなかった。彼女は絶え間なく擦り続けられるために、悲鳴を上げるのが精一杯であったからだ。

“い、いやっ……う……やめて……ちょっとでいゝから……あ……あゝっ……”

由美子は断絶する悲鳴を挙げ、自分では全く気がつかずに失禁してしまふ。擦ったさを通り越して、既に我慢がならない程の苦痛にまで達しているのだ。由美子は断末魔のように四肢を慄わせる。それでも猶、彼女は自分の苦境を相手に伝えねばならなかった。この儘では息が止って悶絶してしまふ。

“やめてっ……も、もう、そんなに……しな……いでっ……い、云れたとうり……手紙を書きますから……う……うゝゝ……”



由美子は必死の努力を振り絞って哀願する。今にも気が遠くなりそうな瞬間であった。

それでもどうやら最後の願いが届いて、男の手の動きが一寸止んだ。由美子は瀕死の病人が鎮静剤でも与えられたように漸くにして深い息をつく。全身にじっとりと脂汗が浮んで、丸い太腿にピンク色の薄い腰布がひたと纏いついていた。

しかし、これですぐに苦しみから解放されると思ったのは、由美子の独りがよりであった。

男は由美子の両手の縛しめを緩める前に「鼻苛め」を行った。

「鼻苛め」といっても単に鼻だけに限ることなく、顔全体に及ぶ念入りなものであった。

まず目隠しが外され、男は由美子の後ろに立上って近々とその美しい顔を覗き込んだ。

由美子はまだ擦り責めの衝動から立ち直れずに、鼻腔を大きく脹らまして激しい息使いをしていた。形のよい花卉のような唇も半ば開いて、白く可愛い歯並びが覗いている。男は由美子の顔を暫く眺めた後、いとも無遠慮に、その顔に手を延ばした。

やがて顔中があらゆる風に弄ばれてゆく。

これは擦り責めのように苛酷なものではなかったが、由美子の自尊心を根こそぎ覆えすものであった。それに、男の手で直接身体の一部に触れられるのは、これが最初であった。

彼女は極度の羞らいに慄え上って、みるみる耳元まで真赤になってしまった。

“あ……あ……あ……”

男の手で鼻腔を押し拡げられ、奥の方を指で探られたとき、由美

子は思わず悲鳴を挙げた。

しかし男は一向お構いなしに、長いこと中を探って、二つの鼻腔を隔てる骨の強度を入念に指で検した。

鼻だけでなく、由美子は耳朵や口の中まで検査された。無理矢理口を拡げられ、指先で上顎や下顎を弄られた。最後には舌を指で掴まれて捻られたり引張られたり、ありとあらゆる辱しめを次々に経験させられたのである。

それが終わってから、漸く彼女は両手の縛しめを解かれた。二日振りで、初めて腕を動かせるわけである。由美子は両手が自由になるということが、これ程までに人間らしい気持を呼びもどすということに、言い知れぬ驚ろきを覚えるのだった。

彼女が切端詰った境遇の中で、しみじみとその自由を感づいている間に、男は紙と筆とを卓子の上に用意し、準備をととのえ乍ら、別段急ぐでもなく、工作台の上から小型の電気器具を取り寄せて、頻りに点検を始めた。

それはありきたりのテスター程の大きさで中央に電流計があり、いくつかの端子が光って並んでいた。これに接続した小型トランスもありふれたものであったが、只少々変っているのは、外線接続端子に繋がれたコードの長さであった。それは凡そ一米半にも及ぶもので、その先によく磨かれた小さいクリップが取付けられている。男はスイッチを入れて回路を通じ、計器を眺め乍らポイントの接点をカチカチと移動させて、よく作動するかどうかを確かめるのであった。

## 女体切腹小説

十

五

夜

石井章造

十 五 夜

山陰の秋は何時の間にか深まっていた。今宵は仲秋の名月だというのに風はもううすら肌寒く、すゝきの穂もふさ／＼と垂れて風にゆらいだ。

若狭の國小浜は、京に近いだけあって風流の道は盛んで、百五十石の小礫ではあるが岡村源太夫の家でもすゝきを飾り、餅をそなえて月の出を待った。近所の家から琴の音が澄んだ秋の夕空をひゞかせて聞えてきた。あれは嵯峨野にかくれた小督を尋ねて仲国が駒をはやめる件りの一節であろう。

「お父上はお帰りが遅うございますね」  
娘の志乃は月見の棚に神酒をそなえながら

母に云った。

「今宵は御家老様のお邸へお出で遊ばしたから、そう直ぐにお暇するわけにも行かぬのでしょう」

「ねえお母さま。御家老様の御三男の茂三郎様っていやな方ね」

「そのようなはしたない事を申すものではありませんよ。どうしてです？」

「先日道でお会いしたら、わざと私の行手に立ちはだかって、私が右へよけると茂三郎様も右へ寄り、左へ避けると左へと、意地悪ばっかりなさいますのよ」

「で、どうしました」

「やっとすり抜けてにらんであげると、ワッハッハと大きな声でお笑いになって——」  
「ホ、ホ、それはそなたが美しいから、おかにかいになったのですよ」

実際、志乃は小浜藩でも五本の指に数えられるほど美しく、年も十八の娘盛りである。後にも先にもたった一人の子供ゆえ両親の愛情は偏えに志乃に注がれていたが、一人娘にあり勝ちな我儘も云わず、勝気ではあるが利発で、茶の湯、生花その他、女の嗜み一通りを心得たばかりか、小太刀をとってはなかなかの使い手であった。

「それにしても旦那様は遅いね」



「わたくし、途中までもお迎えにまいりましょうか」

「大丈夫だよ。それよりもお支度を調べておきましょう」

親子が案じている矢先きに、

「今戻ったぞ」

と玄関で源太夫の声がして、母と娘がいい合せたように顔を見合せて笑みを交した所へ源太夫が入ってきた。

「これは／＼お出迎えも致しませんで」

「いや、よいよい」

源太夫は何時になく上機嫌で、羽織をぬぎ大刀を妻に渡した。もう五十路に近い源太夫の額にはひたすら御家大事、家門大切に勤めてきた苦勞の皺がきざみ込まれていた。小さな律義者で過ちもない代りには格別の誉れもなく、親の代からの百五十石のまゝだが、それに満足していた。

「何にしても目出度い話だ。早く帰ってそなた達を喜ばせてやろうと思ったがな、御家老から盃を下されたので、むげにも引下れなくてのう」

「それはそれは。して、目出度いとは、どんなことでございますか」

「そちも知っての通り身共の所は娘一人じゃ

によって、養子を迎えて家をつがせねばならぬ。よって、かねて此儀を御家老にもお願い申しておいたところ、殊の外に御心遣いを下されてのう。今日、身共をお召しになってのおおせには、御三男の茂三郎様が志乃に御執心で、是非とも養子になりたいとの御懇望じや。御家老と縁組致すなどとは、思いもよらぬ家門の名誉。御加増も必至じや。これでいよく／＼我家も運が開けて来るぞ」

それを聞く妻と娘の顔色はさっと変った。

「どう致したのだ、変な顔をして、それとも不承知とでも申すのか？」

「旦那様、それは困ったことになりました」妻は志乃が藩中の瀬木求馬と想思の間であることを打明け、この縁談は何とかして断って貰いたいと頼んだ。

「ここな不埒者め。ならん！親の目を盗んで左様な不届なことをしおるとは以つての他、許すことは相ならぬ。」

源太夫は真赤になって怒ったが、茂三郎の妻になるのは死んでもいやだと泣いて拒むひたむきな志乃には勝てず、源太夫は頭をかゝえた。

って帰したのは、それから間もなくのことである。

平蜘蛛のようになってあやまる源太夫の頭上には、山賀の荒々しい声が雷のように鳴り渡った。

「これ源太夫。一たん承諾いたしたのに、その方は二枚舌を使う気か。左様な不義密通は許すことまかりならぬ。よくもこの山賀家をたばかりおったな。この始末はどうつける」

「ハハッ、是非に及びませぬ。この上は拙者腹を切ってお詫び致します。」

源太夫は色青ざめて刀に手をかけた。「たわけ者。その方が皺腹を切ったとて、娘がぬけ／＼と他家に嫁入り致したのでは拙者の面目が立つと思うか。これ茂三郎、そちはいかゞ致す」

いきりたつ父のそばで、腕を組んだまゝ黙って二人の話を聞いていた茂三郎は、その問いに応じてはじめて口を開き。

「父上、一たん約定した上からは志乃どの身共の妻でござる。何のおめ／＼他の者に渡されましようぞ。これから乗込んで志乃どのと相手の男を討果さねば武士の一分が相立ちません」

と刀を取って、ハッシとばかりに柄を叩

く。山賀も、  
「尤もじゃ、討手の人数をつけるほどに存分に致してこい」

と云った。予想以上の家老親子のけんまくに、源太夫はおろ／＼声になり、  
「お待ち下さい御家老さま。娘の首は拙者が



討ちます。娘の不所存は親の不始末、憎からぬ娘とて致し方ござらぬ」

「なんと？。しかと左様か」

「拙者も武士。一旦申し上げました以上は、必ず首に致しまする」

「うん、よくぞ申した。だが源太夫。仮にも伴の妻にと約束した女、ねじり首にも致されまい。その方は娘一人だけであったのう。武士の跡目の者じゃ。武士らしく切腹させさっしゃい」

源太夫はそれを聞くわが耳を疑った。

「な、なんと仰せられます。娘に切腹、あの切腹！」

「せめてもの武士の情じゃ。いやと申さば討手向けるまでのことよ」

普段から上役の命令は御無理御尤で、絶対に服従することに慣された源太夫は、娘の命にかゝわるこの期に臨んでも、脆くも屈従させられてしまった。そゞろに気も顛倒して、よろめくように山家の邸を去った。

「父上、うまく行きましたなア」

茂三郎は父と二人きりになると云った。

「その方は志乃を殺すのは惜しいであろう。だがこれで瀬木の家にも疵をつけ、岡村の家はお取潰しになることは必定じゃ。煙たいも



のがなくなれば我が家は万々歳じゃからのう。父の策略は見事なものであらう」

「いや、全く恐入ったものです。して、介錯には誰を？」

「云わずと知れた瀬木求馬よ」

「それは皮肉なことになりましたなア。ちと妬けます」

「たわけ者め。フッフ……さア、吞直そうではないか」

山陰地方の秋としては珍らしく雲一つない山の端から丸く大きくだいたい色をして月がさしてきた。今宵は虫のすだく音がひとしお盛んである。

源太夫親子三人は、一かたまりになって言葉もなかった。遠くから小鼓の音が聞えてきた。あれは親子睦み合う月見の宴であらう。やがて部屋には白い輝きに変った月が一ぱいに差込み、行灯は片隅ではのかにまたくばかりになった。

「あまりと云えば御無咎ななされよう、いかほどの不始末とはいえ娘に切腹とは」

妻はかきくどくと又激しく泣いた。志乃は涙を拭うと

「お父上さま、志乃は覚悟ができました。決

して未練な振舞は致しませぬ。間もなく御検使もお見えになりましょう。遅れては卑怯のようで面目ございませぬ。さアお支度を」

けなげにも志乃は立って白無垢に着かえ、泣き沈む父母をはげまして切腹の座をしつらえ、静かに時の来るのを待った。

検使として現れたのは瀬木求馬だった。あまりの意外さに源太夫は求馬を責めるのさえ忘れたが、それは家老山賀が情と見せかけて実は求馬を逃れようのない窮地に追込んだのである。志乃はこの世の名残りに一目求馬に会えたばかりか、愛する男のために、そしてその手で介錯を受けることに喜びを禁じ得なかった。求馬は凜として

「今日はお役目にて参上致したもののゆえ、私事は平に御容赦あれ。拙者にも所存がございます。何卒拙者の胸中をお察し下されい」と云った。

支度をととのえるから次の間を拝借したいというので、源太夫は次の間に案内した。志乃は切腹の座につき、帯をとき、しごきで膝をゆわえ、短刀の鞘を払って切先きを一寸あまり出して白紙を巻き、折敷に載せて前に置いた。

「うーん」

次の間から低い力籠った声がした。それは何やら只事でない必死の響きをおびいて志乃はハッと胸をつかれた。

やがて次の間の襖が静かに開き、羽織袴をぬいで着流しになった求馬が蒼ざめた顔をして現れた。白がすりの単衣の腹にはべつとりと血がにじんでいた。刀を杖に足を踏みしめながら志乃の前に坐ると

「仔細あつて着流しの不作法、御免下され」と苦しげに息をついた。求馬が切腹したことは誰の目にも明かだった。志乃は自分と一緒に死んでくれる求馬の志が柔かな胸を締付けると嬉しう。

「志乃どの、腹はこのように切るものです」と求馬は胸を開くと腹の血だまりはどつとばかりに溢出し、その中に腸が青白くうごめいていた。短刀はまだ腹中深く突刺ったまゝだった。

月はいよ／＼明るく冴え、求馬の白緋と志乃の白装束とが月の光の中にたゞ二つだけがあるかのように照し出された。

志乃は意を決して何のためらいもなく双肌を抜いた。

十五夜のころ／＼とした月の光を浴びた乙女の肌はいゝ様もなく美しかった。

△〔告　　白〕▽

## 女の復讐

山　　岸

操

それは一昨年のことでした。

スキーブーム——私も熱にうかされた患者のように、上越は石打に、あまり上手でもないスキーを担いでいきました。その挙句の果が骨折です。

やっとクリスチャーネの真似事ができるかできない位なのに、ゲレンデの一番上から、一気に直滑降で滑り下りてきて、一寸した凹みを生意気にジャンプの真似事をしたからたまりません。真向うからスキーの先端を突込み、膝骨にひびを入らしてしまったのです。こういえば簡単ですが、その痛い事、まあ、

これは御経験のある方でなければ一寸御想像もつきません。

早速、同行の友人の手で機に乗せられて駅まで下り——観光地のゲレンデは大したものです。負傷者の出るのを予想して機まで用意しているのですもの——あわれな姿で東京迄運ばれ、その足でこの方面では定評のある前倉外科病院に入院致しました。

担架で玄関に入り、二階なる病室へ運ばれたため、エレベーターを待っている時、脇を通り抜ける看護婦さんと視線があい、私は思わず「アッ」と叫ぶ所でした。その看護婦さ

んも、一瞬ハッとしたようでしたが、冷い視線をチラと流しただけで、わざと平静を装うかの如く行きすぎて行きました。

確かに川本さんだ。

ああ何という不思議なめぐり合わせでしょう。他人の空似かしら、いや確かに川本さんに違いない。私は側の看護婦さんに聞いてみました。

「あの、今、いらした看護婦さん、何という方でしょう。私、一寸知っている方のような気がするんですけど」

「あ、今の方、川本主任さんですわ」



ああ、矢張り川本さんでした。

「私の担当になってくれなければいいが、こんな哀れな姿を彼女の前に晒したくない」私は神様に祈る思いです。でも、それははかない望みでした。第一回の廻診の折医長先生に付いてきたのは矢張り主任の川本さんでした。

「山岸さん、廻診です」

彼女の声は看護婦と患者という一線が劃されているというの他、何物でもありませんでした。その冷酷な態度に、私はお久しぶりとの一声も出ませんでしたし、彼女もそれを敢えて忌避したとは思えません。

「復讐される」私は、そんな恐怖に戦きながら、一患者としての分を守らされるだけなものでした。

思えば十年を過ぎる前、私は高校の二年であり、彼女は一年生でした。宗教的色彩の強い女子高校、男の先生すら数える程のこの学校では、異性に接する機会殆どなく、思春期の乙女の感情は、誠に不思議な方向に発展するのでした。

ポチャポチャした愛くるしい一年生の川本さんと、長女に生れ何かとお姉さんぶっていた私とは、日ならずして姉妹以上の親密な仲

になったのでした。

いわゆるSというのでしうか。はじめは、下駄箱を通しての文通、やがて休み時間の語らい、休日ピクニック、さそい合わせての映画、やがて、それは友情をこえたものとなっていきました。

そうして一年たった時、私は三年に、彼女は二年に進学し、新たに一年生を迎えたのです。新一年に、横山という少女が入学してきました。一きわ大きな体格、パッチリとした真黒い瞳、男性のようなテキパキとした物の言い方、それでどこことなく、あどけなさの残る彼女は、期せずして私達の注目の的となるに不思議はありませんでした。

誰が彼女を獲得するか。もうそれは全校生の話題、といつてはちょっと大げさでしょうが、とにかく私達の間では一寸した問題であったのです。

仲のよかった私と川本さん。その二人の間にはいつしか冷たい隙間風がしのび寄り、共に横山さんに注目していたのでした。横山さんはそれほど魅力的でした。或いは横山さんの活潑さの中に私達は男性の匂いを感じたのかも知れません。

生徒会委員長、そしてPTA会長を父にも

つ私が、横山さんを引きつけるのに苦労はありませんでした。偶然電車で一緒になったのをきっかけに、彼女は急速に私に近づいてきました。

横山さんとの語らいの度がふえ、ともすれば川本さんは除外される。川本さんは敏感にそれを感じ、私を敵視しはじめたのも、その頃でした。そして私が声をかけても彼女は、何かに事かまけて私を避けるようになりました。それをよい事に、私は益々横山さんに近づいたのです。

或る日、それは代議員選挙も間近い日、私は放課後、相当遅くまで、ただ一人で生徒会委員室に居残り、選挙資料の整理をやっていました。

丁度、そこにそっと入ってきたのは、外ならぬ横山さんでした。

「あら、今頃どうしたの、横山さん」

「あの、お姉様に、一寸御相談したい事があるの」

お姉様といわれたのは、これがはじめてでした。思わず胸が高まるのをおさえて

「いやね、お姉様だなんて。でも、一体どうしたの？」

「あの、ここでは一寸言えないわ、恥づかし

くって」

「いいじゃありませんの、もう誰もこなくつてよ」

「でも、こんな明るい所じゃあ」

「そう、じゃ、私ももう終うから、——誰も来ない所っていえば、——そうね、運動具室へでも行きましょうか」

私達は、腕を組んで半地下になっている運動具室へ行きました。パレー部のキャプテンをもしている私は、運動具室の管理も兼ねているだけに、何時そこに居ても不思議がる人もなかったのです。

薄暗い電燈の下に向い合った私達

「お姉様、電気消して」

「まあ、どうしたの」

電燈のスイッチを切ると、もう夕刻のほのかな光は、天井近い小窓から僅かな余光を送るのみで、僅かにお互の姿を認め合うに足る程度でした。

「お姉様、お姉様、私——」

「どうしたのよ、泣いたりなんかして」

「あの、さっき、私、——」

「しっかりしてよ、どうしたのよ」

「恥づかしいわ、あの——、どうしたらいいの、お姉様」

「まあ、そう。わかったわ。それはお目出とう。でも、どうしたらいいか分らないの？、困ったネンネエね。どら、マア、これはいけないわ、待ってらっしゃい。はき代えと、バンド買ってきてあげるから、このまま待っているのよ」

私はあたふたと、洋品店と薬局にかけつけたのでした。

やっと一通りの処置を終ると、感極まったか、彼女は私にむしゃぶりついてくるのでした。思わず知らず自然に合った唇と唇、交に甘酸っぱい匂

に、お互に心と

心がしびれ合っ

た時、もう光も

僅かな小窓に、

コトツという小

さな物音を感じ、一瞬、私は

事の重大さを認識してとび出したのでした。

身をひるがえ

して逃げようと

する人影、追

すがる私の手は、固くその襟首を掴んで離しませんでした。無言でしゃにむに逃げようとするのを、ようやく引きずり込んでみれば、おお、その人こそは、川本さんではありませんか。

「盗み見したのね」

私は逆上しました。抵抗する彼女、上背に勝る私は、声もなくもみ合う中、遂に彼女を組み敷いたのです。

「横山さん、何をぐずぐずしてるの。早くおさえて」





茫然としていた彼女も事の重大さに気が付いたか、あわてて加勢し、二人の手でしっかりと川本さんを押さえつけたのです。彼女は必死にもがきます。ともすればはね返されそうになる私達。

「早く、早く、その縄とびとって、足も縛るのよ」

バタバタする足も、手も、二人がかりでやっと縛りあげました。

「あとをつけてたのね、卑怯よ、川本さん、どうしてなの。何故なの。え、何とかおっしゃいよ」

「……………」

「あなた、そんなことしてどうする積り。え。私達の事、誰かにいったりしたら容赦しないわよ。え。分った、何とかおっしゃいよ」

「……………」

「黙ってるわね。今日の事、一切口に致しませんと誓って頂戴。いやなの？ え。返事しないのね。よし、口でいえないのなら体でいわせてやるわ。横山さん、あなたのしてるバンド一寸借して」

「あ、誰か来てーえ」

「声を出すんじゃない、横山さん、ハンカチない、そのタオルでもいいわ、早く、声を

出せないようしましょう」

齒を喰いしば

るのを、二人がかりで無理に口をこじあげ、ハンカチを押しこんで、汗ふきタオルでしっかりと覆い、首の後ろで結びました。これで大丈夫。

「横山さん、こちらしめてやるんだから、しっかり踏みつけて、お尻、ぶってやるから……」

ハッとした川

本さんは身をくねらせて抵抗しようとしています。

「早く、横山さん」

「でも」

「何言ってるのよ。私がするわ、いい事、盗み見した罰よ、観念おし」



うつ伏せにして、めくられたスカート、その下から真白いズロースに包まれたお尻のぞきます。私はつかれたようにその白い二つの山めがけて、バンドをふり下すのでした。

ピシッ、ピシッ

異様な音が壁にこだまし、その度に低い呻き声が口を掩った手拭の下から洩れるのでした。

「どう？。決して口外しないって約束する？約束しないと、もっとおつわよ、どうなの。え？」

苦しい息の下で、川本さんが僅かにコックリするのが認められました。

（いいわ、それじゃこれで許してあげる。もう一度念を押すわよ。いいこと。外したら、ひどいわよ。こっちは二人なんだから、約束を破ったらどうするか分ったわね、分ったら今日は帰らしてあげる」

この時から、この決定的瞬間から、川本さんとの間は完全に別離の状態となったのでした。顔を合わせても挨拶もしない毎日が続きました。

私は卒業して以来十年、久々にその川本さんの姿を、ここ前倉病院に認めたのでした。

全治二週間との事、当分副木を当てたままの絶対安静の毎日です。

シヨックと、生活環境の変化、それにも増して苦痛なのは下の物の事でした。癒着する迄の絶対安静は当然ながら、まだ若い私に

は、人手を借りてのお小水が大変な屈辱に感ぜられるのです。

でも係りの若い看護婦さんは、それは丁寧に蒲団の下で手さぐりで扱って下さいましたし、用がすむ迄は必ず室外で待って下さったのです。

でも、どうしても大便の方はする元気がでません。昨日も、今日も、いけないいけないと思いつつも、それでなくてさえ便秘勝ちな私は、とても大便を取ってもらう気持にならないのです。ああ、トイレにだけ独りでゆきたい、それだけが唯一の望みでした。

こうして五日目、医長廻診、従うのは何時ものように川本主任看護婦。

「大分癒着してきましたね、順調ですから御安心下さい」

「あの、先生、おトイレはもう独りで行ってよろしゅうございましょうか」

「ああ、それは駄目ですよ。まだ副木が当たってるじゃありませんか、今、歩いたら大変ですよ。歩ける時は退院の時、まあそう思っていて下さい、当分安静にね」

ああ、矢張り駄目なのか。この時、カルテを手にしていた川本主任看護婦が

「先生、この方、五日間もお通じがありません

んけれど」

「ふむ、五日ネ。下剤かけた方がいいね」

「下剤を飲まされる。まさかあのいやなヒマシ油ではないだろう。下剤をのめばいやおうなしに下る。その時はもう仕方がない、あきらめよう。でも、あの若い看護婦さんは本当にいい人だ、あの人なら我慢しよう」

こんなことを考えている時、ノックの音もなく扉があいて、見れば、川本主任看護婦が、まだ看護婦帽もかぶれない見習看護婦を従えて入ってきました。見習の手には真白いガーゼをかぶせた小皿がうやうやしく捧げられているのです。注射かしら、私は一瞬そう思いました。

「山岸さん、お浣腸致します」

「えッ、あの、下剤を飲むんじゃないんですか？」

「病院では、特殊の衰弱患者などを除いては下剤といえば浣腸です。吉田さん、さ、やってごらんさい」

ああ、遂に復讐される。

十年前のある日、私の眼前にあられもない姿を晒させられた川本さんは、今や職権の上に立って、白昼堂々と私に浣腸する事ができるのだ。





浣腸は嫌だ、恥づかしい。それもあのやさしい若い看護婦さんならまだしも、事もあるにこの川本さんの手で、而も、見習看護婦に実習させて、自分は冷然とながめていようとするのだ。何の事はない、私は実験動物でしかない。

蒲団がめくられ、寝巻の裾に看護婦さんの手が掛ります。私は身を縮め、顔から耳の辺

りまでカッカッとしてくるのでした。

見習看護婦に指図する川本主任の焼き付くような視線を私はまるで矢を射込まれるように感じました。

「五分位、我慢して下さい」

冷酷といおうか、無情といおうか私は刻一刻強まってくる烈しい便意と斗わねばなりませんでした。早く出ていってくれればいいの

に、ああ、もう我慢ができない。

「あの、あの、もう」

「どうしましたか？ 我慢出来ませんか。今、お薬がきいているところですから、もう少し我慢して下さい」

恥ずかしさも便意の激しさに打消されて、思はずも身をくねらせる私の苦しみ、冷然と見守りつつベッドの傍から離れようともしない彼女。ああ何たる屈辱

「あ、あ、もう、とても」

「我慢できませんのね。じやいいでしょう。吉田さん、便器。そう、もって腰を持ち上げて、あ、それじゃ深すぎるでしょう、そう、その位。」

室外に出ようともせず、見守っているににくしさ。

完全に私はあの日の復讐を受けたのです。

しかもそれだけでは、まだこの屈辱の一幕はすみませんでした。

「吉田さん、あとで検便するから、採便容器にとっておきなさい、そう親指大ね」

ああ、私の排泄物は顕微鏡下にさらされ、恐らく勝ち誇った彼女の眼に、ルーペの下で鑑賞されることでしょう。

## ◇私の体験◇



## 『女装生活』の幸福

長 浜 章 一

三面鏡に向って、きれいにひげ

をそり、アストリンゼント・ロー

ションをぬり、高単位女性ホルモ

ン含有のクラブホルモン乳液をた

っぷりとつけます。首から乳にか

けてもたっぷりとつけまして、白

粉をアゴ、左右の下頬から中央、

額の順序でパフで軽くあててゆき

ます。

男から女への変り始めです。部

屋は白粉の香りで充滿し始め、花

模様の布団の上にひろげたいろと

りどりの着物は云い様のない色香

を發散し出します。頬紅をつけ、

男の四角顔をかくすために、適當

に頬紅をばかして行きます。ぼっ

と女の色香が私の顔に浮かび出します。コールドクリームを唇にぬり、やわらかくして棒紅で花卉のように描き、紅筆でくっきりした線を出すのです。そして眉は丸い弓なりのやわらかい感じに描くのです。三面鏡の中の先程までのごつごつした男顔は消えて、女の素敵にも美しい顔となります。茶のアイシャドウをばかしてつけ、つけまつ毛を致します。完全な女の顔になりました。私の顔は瓜ざね顔で目が細いので、こうして顔をつくろいますと、浮世絵美人の様に美しくなります。喉ぼとけは出ませんので、それはもう、きれいでございます。夜は次第に更けて、ロマンチックな静けさがただよって居ます。

洋髪と和髪二種類のかつらのうち、今夜はどちらにしようかと迷ったあげく、日本髪のをそつと手に持ち、なまめかしく頭にかぶるのです。私は歌舞伎が大好きで、女形のしぐさやあて姿を多く見て

いますので、私が一番美しく見えるしなは日頃研究しています。女のような白い細い手を伸ばして目も覚めるようになまめかしい長襦袢を取り上げ、雪もあざむくかと思われる私の素肌にあたいます。絹の花模様の腰巻きをまとった、その上の長襦袢の消え入りたような、とろける様な肌触り、もうその瞬間から、気も心も完全に女になり切ってしまいます。緋縮緬のあでやかさ、もうどこを見ても、女一人の世界なのです。鏡を見ると、きれいな女がうるんだ瞳で、花も恥じらう長襦袢姿で激しく息づいているのです。

長襦袢の上に大振袖を着まして帯を締めます。帯揚げを締め、完全な芸者姿となるのです。なまなよとして私は部屋を歩きます。私の喜びは頂点に達し、私は女なんだと心に言い続けるのです。一步一步、歩く毎に、素肌に泌みる絹の感触、これは一度経験したら誰だって忘れられないでしょう。



美しい花模様の大振袖は畳に引きずり、着物の裾も紅絹をのぞかせて、桃源境に花が満開といった風情でございます。私は毎晩これを楽します。

歌右衛門文や花柳文や梅幸文たちの完全女装写真を眺めながら、それらに負けず劣らずの私の女姿の幸福に酔うのです。

洋装の時はブラジャーの裏に綿をつめ、コルセットのお尻の部分に綿をつめてふっくらと致します。広い裾にレースをたっぷりつけたピンクのスリッパをまといます。洋髪かつらは毎夜のくしの手入れで美しく波打っています。ナイロンの肌触りの素敵なことは何と云ってよいかわかりません。毎夜の練習で私はどんどん女装が上手になってきました。一般の女より色気が出来てきた様です。私は主婦と生活別冊のきものと和裁という本を買って勉強し、和服地や絹糸を買ってきて、体格に合わせ自分で仕立てるのです。振袖も

長襦袢もスリッパも私が仕立てたのです。男物のパンツは仕立方がまずいので気持ちが悪くて仕方ありません。男姿の時でも下着は必ずシユミーズです。目もさめる様なピンクのスリッパなのです。それの方がずんと心持ちがよく楽しいものです。でも男姿よりも女姿の時の方が多くなりました。女装が板につき、習慣になりますと、

一刻たりとて美しい着物を肌身から離すことが辛くなり、昼でも女装です。勿論仕事も女としての仕事を運びました。だって男だと云ったって、そう信じられない程、女らしくなったんですもの、それに、現代の東京は男としてよりも女としての方が収入も多いし生き易いんですもの。朝から晩まで美しい着物に身を包んでいますと瞳はじつとりと輝き笑顔は絶えることがございません。

女装生活、男でありながら女として生きることとは何とスリルがあり且つ幸福なことでございます。

う。だいたい乳房も大きくなってきました。腰やお尻の肉もついてきました。女性ホルモンの摂取と女装生活のおかげです。お乳は床についてかかさず揉んでいます。

私は女として昼も働き出して一年たちましたが、皆、本当の女と信じています。何と嬉しい小気味のいいことでしょう。月日がたつにつれ女形の写真もたまって行きます。女物の着物もふえて行きます。男物の品は、もう何一つございません。でも性愛の対象はやはり女なのです。世の男色者（ウルニング）のように同性を好きになるなど、私には毛頭考えられぬことです。私は女装が此の上もなく好きであり、女としての生き方が好きであり、女の体質が憧れなのです。私には強く逞ましいものなどには興味がないのでしょうか、きれいな美しいものが私の心を奪うのです。女装はしていても同性愛者ではございません。私は男性と女性を区別する服装の性別

に大反対なのです。きれいなのを男が着てはいけないという道理はございません。男の着物、女の着物という様に区別せずに、好みの着物を自由に遠慮がねなく着て大道を闊歩する勇氣ある男がふえる様に私は念願しているのです。その点で、私はゲイボーイや一部の男娼に敬意をもっています。

他人から変な目で見られるのが怖ろしさに、陰でそこそと、まるで泥棒でもするようにびくびくしながら女装を中途半端にやっている人々のなんと多いこととでございます。もっと勇氣をもつて、花森安治先生や花柳章太郎丈を見習いたいものです。私には、こういう壁は最早やございません。毎日毎日、好きな柄の着物や洋服で、おしろいの香りをあたりの男にふりまきながら、心よい長襦袢やスリッパの肌触りの幸福に酔って暮しています。

x

(おわり)

## マゾ放浪記

## 美 し き 脅 迫 者

恒 川 文 彦

マゾヒストの私は、この世の中で女に虐げられ、屈辱を加えられること以外に楽しみはないと思っている。もしもこの世に私を奴隷として扱い、女王様の様に君臨してくれる女性が存在しなかったら、私は寂しくて、味気なくて、生きる望みも失ってしまうだろう。

しかし、天地創造の神は、うまい具合に人間を造ってくれたものだ、私はつくづく感謝しないではいられない。この世の中には、私達マゾヒストにとって理想的な女性は、案外たくさんいるのだ。

私がこうした告白ばかり書いていると、

いくら戦後の女性が強くなったと云え、そんなにサド的な女性がいるものか、と思う人もあるかも知れない。こうした疑問はもっともだと思う。私自身五、六年前迄は、空想の世界でしか考えていなかったのだ。

しかし、人間程そのときの環境に左右される動物はないと私は思う。戦場で血も凍る様な惨虐行為を平然とやってのける兵隊が、郷里へ帰れば、良き父であり、評判の孝行息子だった例を私は数多く知っているし、マゾヒストである筈の私でさえ、数年前、娼婦にせがまれて、息も絶えだえになるほど責めてや

ったことがある。私は先天的に女性に対して、根強い劣等感を持っている。それが、如何に相手が娼婦であり、せがまれたからとは云え、どうして、そんなことをしたのか自分でもよく分らない。それ程人間の心理は複雑で微妙なのだろう。

こうした点から私が忠誠を誓った女性達も多少のサド気はあったかも知れないが本格的なサジスチンとは限らないと私は思う。彼女達は私をマゾヒストと知ったからこそ、安心して鞭をふるい、平然として私を奴隷扱いにするが、愛する男性の前では、人が違ったよ



うにおしとやかになると思うのだ。  
私はいまでは、これと思う女性には、大  
胆に自分がマゾヒストであることを告白する

ことにしている。自分の性癖を恥かしいもの  
に思っ、意中を訴えずにおいては、いつま  
でたつても理想の女性は何れられない。私はこ



う思っ、恥かしさを超越しているのだ。

勿論、初めて会った女性に、いきなり、私  
はマゾヒストです、どうかあなたの奴隷にし  
て下さい、などと云う訳にはいかない。そこ  
へ行く迄には、相手の女性にいくらかのサド  
気があるか、じっくりと見極める必要がある  
ことは云うまでもないことだ。

私が相手を求めるのは、最近ではもっぱら  
三流のバーに限られている。売春禁止法が発  
令になる前には、よく赤線へも出掛けたもの  
だが、相手が娼婦では奴隷になった実感が湧  
いて来ないし、かと云って、一流キャバレー  
のダンサーでは仲々きつかけが揃めない。三  
流どころの、少々怪しげな雰囲気泳ぐ女性  
の方が安易に目的を達せられるからだ。

しかし乍ら私が奉仕した女性は、全部バー  
の女性かと云うと、決してそういう訳ではな  
い。始め知り合った女給の軽はずみな放言が  
きっかけで、連鎖的に新婚早々の人妻から、  
女子大生にまで及んでいるのである。

私はこれから、これまでに奉仕した女性と  
の思い出話をして見たいと思う。中には既に  
名前も忘れてしまった女性もいるが、いずれ  
にしても実際の個有名詞を使うことは、何か  
と差障りがあると思うので、例に依ってバー

の名称や女の名前などは仮名を使うとして、特に鮮かに印象に残っていることから、順を追って書いて見たい。とにかく私が選んだ女達は皆若くて美貌だった。私だけの慾目かも知れないが、少くとも十人以上だと思っっている。こうしてペンを取って、今、思い出すいくつかのおもかげを浮かべていると、なつかしくてたまらなくなってくる。若し消息が分つたらとんで行って跪まずきたい気持だ。

だが、人生は二度と繰り返しはきかない。五年前の女性はそういつまでも若いわけではない。容色もおとろえてくるだろう。かえって思い出は思い出として、そと胸の奥にしまっておいたほうがいいのかも知れない。

五年前、私が三十二才の九月の終り頃だったと思う。ホームで電車を待っている私に、「恒川さんじゃありませんか？」

と、声をかけて来た男があった。

私は振り返った瞬間眼を疑った。中学校時代、同じ柔道場へ通ったことのある白木道夫ではないか。

しかし、私の驚きは、それだけではなかった。白木と少し離れて控えていた若い女が、「お久し振りですわね」

と、私の前に立ったのだ。

「あゝ和子さん」

私は思わず声を上げた。彼女は私が馴染にしている新宿のバーに、つい三カ月程前まで勤めていたのだ。

「結婚されたとは聞いていたんだけど、相手は白木君だったのですか？」

「えゝ」

和子は私をみつめてほえみながら

「まだ、きよみさんの処へは、ときどきお行きになりますの？」

「えゝ、まあ……」

私はあいまいに口をにごした。

三カ月前、和子がきよみと一緒のバーにいたとき、私は和子にほのかな憧れを抱いていた。顔がきれいなだけではない。

盛上った豊かな胸や、ひきしまった胴や、くりくりと堅く肉づいた腰に若さがあふれていた。

私は和子の様な美しい女の足許に跪まずいて鞭の洗礼を受けたら、どんなにか幸福だろうと思っていた。彼女こそ、この世で最高の女王様として仕えるべき女性の様な気がしたのだった。しかし、その頃、私には既にきよみが唯一の女王として君臨していた。私が始

めて彼女達のバーに行ったとき、丁度和子は店を休んでいていなかったからだ。

きよみは和子程美しくはなかったが、眼がぱっちりとして男好きのする顔立ちだった。

それとなくホテルに誘うと、一も、二もなくついて来たのには、ちょっとがっかりしたが、ホテルに入って三十分も経つ頃には、すっかり彼女に魅せられてしまっていた。半分は金が目的だったらしいのだが、とにかく彼女は、私の要求する通りに、平然として足を舐めさせ、殴り倒し、私を馬にして乗り廻してくれたのだ。

「きよみさんね、あのひとには注意なされたほうがいいわ。あんたのこと誰彼なしに吹聴しているのよ。あんたがきよみさんにどうされたかってこと、バーで誰一人知らないひとはいないわ」

私はぎくツとした。

「ちよっとつき合ってくださいませんか」

白木にそういわれたとき、私は何故か、来たな！と思った。心の中では何かを期待する気持もあった。私が黙ってうなずくと、二人は私を駅構内の喫茶店に招いた。女の子がコーヒーを運んで来て、テーブルの上に並べ終るのを待って、



「実は僕達、いまの下宿を追い立てを喰っているんです」

と、白木が顔を突き出すようにしながら、小声で云った。

「分ってるよ。いくらいるんだね」

ずばりと言われて白木は戸惑ったように、和子のほうを振り返ったが、和子は素知らぬ顔でコーヒーを飲んでゐる。

「参万円、参万円いるんです」

白木は私の顔を上眼で見上げながら

「若し融通して貰えたら、和子を一日お貸しでもいいんですよ」

「なるほど」

私はこの突飛な申し出にもたいして驚かなかった。プラットホームで和子の殊更にいった言葉の裏からある程度、直感的に予期していたことなのだ。

しかし、私は二人の何もかも呑み込んでいゝ様な態度を見ると、妙な反撥を感じずにいられなかった。これが和子と二人だけの話なら、そんなこともなかったかも知れないが、白木が一枚加わっていると、彼が幼馴染だけに、男としてのプライドがあった。

「じゃア、参万円はホテルで奥さんに小切手でお渡しするでしょう。しかし、あとで君達

の仲がまずくなる様なことはないだろうね。

若し君達が離婚さわぎなんか起してくれても僕は責任は負わないからね」

この言葉は、二人にとっては意外だったろう。白木と和子は、はっと顔を見合せた。

「と、云うと、恒川さんは、和子に何をしようと云うんです」

「そうだね、参万円の買物だからね。まず美しい奥さんのヌードをゆっくり見せて貰いましょう。それからのは、その場になって見ないと分らないですな」

白木は狼狽したように和子を見る。和子はぎゅっと唇を噛んでうつむいた。ややあって和子はきつと顔を上げると、

「あたしはあなた次第よ、あなた、あたしがどんなことされても我慢出来る？」

と、白木の顔を見つめる。白木は苦悶の表情で、両手で頭を抱え込んだ。

それから三十分後には、私は和子を新橋のホテルに連れ込んでいた。

「さア、では約束通り、裸になって頂きましたようか？」

「恒川さんは、本当にあたしをストリップにするつもりでしたの？」

和子は一重まぶたの冴えた目もとを桜色に

上気させながら云った。豊かな胸がかすかに息づいているのを見ると、私はその足もとに跪まずきたい衝動を覚えた。

「そのつもりですよ。大枚三万円との取引ですからね」

和子は大きく息を吸い込むと、おつおつと上着のホックを外した。

「ドアに鍵をかけて下さいません」

云われるまま、ドアに鍵をかけて振りかえると、和子はブラジャーとパンティだけになっていた。

「あたし達、どうしても参万円ないと困るんです」

「しかし、白木君も甲斐性のない亭主ですね。自分の奥さんを代償にするなんて」

「それは仰言らないで下さい。こうしてあたし裸になっているんですから」

「まだ小さな布きれがくつついていますよ」

「あゝ」

和子は小さく嘆息をもらすと、思いきったようにブラジャーを外した。豊かな乳房がぴよんと飛び出したのを見ると、私は思わず頭がくらくらとして、パンティに拇指をかけた和子をあわてて押しとめた。

「奥さん、もういいですよ。やっぱり僕にはこんなことは出来ない」

私は和子の足もとに跪まずいた。

「ストリップは、もういいんですの？」

「もう結構です。和子さんのような美しいひとに、こんなことしようとした僕が間違っていました。僕はやっぱり足で踏んずけられたり蹴り飛ばされたりされるほうがいい」

彼女の私を見下す瞳が、気のせいか、きらっと走った。唇の端にふてぶてしい微笑を浮かべている。

「じゃ、鞭でひっ叩いてあげるわ、あんたは鞭はあまり好きじゃないらしいけど、あたしに全ストをさせようとした罰よ」

和子は手提の中からタオルを取り出すと、それを私に示した。

「シャツを取って、両手を前に出すのよ」

云われるままにすると、両手を縛って、ズボンからバンドを抜き取った。

「あまり痛くない様にやって下さい」

云いながらも私は既に妖しい期待に胸がふくらんでいた。和子は、ふふふ、と、小さく笑っただけだった。パンティ一枚の女体の前に俯伏せになると、彼女は思いきった一撃を私の背に加えた。本当に激しい、思わずとび

上る程の第一撃だった。

「ま、待って下さい」



私はとびかゝって鞭をひったくろうとしたしかし、両手を縛られたままなので、すぐ



振り離されてしまった。和子はすかさず私の後に廻ると、少し離れて鞭を浴びせかけた。こうなると私は、にわかに激しい恐怖におそわれた。私は両手を縛られたまま、和子の鞭を避けて逃げ廻った。

和子は牝豹のように、逃げる私を追い廻し私が逃げ場を失って壁際にうずくまると、わざと私の傍の床を鞭で鳴らした。これは逃げ廻る私の恐怖心を増大するのに非常な効果があった。

私は和子の隙を伺って、夢中で、傍のベッドの下にもぐり込んだ。彼女の鞭を避けるにはそこより他にはない様な気がした。

「出ていらっしゃいよ」

和子は覗き込みながら云った。

「出て来ないと、もっとひどい目に合わせるわよ」

それでも私が黙っていると、和子は片方の足を私の顔の前に差し出した。

「あんた、これ欲しくないの？」

そうされると、それが毘だと分っていても顔を出さずにはいらなかった。

足の甲に口づけしようとするのを、和子は私の頭髪を掴んで、ずるずると引きずり出した。

「逃げようたって、逃げられやしないんだから」

和子は私を床の上に仰向けすると、片足を私の胸にかけ、更に片方の足を額の上に乗せて仁王立ちになった。

「あんた、こうされるのが好きなんですってねえ？」

和子は、傍の椅子の背につかまって私を見下す。瞳がきらきらと惨忍な輝やきを帯びていた。

「奥さん、苦しい」

私は縛られたままの手で、胸の上の足首をつかんだ。胸が窒息する程苦しく、固い床に押しつけられた後頭部が、骨がくだれるかと思う程痛んだ。

「ねえ」

和子は、私の上に仁王立ちになったまま言った。

「あたしに、もう二万円出さない？ そしたら、もっともっと、あんたの好きなこととしてあげるわ」

私はかっと全身が熱くなったが、はたと当惑せずにはいらなかった。約束の参万円も、私の自由になる金ではない。月末になれば名古屋の本店へ送らなければならない集金の一

部なのだ。社長は私の実兄なのだし、私は東京方面の販売をまかされているのだから、少しくらいのことは兄にちょっと頭を下げれば済むのだが、それにしても足もとを見られたのが嫌な気がした。

「どうなの？ 嫌なの？」

和子は私の上からひよいととび降りると、テーブルの上の皮バンドを取って、私の顔の上で威嚇する様にしごいて見せた。嫌だと答えたらずくにも惨酷な鞭を浴びせる気配だ。

「出します。約束の参万円と合わせて、五万円の小切手を切ればいいのでしょ」

「そう」

和子はにっと妖しい微笑を浮かべると、バンドをテーブルの上に戻した。

「もし嘘なんか云ったら、顔を踏みつぶしてやるから」

白い足が上って私の顔を踏まえる、私がその足裏に口づけをすると、

「だめっ！ もっとしっかり舐めるのよ。あんた、こうされる好きなんでしょ」

云いながら、ぐいと足に力を入れた。

私があさましくペロペロ足裏を舐めるのを、和子は腰に両手を当て、冷やかな眼で私を見下していた。あわれみとも嘲笑とも受取

れる瞳の色だった。

「そうだ、あんた、ハイヒールを履いてこうされるのが好きだってね」

和子はふと思いついたように云った。私におつかおせる様な云い方だが、彼女自身興味を持ってゐるらしい瞳の色だ。

和子は戸口のところからハイヒールを持って来ると、私の顔の横でとんとんと、高いかがとを踏み鳴らした。

「まだ二三回しか履いてないから、そんなに汚れてないわよ」

踵の鋭く上がった黒のハイヒールが、純白のパンティ一枚の和子によく似合う。

「どう、御満足？」

ハイヒールの先で、私の鼻の先をつつく。

「あつ、奥さん……」

うっとりとし見上げる口の中へ、すかさず鋭い踵がねじり込まれて来た。ううっ！ と、私が呻き声を上げるのを、

「あんたって本当に変わってるのね、こんなことが、そんなに嬉しいのかしら」

和子は邪慳に私の顔を踏みにじった。そうして私を犬のようにしてふざけるのが、如何にも楽しそうな様子だった。

荒れ狂う脚線美の下で、私も妖しい陶醉に

浸っていた。身体中が火の様に燃え上って、何処か他の世界をさまよっている様な気持だった。

芝公園に近い私の家に和子が訪れて来たのはそれから十日ばかりたった。まだ残暑のきびしい夕方だった。

電車通りからはそい横丁に曲った路地の奥の小じんまりとした二階建が私の仮住居だった。月のうち二十日位は東京で生活する私は、始めはこの家の二階を借りていたのだが、階下の主人が大阪へ転勤で、引越すことになった際、兄と相談して買い取ったのだ。

「旦那様、お客さまですよ」

婆やに階下から呼ばれたとき、私は丁度風呂から上って、ステテコ一枚で涼んでいる処だった。私が降りて行くと、玄関に和子が見知らぬ若い女と二人で突っ立っていた。

「ああ、これは、どうぞ上って下さい」まさか家まで訪ねて来るとは、思っていなかった。私は狼狽しながら云った。

とにかく二人を二階に招いたが、連れを女を何の目的で連れて来たのか、ちょっと不安な気持だった。

「婆やは、どこか映画でも見て来てくれない

か」

私は台所へ行くと、お茶の仕度をしている婆やに百円札を二枚握らせた。

「こんなことしなくてもいいですよ。わたしは息子の処へ行っていますよ」

金を返そうとするのを、私はとにかく取っておきなさい、と、無理に握らせた。婆やは息子夫婦が近所に住んでいる。息子の嫁とはよく気が合うらしく、私が家にいるときには何時間も嫁の処へ行って話し込んで来ることもあるのだ。

私は玄関に鍵をかけると、婆やが仕度しておいた冷たいお茶を持って二階へ行った。二人は縁側の藤椅子に掛けて、赤く焼けた夕空を見ていた。

「こんな恰好で悪いですね。奥さんもお脱ぎになったら如何です」

云ってしまってから私ははっとした。ステテコ一枚のまま若い女の前へ出た無礼をわびるつもりで云ったのが、あがっていたためかうっかり口がすべってしまったのだ。

「恒川さんは、またあたしをストリップなさりたいの？」

和子は傍の女を振り返って、悪戯っぽい微笑を浮かべる。



「いや、そんなつもりじゃないんです。済みません、失礼をしました」

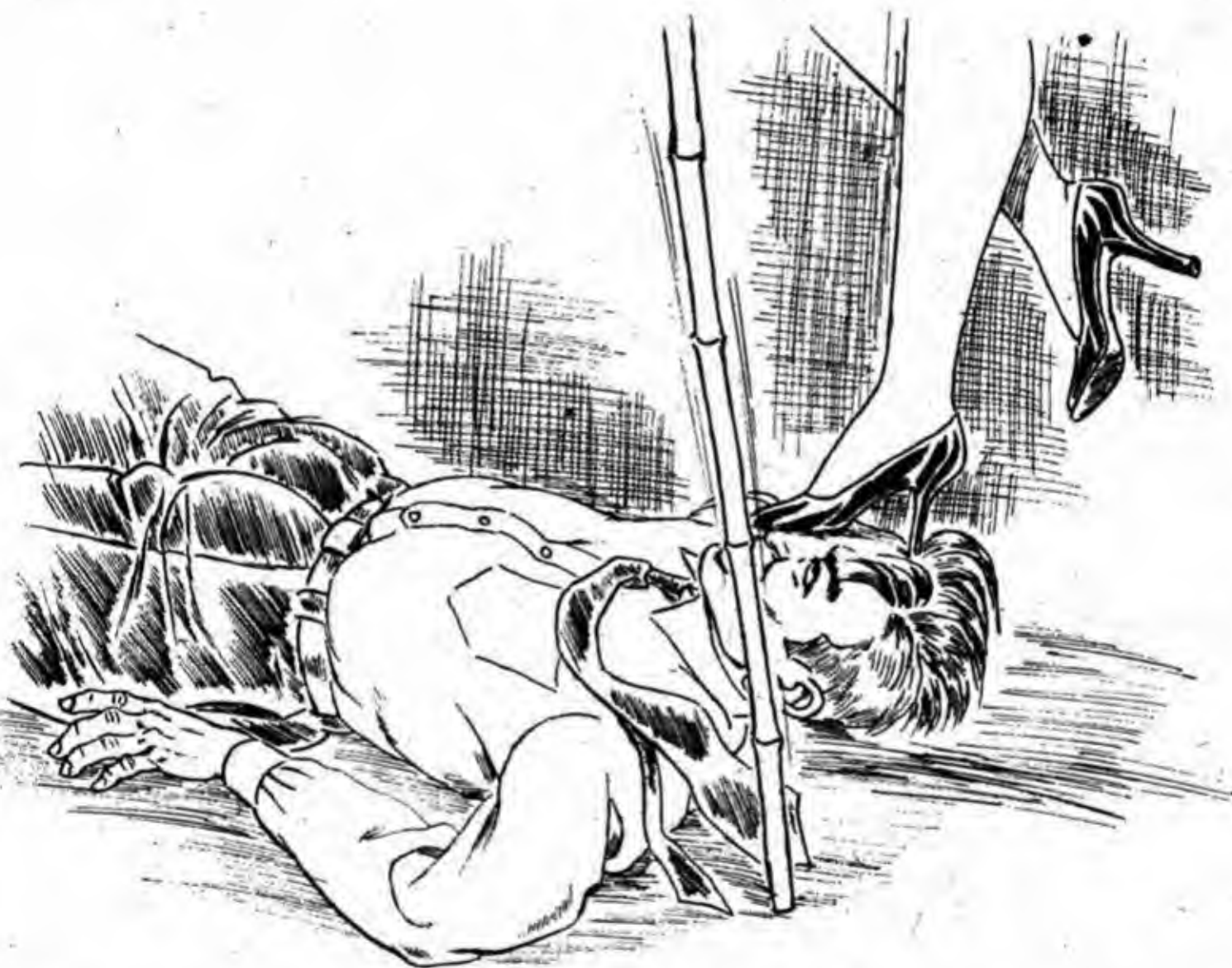
私が真赤になって云うのを、「いいのよ、お望み通りストリップになったげる。あたし達も恒川さんに無理を云いに来たんだからお互っこよ。さア、玲子さんもお脱ぎなさいよ」

それは、あっと云う間のことだった。玲子と呼ばれた若い女は、ちょっと羞らいの色を浮かべたが、和子がシュミーズ一枚になったのを見ると、思いきった様に、これもシュミーズ一枚になった。

「このひと、主人の妹なんですの、あんたのこと話したら、一度会って見たいって云うから連れて来たの」

わざわざ、裸になって紹介を受けたのは、生れて始めてだった。私は苦笑しながら、ともかく頭を下げた。

「あたし、玲子です。お噂はか



ねがね義姉から伺っていますわ」はきはきとした口調だった。ちらっと白い歯を見せて微笑しただけで、頭も下げないのは、頭から私を軽蔑しているのだろう。少し勝気そうな、可愛らしい顔立だった。

それにしても、私が疑問に思っただのは、和子が私のことを、どういうふう玲子に話してあるかと云うことだった。マゾヒストである私が自分の性癖を人に知られるのを恐れるように、女だてらに大の男を鞭で打ったり、足で蹴とばしたりすることも、人に云えることではない。きよみがバーの同僚達に、私のことを話したのも、恐らく私の要求に応じて仕方なくやったように話しているだろう。もし和子がいつかのホテルでこのことを明らかに玲子に話しているとしたら和子と玲子はただの嫂と義妹の関係ではない様な気がした。

「どうか、なされたの？」  
和子の声に私はふと我に返った

「いや、そのお二人があまり美しいんで、惱殺されちゃったんですよ」

「ホッホホ、あんたでもお上手云うこと知ってるわね。じゃア、もっと惱殺してあげるから、そこへ座りなさいよ。そのために特別に準備して来たんだから」

「云われるまま跪まずくと、私の前に立ちはだかった和子は、シュミーズの裾をつまんでひょいと片足を私の頭に乘せた。瞬間、私は思わずどきっと心臓が鳴った。いつかホテルで会ったときの様なありふれたパンティではない。三角形の凄く短かいスキャンティが、腿にびっちり喰い込んでいるのだ。」

「どう、惱殺された？」

「えゝ、完全に惱殺されました」

「あたし達、今日はお金の無心に来たのよ。あたしが二万円に玲子さんが一万円で計参万円、嫌とは云わないでしょうね」

「この前、余分に上げた二万円はもう無くなっちゃったんですか？」

「引越し費用でとんでしまったわ。新しいアパートに入ったでしょ。家具なんかも新調したいし、二万円じゃ足りない位だけど、一度に無理言っちゃア、あんたも困るだろうからね。玲子さんの一万円は学資にするのよ。」

このひと大学の二年生なのよ」

「へーえ」

私は思わず玲子の顔を見直した。そう云われれば、可愛らしいだけでなく、どこか理智的な顔立だった。

「もし、嫌だと断わったら、どうします？」

「玲子さんと二人であんたを拷問にかけるわよ。天井から逆さに吊り下げて、うんと云うまで折檻するのよ」

「そんなことしたら、かえって喜ぶだけです。こちらからお願いたいくらいです」

「あんたは鞭は嫌だったんじゃないの？」

「あまり好きじゃアないけど、きれいな奥さんとお嬢さんの折檻なら我慢しますよ」

「そう……」

和子は天井を見上げたが、そこではどう吊し様もないと見たらしく、私の腕を取って引立てると、階段のところまで連れて行った。

「玲子さんは下へ行つてよ。あたしは上からやるから」

「えゝ」

階段を降りてくると向き直った玲子の手にはいつの間にか女持の皮のバンドが握られていた。シュミーズ一枚の足を踏んばって、鞭をしごいているのを見ると、私はぎゅっと

胸を締めつけられる様な気持になった。

「あんたは頭を下にして、俯伏せの姿勢で腕を立てるのよ。しっかり身体を支えないと、頭から転げ落ちるわよ」

言われるままにすると、和子は麻縄を出して私の片方の足を階段の上の柱から吊った。万一私が腕を支えられなくなったときの用心なのだろう。

「じゃア、行くわよ」

上から和子の声がして、びしっ！ と、第一撃が私の背に鳴った。激しい痛さに、うっ！ と呻き声を上げるのを、今度は玲子の鞭が頭の上を越えて背にとぶ。びしっ！ びしっ！ と、上と下から息もつがせなかった。

鞭の痛さも生やさしいものではなかったが、それにも増して、階段に逆さになって両腕で、身体を支えているのも想像以上の苦痛だった。腕の感覚がなくなつて、とまず、へればたへたとつぶれてしまひそうだった。しかしその苦痛も、眼の前のシュミーズ一枚の玲子を意識すると、不思議なやわらぎを覚えた。

私はうっ！ うっ！ と、呻きながらも、鞭の合間にととき玲子の顔を見上げた。玲子は半ば唇を開け、ちらっ、ちらっと美しい齒並びを見せて鞭をふるっていたが、私が顔



を上げると、いつもついと視線をそらして横顔を見せた。横顔が美しいのを自分でも意識しているらしい態度だった。

「ちょっと、待って」

不意に玲子は鞭の手を止めると、階下の居間へ入って行った。ラジオのスイッチを入れ、たらしく、プロ野球の実況中継が大きな声で流れて来た。ラジオの音で、鞭の音と私の呻き声を消そうというのだろう。さすが女子大生らしい思いつきだと思ったが、これは私の早計の様だった。玲子はもとの位置に戻ってひと鞭当てると、手を休めてラジオに耳を傾けた。

「逆転したらしいわね。五対三よ」

と、うれしそうに和子に向って云った。

和子も同じ巨人ファンらしく、一緒に手を休めてラジオに耳を済ます。ときどき、思い出した様に鞭をふるいながらも、野球のほうに気になる様子だった。

そうしている間も、私は腕が疲れて眼まいがしそうだった。私は油汗のにじんだ顔で形良くふくらんだ玲子のふくらはぎに口づけをした。

「あら……」

彼女は素早く階段にかけた足を引いたが、

しばらくすると、更に一段上に足をかける。何気ない素振りだが、私はとっさにその肚を読み取っていた。

私が玲子の可愛らしいくるぶしから、ふくらはぎへと舐めて行くのを、玲子はわざと素知らぬ顔で、横を向いていたが、急に初めて気がついたように大声を上げた。

「お義姉さん、いやらしいのよ、この人」

云いながらも、しかし、足はひっ込めようともしないのだ。

やっと許されて二階の部屋に戻ると、

「あたし、のどがかわいちゃった」

と、玲子が畳の上に両足をなげ出して云った。

「あたしもよ。恒川さん、何か持ってらっしゃいよ」

和子の云い方は半ば命令口調だった。私はシャツとズボンを着ると、急いで家を出た。

電車通りまで出てジュースを買うと、走る様に家に戻った。タンスの抽出しには、その月の集金の金が現金で二十万円程置いてある。

若し留守の間にそれを見つけられたら、和子はどんな手段を講じてでも、それを巻き上げずにはおかまいだろうと思ったのだ。

「玲ちゃん、そろそろ帰りましょうか？」

ジュースを飲み終った和子の声に、

「そうね」

と、玲子はツイと立上る。

「ちょっと待って下さい」

私は階下へ降りて行くと、上着のポケットから財布を取り出して二階へ戻った。中には二万円近く入っている。その中から一万五千円だけ抜くと和子の前へ並べた。

「半分しか都合出来ませんが、またいずれ何とかしますから」

「有難う、遠慮なく頂くわ」

金をハンドバッグにしまうと、和子は立上って、手早く黒のスキャンティをはき足した。

「今日はもう何もしてあげられないから、その代りよ。玲ちゃんのも脱ぎなさいよ」

「えっ」

玲子が純白のパンティを差し出すと、和子は自分のと一緒に私に投げてよこした。

私は二人を玄関まで送ると、急いで二階に引返した。手にとって見るとまだ二人の体温がこもっている。私は夢中でそれをかき抱きながら、一万五千円はやすいと思った。

(完)

## 秋の夜の想い出

## 少女のお灸折檻 水木清一

それは、僕が五年生の初秋の夕暮でした。

僕はお風呂から上がると、母が取り込んで来たばかりの、まだほんのりとしたシャボンと陽の匂いがするポロシャツを着て、家の石段を下りました。前の家のみどりが郵便受から夕刊を取り出すところを、垣根越しに見た僕は、「みどりちゃん」と、呼び掛け二人で夕飯まで遊ぼうということになりました。

みどりは四年生、僕より一つ年下で、色白の瞳の澄んだ可愛い子でした。よくグリーン系統の洋服を着ていました。

僕とみどりは石ケリをしながら、道路へ出ます。そこは、ゴロゴロとした砂利が敷いてあって歩きにくく、片側は松林で、片側だけ家がずっと建ち並んでいました。

「みどりちゃん、水切りの真似しうか」

僕は急に、よく川や田圃でやる水切りを思い出して云いました。

「あら。だって、こんなお水が無い所では出来ないじゃないの」

みどりが云うのと同時に、僕はもう小石を拾って投げていました。

「よしなさいよ、あぶないじゃないの……」

「大丈夫さア」

僕は、今度はゴルフボール程もあるかと思える石を拾い上げて思いきり投げました。が次の瞬間、ガチャン！ ハツとする刹那、ガラスの割れる音――

「みどりちゃん、ハヤク――」

と云うが速いか、僕はすばやく脇の露地へと隠れると、その儘、胸をドキドキさせながら、そっと裏路から家へ逃げ帰りました。確かに浜田さんか、大石さんのガラスを壊した事に間違いないと感じました。それはそうと、みどりはどうしただろう、僕が夢中で姿を隠そうと、焦りに焦った時も、唯、驚いた顔で

その場に突っ立っていました――。

夕飯も全く旨くありませんでした。僕は一膳で止めると、何かみどりの事が気懸りで、母には、丁度みどりに借りていた本を返しに行く、家を出ました。何時もの通り裏木戸から這入り、夕闇にサフランやコスモスが咲きこぼれる花壇に面したみどりの勉強部屋へと回って見ました。

僕は、ベランダに通じる横のドアを押しながら、「みどりちゃんく」と呼びかけました。しかし、その瞬間、僕の眼に飛び込んで来たあまりにも意外な光景で、みどりがガラスを割った犯人と極めつけられてしまった事を感じしたのです。

みどりはズロース一枚にされ、いやお風呂へ這入る脱衣中、このお仕置に遇ったのかも分りませんが、両腕を後手にされ、洗面所と勉強部屋の境にある廊下の柱に縛られています。



した。胸を二た回りした麻縄は亦、両脚をもグルグル巻きにして、足首の処でギリギリと堅く緊め上げられていました。僕は瞬間、曾って見た事もない光景に、唯々驚愕し、呆然とその場に突っ立った儘でした。しかし、それも両の瞳に涙を溢れさせているみどりと視線が合った時、僕は子供ながらに、その視線のやり場に迷いました。

「あら、清ちゃんいらっしやい」

みどりの母親はふり返り、笑顔で云いました。ゴクリと物唾を飲んで、硬直した姿勢で僕は、横を向いて躊躇しました。横にいた女中のミツエがこの時、

「風が涼し過ぎるわ」

と未だ半開きになっていたドアをボタンと押してしまいました。僕は慌て、

「これみどりちゃんの本……」

これだけ云うのが精一杯でした。僕が差し出す本を女中のミツエは受け取りながら

「みどりお嬢さん、お可哀想でしょ——」

と云った。みどりの母親は、

「清ちゃん、家のみどりちゃん、これから一寸お仕置されますから、そこのお椅子に腰を下して見てやって頂戴」

と云いながらみどりの足下に跪いて、何や

らしている様子、みどりは、

「ママ堪忍して、ご免なさい……、堪忍して……ご免なさい……」

唯、そればかり繰り返し繰り返し、宝石の様なつぶらな、潤んだ瞳からポロポロと溢れ出る真珠の泪が、可愛いふくよかな両頬を伝い、流れ落ちました。

何かぶうんと鼻へ来ました。お線香の匂いです。煙がみどりの足下からすうっと上り出しました。僕は壁の陰に寄り添って、みどりの勉強部屋の壁に掛っているカレンダーに、目を移すよりほかありませんでした。みどりの母親は、

「このお椅子に腰掛けて、清ちゃん。ママはもっと、もっと、良い子のみどりちゃんにしてあげますからね」

みどりの机の前にある椅子を、繋がれているみどりの直正面に出してくれました。

「堪忍して、ご免なさい」を云い続けていたみどりは、急に

「あッっーい、あちちッ、うアッっー……」

と、悲鳴を挙げ出しました。云わずと知れるお灸のお仕置に、今、灸がみどりの両足の小指を焼け焦がし始めたのです。僕の胸は亦もや、ガラスを割った直後のようにドキドキ

と高鳴りました。

「うッ、アーッーい。堪忍して。あアッー！」  
「あなたがガラスを割らないで誰が割ったって云うんです。浜田さんのおじさまだって、みどりちゃんが前に立っていて、あなたが石を投げたのは、間違いなく窓から見たとおっしゃっているんですよ」

僕は壁の陰に隠れて、益々動けなくなってしまいました。みどりを無実の罪に陥れてしまったのは、この僕だ。みどりはなぜハッキリと僕だと云ってくれないのか。そうすれば、こんなひどい折檻も受けないで済むものを……僕は氣も顛倒するばかりに自責の念に駆られました。もう、今さら何処へも逃げ隠れ出来ない。みどりを苦しみから救うため、一刻も速く自分の罪を白状し詫びなくてはいい。しかし僕の心は、みどりの母親の余りにも苛酷なお仕置におののき、狼狽と躊躇、そして焦躁と不安の渦が、ズキズキと胸一杯に押し寄せ、みどりの机にあるペリカン時計の左右にクリクリと動く目玉を、後悔と苛立ちの想いで見つめていました。  
「なぜ、石なんか投げたんです。しかし道路の真ん中で。もし人様に当りでもしたら、大変じゃありませんか……」



「ご免なさい、これからはもうしません。許して……、ママ堪忍して……」

艾は漸く燃え尽きたか、みどりの焦熱の責苦に挙げた悲鳴は何時とはなしに消え、唯、母親に許しを乞う哀願のみが僕の耳を打ちました。

「おばさん、ご免なさい。僕が割ったのです。みどりちゃん、許して……」  
もう僕はどうしようもなく、いきなり廊下

へ飛び出すなり、ペコンと頭を膝小僧までも下げて、一気に云いました。余りにも咄嗟な事に、ママと女中さん、そして柱に縛られているみどりまでもが吃驚したようでした。が、すぐ僕の様子を見るなり、みどりの母親は笑いながら、

「清ちゃん、心配しないでもいいのよ。余所さんのガラスを割ったのですから、それも女の子の癖に道路の上で石なんか投げるなんて

……。この位の折檻は当然なんです」

みどりの母親は、僕の告白を本当にしませんでした。僕が唯、親友としてのみどりに同情し、この焦熱の責苦から速くみどりを解放させてやりたい——、その虚偽の証言としかりませんでした。

「さア、まだまだ、これぐらいでは許しませんよ。この処、めっきりお行儀も悪くなりしましたし……」

と云いながら、前の艾の灰をソツと取り出したチリ紙で撮み取ると、下に置いてある伊吹山の艾の袋から取り出した艾を、親指と人差指で丸く固く捻り、丁度京名物の五色豆はあるかと想える大きさの艾を、兩足の小指へこんもりと載せます。みどりは、

「ママ堪忍して、ご免なさい」

声はかすれて来ているが、涙もみせず一生懸命に切なく詫びるだけ。もう涙も流し切ったのか、いや真剣になって許しを乞う場合、涙なんか出て来ないのが当然なのかも知れません。美しい瞳です。

「奥様、もうお許しなさってお上げになりましたら……？。みどりお嬢さんも、こんなにお謝りになっていらっしゃるのに、余りお可哀想で。奥様……」



女中のミツエが云います。

「おばさん、みんな僕がやったんです。みどりちゃんを許して上げて……」

「分りました、清ちゃん、いいのよ、おばさんは、みどりちゃんを、いい子にするためにお仕置するのよ」

そう云って、ゆっくり艾にお線香の火を点けました。

「ママ堪忍して、ママ堪忍して……」

みどりは躍起になり、一際甲高く悲痛な泣き声に変わって来る。

「おばさん許して上げて、おばさん……」

「奥様、みどりお嬢さん、もうよォーくお分りなんですから、余りお可哀想で……」

みどりの母親は、僕と女中のミツエの頼みなど一向に聞こうとせず、

「ミツエさんは柱に縛るのを手伝って頂ければもういいのですから、お台所をすっかり片付けて了って頂戴」

僕の不安と当惑の顔を見ながら、女中のミツエは云われる儘、しかたなしに台所へと下って行きました。みどりは一刻も置かず許しを乞うでいます。みどりの足下から立昇る二条の白い煙は、何時しかポツポツと、太いバラバラな螺旋状の絡み合いを見せて揚り出しま

した。と見る中、「ううーン」と下向き加減の顔をしかめて起し、仰反るように頭を柱にサリサリと左右に擦り付けて、普通の色白の肌を桜色から稲妻の如く、ツツと可愛い体中を一層朱に染めました。瞬間、亦しても焦熱地獄の責苦に喘ぐ悲鳴が、みどりの歪み曲げた口を衝いて出ます。

「うアーッウ、あアーッツ、あツイーウ」

「さア、どうです、みどりちゃん、一寸この処、お仕置が遠かったわね。今日は纏めてして上げましょうネ」

「うアーチイ、あウーッ、あッーッ……」

「さアさア、お泣きなさい、あアそうそう、あなたは時々お腹が痛いと言う事がありましたわね。ここへも据えて上げましょう」

未だ足の艾が燃え切らぬ中、今度はグリリと固く丸めた艾を、みどりの母親は唇に押当てて稍々舌で湿めたかのようにすると、すぐみどりの可愛いお臍に押し込むように付けました。そして、そのドングリのようにお臍から突出した艾へ、ちょんちょんと軽くお線香の火を付けました。

「うワアーッ、あッつ」

「さア、幾らでもお熱がりなさい。……そうそ、それだけ熱がれば、ママだってお仕置の

じがいがあるというものよ」

お臍の艾も、ポツポツと煙を上げて燃え出し始めました。足下から立昇っていた煙は、今は片方のみが細く弱く尾を引いています。

絶叫するみどりの口、そして眼はギョッと閉じられ、又開かれ、止めどもなくポロポロと落下する大粒の涙と汗は、電灯の光に白く輝いて流れました。

急にみどりは、両の肩をすぼめるように逆り反り、お腹を膨らませたり、凹ませたりして跳き出しました。

お臍に付けられた艾が、みどりのツボミのような、その可憐なお臍を焼き出し始めたのです。みどりの母親は、足の方の艾が消えるを知るや、再び素速く次の艾を載せお線香の火を点火させました。足の小指の熱さが終らぬ中、お腹そして亦足と、全く続けさまに据えられるのだから、みどりはたまったものではないでしょう。

「堪忍してエー、うアーッ、あアーッ……」

「さアさア、どうぞたんとお苦しみなさい」

「うアーツイ、ご免なさい、あッーッウ」

「ミツエさんミツエさん、あの六帖の簞笥から手拭を出して持って来て頂戴、早く……」  
みどりは足部と腹部からの焦熱に、声も裂

けよとばかり絶叫する。何時ものみどりの声とは、余りにもかけ離れた叫び声に、僕は自分の耳を疑うばかりです。

みどりの母親はミツエから手拭を受け取るなり、すばやくみどりの口へサルグツワをしてしまいました。

「さア、これでおとなしくなりました……。では、もう一度だけ、ポンポンが痛くなりませんように……。いいですか」

亦もお臍へと艾を押し入れ火を付けます。みどりはサルグツワをされてしまったので、呻こうが叫ぼうが、もう外部へは微かな声と云うより、ツウツウと云うような苦しそうな息使いだけしか、洩れて来ませんでした。

僕は、唯、ドキドキして、体中にカーツと電流が流れている想いで、もう何も話す事も家に帰る事も出来ず、何時とはなしにドアの前に棒のように突っ立っていました。

「あーら清ちゃん、すっかり驚いちゃって。もっとこちらへいらっしゃいよ」

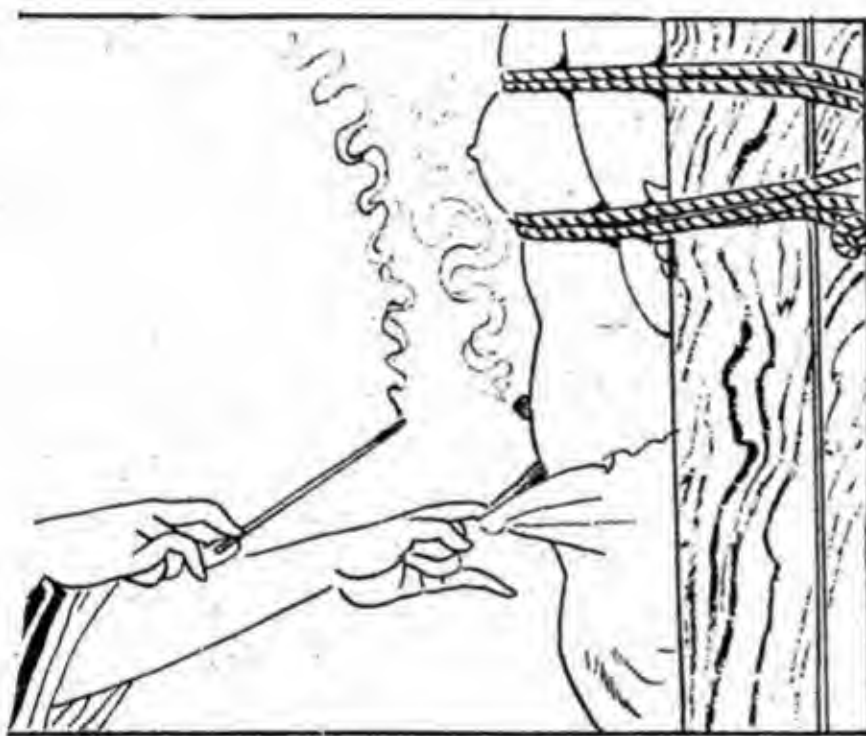
みどりの母親は漸く燃え切ってしまった艾の灰をソツと足から順に掴み取ると、

「もうこの辺で、今日のお仕置はお終いにしで上げましょうか。よォーく解りましたね」  
まず口の手拭をはずし、たたんだ折目をパ

タツと叩いて広げ、そして涙と汗と鼻で台無しのみどりの顔を丁寧に拭いてやりました。手拭を取られたみどりは、未だ微かに肩を震わせて泣きじゃくりながら、ペッタリと廊下に坐ってしまい、稍々あつてきちんと両手を床に付いて、

「ママご免なさい……」  
とおかっぱ頭を下げました。

あくる朝、母に連れられて僕は、みどりの家へ行きました。すぐみどりの母親は現われました。僕の母は、昨夜僕が話した通りの訳



をいってから、  
「この子のために、本当に申し訳ない事を致しました。みどりちゃんにも何とお詫びしてよいやら……」

幾重にも頭を下げました。僕も一緒に、  
「ご免なさい……。許して下さい……」

と最敬礼みたいにして、頭を上げませんでした。みどりの母親は笑いながら、

「あア、そうでしたか。でもお子さんの事ですもの許すも許さないありません事よ。ねエ、清一ちゃんは男のお子さんですもの……この位いのお粗相は、よくある事ではないんでしょか……」

僕は稍々胸のシコリがとれたようで、ほっとしましたが、——しかし、

「何ですか、みどりちゃんに、熱い思いをさせてしまったとかで……。——清ちゃん、あなた、みどりちゃんに何と云って謝る心算りなんです——」

母が、僕の顔を見据えて云った言葉に、亦してもグンと胸を塞がれました。こみあげた涙が眼をボンヤリとさせます。

「まアまア奥様。清一ちゃんも、もうよくお解りなんですから、そうお怒りになりませんで……」



云いながらみどりの母親は振向いて、

「みどりちゃん一寸、いらっしやい——」

と呼びました。みどりはパジャマの儘の姿で出て来ました。

「あらあら、まだお寝間着でねエ、いけないわ、みどりちゃん——」

ママに云われて、一寸含羞むようにおじぎをしました。

「みどりちゃん、ご免なさい。堪忍してね」

僕は、全然顔を上げないで謝りました。

「本当にご免なさいね。熱かったでしょうに……、堪忍してやって頂戴ね——」

と叮嚀に、母は大人にするようにみどりに向って頭を下げました。

「宅のみどりちゃんは、お仕置には何時もお灸を据えられる事になっておりますの……」

ここの処一寸私が疲れ気味で、一カ月位も据えられなかったんですが……。以前は一

週間か十日に一遍は、必ずお灸のお仕置で……。でも元から想いますと大部お行儀の方も

よくなりました。何時も大概サルグツワをするんですが、昨晚に限って忘れしたもので、

ご近所様までも聞こえてしまいました……。」と笑いながらみどりを見て云いました。み

どりは唯、含羞笑いをして、下を向いていま



した。笑うと両頬に可愛いエクボがキュッとへこみました。母は、

「——でも奥様、余りお可哀想ですわ。お灸なんて据えられませんが、こちらのみどり

ちゃんはよくお判りになりますものを……。」

「いいえ、いいえ、やっぱり駄目なんですのよ。お仕置にはお灸が一番ですわ。縛って据

えれば楽ですから……。女の子ですのやはり人目につく処はなるべくさけて、定って何時もは足の土踏ずに据えてやりますの」

応接室のドアにもたれて立っている、みどりの足の可愛い小指には、昨夜のお仕置の後が、稍々褐色がかった黒いボタンのように、痕を残していました。

みどりが何時もママと呼んでいる母親は、継母で、元は京都ホテルの芸者だったと云う話ですが、何時も前歴をカバーするために洋装をしていました。その時分の洋装は一寸珍しいと思えました。年は、確かその当時二十六、七才位だったのではなかったかと記憶しています。

普段のみどりに対する様子は、五つ六つの子供を可愛がるような異状さがありました。しかし、ともすれば箸の持ち方から、坐り方返事の仕方——と、あらゆる事に難癖をつけては、お灸で折檻をしました。

みどりの産みの親は、みどりが三つの冬、肺炎が基で他界したそうです。父は、みどりが生れる前から、外国航路の船長をしていました。そのため家には、何時も忘れた頃でないと戻りませんでした。帰宅している時には、よくみどりと二人に航海中の面白い話をしてくれたり、シンがボールのチョコレートとか、方々の国の変わった珍しいものを出してくれたりしました。ちよび髭のやさしいおじ

さんでした。

母と僕は、浜田さんの家へ行って詫びました。近所の子供もおっかないおじさんといっ  
て怖がっている、軍医中尉の浜田さんは、  
「まあいいや、解れば……。今度っからあぶ  
ない真似なんかすんなよ」

と、ギョロリとした眼を僕に向けました。

「今朝早く、若月さんの女中が、ガラス屋へ  
行って呉れたそうだから、もう追っかけ来る

だろう」

「ガラスが入りましたら、家の方へガラス屋  
さんを回して下さいますように……」

母は、用意して来た石鹼の箱を置くと又、  
叮嚀に挨拶して表へ出ました。そこには相変  
らずゴロゴロとした砂利がありました。母は、  
一足一足踏みしめるかのような恰好で歩きま  
した。もうガラスを壊した事については、何  
も云いませんでした。朝の太陽が、松葉の隙

間からちかちかと射していました。野原の片  
隅にある大銀杏は、つぶらな実を鈴成りにし  
て、だいぶ色着せていました。赤とんぼが何  
匹も、初秋の宙天を舞っていました。そして  
一刷毛したかのような雲が、僕の心のシコリ  
を、新鮮な朝の空気の中へと、溶かして行っ  
て呉れました。

(おわり)



(告白)

## 私の楽しみ

と

## 浣腸プレイ

江波好子

C、二十CC、三十CC、五十CC、  
C、百CCの五本の緑色のガラス  
浣腸器、グリセリンのポンド瓶、  
浣腸用スポイト、エネマシリンジ、  
十四号カテーテル、千CCのイ  
ルリガートル、アユリカ製携帯用  
総ゴム製イルリガートル。そして  
最後に紙オシメとオシメカバーを  
取り出します。

まずベッドにビニールを敷き、  
その上にオシメカバー、オシメを  
セット、次に五本のグリセリン浣  
腸に全部薬液を満たします。硝子  
製千CCイルリガートルには石鹼  
液を満し、腰の方へ釣します。次  
は、バスルームへ、アメリカ製の  
イルリガートルとエネマシリンジ

トイレ、バス付のホテルを、女  
の私が一人で日中、利用するとい  
うことは、なんとも面はゆい感じ  
ですが、しかし、今の私の家庭の

事情では、こうしてプレイするよ  
り外、方法がありません。私は久  
方ぶりにホテルを訪れます。

女中さんは、「ではどうぞ、御

ゆっくり」と言って室を出て行っ  
てしまいました。  
私は室に鍵をかけ、鞆を傍に引  
き寄せます。中からは、先ず十C



を連結したものに温水を満したものを用意。これでプレイの準備はOK。

さていよいよプレイの開始です。ベッド・サイド・テーブルの上には、先程の五本のグリセリン浣腸器がきれいに並んでいます。それぞれ目盛一杯にグリセリンを吸込んで、嘴管を光らせながら。私はセットされたオシメの上に仰向けに寝ます。十CCの可愛い浣腸器を取り上げ、右手で挿入してピストンを押します。二十CC、三十CC、五十CCと次々に浣腸して行くのです。五十CCを入れ終ると、そろそろ便意を感じて来ます。そこで最後の太い百CCを用いるのです。この浣腸器だけは右手だけと言う訳には行きません。誰かにやっていただければ宜しいのですが、悲しい事に誰もいませんので、仕方なしに、足のカカトを利用して薬液を送り込むと言う、あれもない方法を取ります。全部の薬液を注入し終るまでに、私は激しい便意に耐えきれません。だって二百十CCも半々

とは、言えグリセリンを浣腸したのですもの。そこで私は汗を流しながら自分にオシメを当てなければならぬのです。二重、三重、四重とオシメを重ね、最後にカパーを当てます。もうその時は、気が遠くなりそうです。ビニールを敷いたベッドの上で、私は苦しさのあまり、のたうちまわるのです。枕元の時計を見ますと、まだ三分しかたっていない。今日のために六十二時間排便をしていないんですもの。

「もう少しの我慢、もう少しの我慢、あと百数えたら」と少しでも気がまぎれるようにと思いますが、オシメカバーでキツチリと包まれた、お尻の方は向いてしまっています。

「あっ」駄目です。押さえに押さえた私の悪魔は、とうとう飛出してしまいました。外に出た悪魔はオシメの少しの間を求めて、はいずりまわっています。そのくすぐったいような感じ、なま温い感じに、私は観念したように、目をつむります。悪魔は次から次へと続

いて登場して来ます。その度に、鈍い勝どきを上げながら、もうオシメの中は悪魔で一杯です。

やっと私は起き上って、バスルームへ処置をしに行きます。

紙オシメです。処理は簡単で、そのまま水洗便所で流してしまふのです。汚れたお尻は、金だらいで洗って、きれいになり、再びビニールの上に横になり、今度は千CCのイルリガートルで石鹼浣腸です。先程からイルリガートルは、ぶらさがって、黒いゴム管を長くのばしてお待ちかねです。嘴管の先に十四号カテーテルを連結し、カテーテルに十分油を塗ります。クレメントをはずすと、イルリガートルの液面は徐々に下り始めます。先程の浣腸で、便はほとんど出てしまっているので千CCは、楽に入ってしまった。それでも、便意は感じます。五分我慢して、トイレへ走ります。やはり固体は全然出ません。最初黄色い水が出て、あとは石鹼液ばかり、便器の中は泡だらけです。バスタブの壁には、アメリカ製

の総ゴムイルリガートルとエネマシリンジ、そしてその嘴管に十六号カテーテルを連結した器具が、さっきから私の来るのを待っています。

お湯の加減は丁度良い温さ、お風呂に入っての浣腸、これが本当のパラダイスです。

その中に、のぼせて来ましたので、最後にお腹が、ポンポンに張るほど洗滌液を入れ、一気に排出しました。バスの中のお湯は、ジェット噴流の波紋を画きます。もう私のお腹の中には、悪魔は一人も居ません。私は軽い快い疲労感でグッタリとビニールを取り去ったベッドの上に横になりました。私の一人のプレイをどなたか、手伝っていただけません。そうしたらもっと楽しいのに、異性の方でも、本当に紳士的の方なら……でもやっぱり、同性の方のほうが、安心してプレイが楽しめますからね。

九仁子さん、玲子さん、御活躍を心から祈ります。

## 長篇連載MS小説

## 宇宙のどこかで

——或る奴隷囚の告白より——

佐 治 麻 造

## 女奴隷哀歎

「お前もおいで。面白いものを見せてやるわ」

二日後例の女奴隷の家の前で車を降り乍ら奥様がいました。小さい庭の一隅に正座します。縁先に木の箱がおいてありました。やがて一昨日の男が出て来て箱の蓋をあけて居ますと、奥様とおばさんに追い立てられて美しい女奴隷が来ました。所々破け汚れたシユミーズ姿で、首に四、五十センチ角の厚い木の枷を嵌められ、髪はクシヤクシヤ、肩、腕、そして脚の辺りに鞭痕の端が見えて居ます。大分撲られたらしく頬は腫れぼったく、涙で汚れては居るものの美しい素顔でした。

「庭におりて坐るのよ」

首枷を外された彼女は、奥様に腰を押されて素足で庭におりて正坐してうなだれました。

「さ、これから私の奴隷なんだよ。いいかい？ 今迄の埋合せをしてやるからね」

「奥様。私、本当に無理矢理に」

「お黙り、そんなこと私に云ったって仕様ないわ。且那樣がお決めたんだから……。ホホホ、さ、着物脱ぐのよ。お前にふさわしいものに着替えさせてやるから」

諦めた女奴隷は立ち上って脱ぎました。

「グルッと回ってごらん。次は両手を挙げて脚を開いて。フッフ、



何泣いてるの？次は四つ這って……」

鞭痕の生々しい白い体を震わせ、もだえて、彼女は嗚咽します。携帯用の電気器具を調整して居る男の視線はギラギラと光っています。黒髪を根元から切取られた彼女は地面に落ちた髪の手を見し号泣しました。

「鼻環から嵌めようね」

ステンレスの鼻環が、既にあいて居る鼻の孔に通され、電気器具によって接合されました。

「便利な機械が出来たものねえ」

「ええ。けれど、此の機械じや鼻環がせいぜいでしてね。首環なんかとても未だ……」

奥様は早速革紐を鼻環につけて、グイグイと上下左右に振り回しました。

「ウツ、ヒー。そ、そんなに、引張らないで下さらない？」

「馬鹿ね。鼻環ってものはね、引摺り回すためにつけるのよ。フーフ、これで奴隷らしくなったわ。大体の話が、これで当り前のことなんだよ」

奥様は左手で鼻紐を短く引張って握ったまま、右手で平手打を喰わせ、ペツと唾を吐きかけて嘲けり笑いました。女奴隷は、未だ自由な両手をブルブル震わせて、屈辱と痛さを耐え忍びます。重々しい金属音と共に鋼鉄の首環が細い首にぴったりと嵌め込まれ、首環の両側に付いた腋鎖がそれぞれ両腋を潜って締め上げられました。

「あとは私が嵌めてやるわ」

男は惜しそうに奥様と代りました。私と同じ様な鉄の腰枷が、くびれた腰の左右からむごたらしく嵌め込まれ、彼女は身震いして

泣きます。Y字になった鎖が、グイと締め上げられてカチカチと腰枷に結合され、女奴隷は身も世もない様に身もだえして号泣しました。

「奥、奥様、こんな、こんな恰好だけは、勘忍して下さいまし」

「うるさいわね」

腿を掴り上げられた彼女は悲鳴を上げました。両足首に鉄枷と鎖がつけられ、鎖鐐の真下に吊られます。

「お手々を出して」

三十センチ程の鎖で繋ぎ合わされた太いU字環が、それぞれの手首に下から嵌められ、ギリギリ、ギリと蓋がされます。女奴隷に鎖錠を嵌め施して行く奥様は、冷い錠の音に身をもだえる有様を勝ち誇った様に見やり乍ら、ゆっくりと愉しんでいる様でした。手錠の鎖の中央が三十センチ程の別の鎖で鼻環に結ばれました。女奴隷の頬に涙が伝わって居ます。

「さ、これで少し歩いてごらん」

女奴隷は、ままたらぬ両手で胸の辺りを押え前かがみになって膝を曲げ、不自由そうに鎖をジャラジャラと鳴らして歩き回りまじた。鎖に邪魔されてよろける度に、午後の陽差しを受けた肌に鞭が鳴りました。

「勘忍して下さいまし。あもう、こんな、これから、いつも、こんなにされて……」

「そうよ。先ず先ず今の戒具は四六時中、外してはやれないわ。覚悟おし、フフフ、あそこの男をごらんよ。今は足の鎖、除ってあるけど、ああして毎日々々働いてるのよ。当前じやないの。さてと。まだまだあるのよ。フフフ」

おばさんも手伝って、胸枷が嵌められました。恰好のいい乳房が鉄の枷に押し上げられ、彼女は恐ろしさに喘ぎました。肘が固定され、両腕を後手にネジ上げられた女奴隷は悲痛な声を出しましたが胸枷の後ろ側についた鉄環は容赦なく両手首を捉えて開きます。

「少しは苦しいかい？ 夜、寝る時には、こうしといてやるからね。ホホホ。さ、お坐り!!」

おそらくは監獄でも、経験のない残酷なましめを初めて受けて呻き声を上げて居る哀れな奴隷女を見下ろし乍ら、奥様達は悠々としてお茶を飲んでいきます。

「此の女も車に繋いで帰ることになさっては何？」

「勿論よ。胸枷は、そのままでもいいけど、足の鎖、除ってやらなきゃいけないかしら」

「あの野郎も一緒に繋ぐんでしょう。なら、いいじゃないですか。」

男の方の足が拘束してなきや、事故は起らないと思いますよ」

「そうね、じゃ、ぼつぼつ出掛けましょうか。これ、二五号ノ此の箱を車に積んで」

嵌口具や窄衣や針玉等が残っている箱を、やっとの思いで車に積みみました。バーに繋がれた私の隣に美しい女奴隷が残酷な鎖錠のままで、おののき乍ら並び、軀を肩に掛けられバーの短い鎖が胸枷に結ばれました。

「この車は三頭立てですわ」

「そうなのよ。今迄、その男一匹だけでさ、少し重かっただろうと思うわ。あ、おばさん、真中の軀じゃないわよ。左の端の分よ」

重い軀が私の肩にも乗りました。

「ああ、この、鼻にブラ下ってる手錠を除けて下さいまし。重くて

鼻が千切れそうで」

「何いってるの。さ」

ヒュウ、ピシリと私の尻に、そして女奴隷の腿が鳴り、私は足を踏ん張りました。

「あ、う、う、とても、こんな、ウツ、あッ腕が折れる。赦して、ゆるして……」

車を曳く所か、軀に押され、バーに胸枷を揺ぶられ、喚き泣く哀れな奴隷女の苦痛を思いますと、止ってやり度いのは山々ですが、許される事ではありません。私は胸枷のままで曳かされたことはありませんでしたが、足錠のまま針玉に責め苛まれて軀を曳いたことは屢々ありましたし、胸枷の味は毎夜味っておりまますから、彼女の苦痛の程は充分に察しられ、本当に可哀想だと思いました。しかし奥様に鞭で追い立てられますと急がない訳には行かず、女奴隷は脂汗を絞って喘ぎ苦しむのでした。

「やかましいわねえ。ヒィヒィと。くっ、わを準備するの忘れたのは残念だったわ」

道行く人々は、余り見馴れないむごい此の有様を、女奴隷が美しいために一層面白そうに眺めますが、奴隷が苦しむのは所有者の意向一つなのですから、当然のことで、憫れんで呉れる人は滅多にいませんでした。

暫くすると女奴隷も大分馴れた様で、私も少し気が楽になり、車を少しでも曳こうとする彼女の努力を時々軀に感じ取って、本当に可哀想で涙が出ました。鉄の腰枷は、馴れない彼女の足の動きに下方へ引下げられて、腰骨を責めている事でしょう。彼女にとって堪らない苦しさだろうということは、自分の経験でよく分ります。



「もう少しだよ。辛抱おし、腰をウンと下げて」

そういつて彼女をいたわって注意してやり度いのですがくつわを噛まされている身には叶うことではありません。

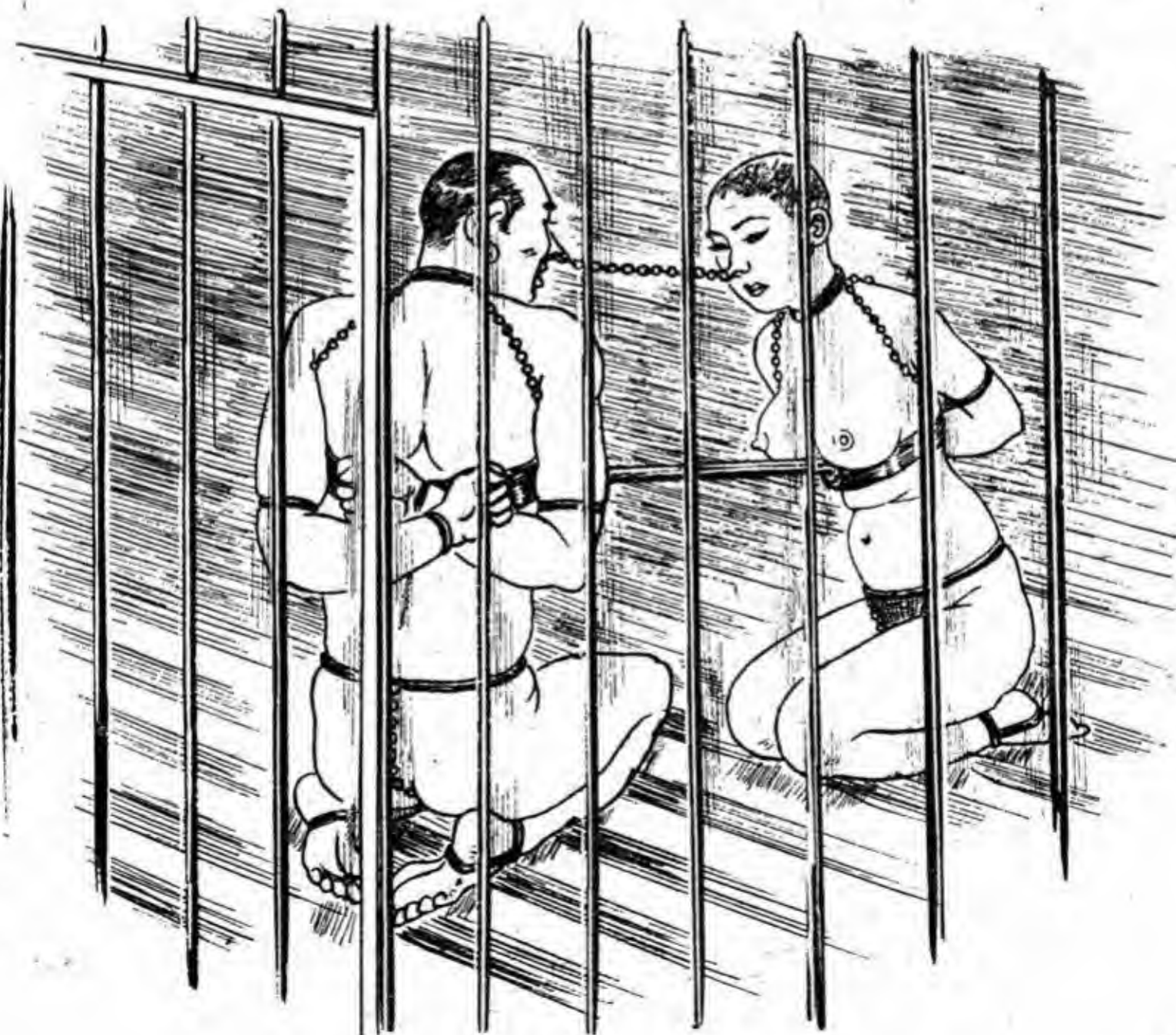
バーを下方へ押下げる様にしてやるのが、せめてものことなのでした。邪魔で仕様がなかった、美しい女奴隷を今や自分の支配下に握った奥様は、悲痛な呻き声を聞き、脂汗にベツトリと濡れた白い体に青を振って、満足そうに車上で笑うのでした。漸く家に辿り着き、私は地べたに尻をついて思い切り上体を曲げ、自分の両足に足錠を嵌め、更に吊鎖を辛うじて鎖揮の金具に結びました。何しろ手錠をギリギリの長さで鼻環に繋がれていますので、全くみじめな思いです。女奴隷は軛から解放され、崩折れましたが容赦なく鼻にブラ下がった手錠の鎖を引張られて悲鳴を立て乍ら引摺って行かれました。車の始末や手入れをボソボソとやっていますと、やがて奥様の罵しり声やビンタの音、そして女奴隷の哀願の泣声等が聞えて来しました。

お清の指図を受けようと庭先に回りますと、哀れな女奴隷が這いつくばって二人にからかわれ乍ら古下駄の裏を舐めさせられているところでした。

「二十五号。並んでお坐り。その薄野呂女、もういいよ。えーと、二匹共よくお聞き。先ず、名前つけてやらなくちやね。番号がいいわね。お前の奴隷登録番号はと……じゃお終いの方を取って十四号にしよう。これっ、十四号

!!

「ハ、ハイ」



白い体身がビクツとしました。

「二五号によく教わって神妙に働くんだよ。家の内回りと外回りとに大体分けてさ、一日交代でおやり。私はきつい方だからね。二十五号にきいてごらん。このお清のことは御嬢様と呼ばないと承知して貰えないよ」

「よ、よく、よく分りましたでございます。お慈悲ですから、此の胸の枷を、外して下さいまし。もう、息する度に痛くて、死にそうです？」

「フ、フ、フ、お清さん、一応外しておやり。けどね、十四号。今迄分際に外れた暮しをしていた償いに、ちっとばかり苦しい目に会わなきゃならないよ。覚悟はいいわね」

胸枷を外された女奴隷十四号は、ネジ上げられていた後手を必死の思いで前で揃え、鼻環に繋がった手錠をギリギリと嵌められ乍ら大きな涙をホロホロとこぼしました。

「当分の間、毎朝鞭を気の向いただけ当ててやるからね。分際を思い出させてやるためよ。じゃ、今日は檻にブチ込まれる時間迄、そこで坐っておいで」

「あ、ありがとうございます。あの、一口でいいですから、水を吞ませて下さいまし。お願いです。拝みます」

「ホホホ。何いってるのさ。我慢するの。奴隷じゃないか。今迄は勝手に飲んでたんだろ。これからはそんな訳には行かないよ。ウンそれから、いっといてやるけど、用便は朝一回だけだよ。その禰の革や鎖を舐めさせられない様に気をおつけ。二十五号！ 仕事をおやり。車はよく手入れしただろうね」

女奴隷十四号は、奥様の痰唾の混った奴隷食を、私と並んで、犬

の様に啜り乍ら激しく慟哭しました。夜が来て雨が降り出しましたが、十四号はそのまま動くことを許されません。家の中から覗きますと、無残に刈取られたダンダラの坊主頭を雨に打たれ乍ら唇を噛みしめて鼻の鎖をまさぐりまさぐり、うなだれて坐っている哀れな姿が、暗い庭に仄白く浮んでおりました。

「丁度いい雨だったじゃないの。洗う手間が省けたわね。じゃ、お前達、檻へ入れて上げようね。フフフ、二匹一緒よ。嬉しいかい」濡れた胸枷を重そうに持った十四号と一緒に地下の檻の室へ追われました。

「あッ、あ、又、又その胸枷を……」

先刻、浴室で、私にマッサージをさせた奥様は、白っぽい浴衣に赤い帯をすっきりと締め、頭にターバンを小粋に巻いた平地よい恰好でスンナリと立ってお清の手で冷たい胸枷を乳房の下に当てがわれて悲しく身震いする十四号を冷く見下ろしました。次に私も胸枷を施され後手にネジ上げられ、歯ざしりして苦痛をこらえます。毎夜毎夜のこと乍ら、悲哀を一しお深く感じました。

「仲良くするのよ。フフフ」

十四号の鼻環と私の鼻環とは、三十センチ程の鉄棒の両端の金具に結ばれ、狭い入口から檻に身を入れかけました。奥様は十四号の腰を、お清は私の尻を蹴り飛ばします。三角棒の並んだ檻の床に倒れ込んだ私達は苦痛に呻き、鉄扉はガチャンと閉りました。

「末だ寝るのは早いよ。夜の御挨拶は？」

押しても引いても痛い鼻の連結棒に悩み乍ら激く起上って、正座しました。

「奥様、お嬢様。今日一日いろいろとありがとうございました。寝



ませて頂きます」

私に倣って十四号も途切れ途切れに挨拶しました。流石に無念そうでした。

「あの……お願いです。お慈悲です。あの、お小用させて下さいまし」

十四号は檻の外の便器を横眼で見乍ら哀願致したが、ききいれる筈もなく、二人は立去ってしまいました。

「ああ、このままで一晩中、ほっとかれるの？」

「そうだよ。奥様がベッドに入る前に、天井の穴からお許しがあるから、それ迄は横にはなれないのさ」

「ああ、ひどいわ。あんまりだわ。監獄の胸鎖も、苦しくて痛かったけど、較べものにならないわ。息する度に痛くて痛くて。窄衣の方がまだましだわ。ああ、苦しい。腕が折れそう」

戒具の苦しさもさり乍ら、先刻迄雨に打たれていた彼女は腿を震わせて呻きました。

「ああ。あなた、ここに連れて来られてから、どの位？ ずっとこんななされてるの？ このままで朝までいるなんて苦しいでしょうねえ。ほんとに残酷な枷だこと」

女性には分らない切なさ苦しさに、私は男泣きをしてしまいました。

「どう？ 仲良くしてるかい。ホホホ。横になっていいわ」

いい終った奥様は、穴の蓋をボタンと閉め、柔かなベッドに横になった様です。

「こんな……。とても寝れやしないわ。ああ、ほんとにどうしたらいいの？」

「だって、横になっておかないと明日の苦役がえらいですよ。くそッ、せめて鎖ならまだしも、こんな棒なんかで繋ぎやがって……」

やっとの思いで横になった私達は、狭い檻の中で出来るだけ身を遠ざけ合いました。固く眼をつぶってじっとしている私は、鎖の

苦痛に身もだえしている十四号の動きを鼻環に感じて、払ひのけても払いのけても、たかぶって来る妄想に喰いしばった歯の間から低く唸りました。眼をあけると、端麗な彼女の横顔や肩、胸の辺りが眼に灼きつき、頭に血が上って気も狂いそうです。

「どう？ 御気分は。フフフ」

突然、天井の穴が開いて奥様の嘲笑が降って来ました。

「奥様。お願いです。鞭を当て下さいまし。もう、切なくて切なくて」

「ホホホホ、何が切ないの？ 二人だけじゃないの。好きな様におしよ」

苦悶しつつも、苦役の疲れにいつしか眠ってしまいました。

朝が来て、お清の鞭で叩き起された私達は、大急ぎでいざり出ます。鼻の棒がお清の指先で訳なく外されました。

「おや。お前、そそうしたのね」

十四号の鎖縛を検査し、檻の床に眼をやったお清は鋭く叱りました。意地悪そうな笑みが頬に浮び

「ともかく始末おし。口でするのよ。きまつてるじやないの」

檻が少し引き上げられ、十四号は、それこそ世にも哀れな声で、泣きじゃくり乍ら床を舐め回りました。

私ののは、ガチャリ、ガチャリと、十四号のは、ギリギリ、ギリギリと、鼻環に繋いだ手錠を嵌められ、雨上りの爽かな朝の庭の水道

で体を洗った私達は、翌朝迄外されることのない鎖錠を再びギョツと締められ、十四号は家の中へ追い込まれました。庭の掃除をして



居ますと、奥様の寝室へ朝のコーヒを捧げ運んだ十四号が、先刻の事を自分で事細かに云わされているらしく、愉快で堪らない様子の奥様の笑い声が、微風に揺れる深紅のカーテンの隙間から洩れ聞えたのでした。更に例によって、鎖が床に触れたとて、激しくビンタする音が聞えました。

朝の雑役仕事に不自由な体を一しきり追使われた頃、奥様はベッドを離れ寛やかな部屋衣で庭に出ました。十四号が呼ばれ、鎖を鳴らしてやって来て奥様の足下にひれ伏しました。自分の背中に吊っていた鞭が奥様の右手に握られるのを悲しそうに見やります。

「黙ってて、いいのかい？」  
「ハ、ハイ。御鞭を、お願い申し上げます。奴隷十四号に……自分の分際を思い出させるための鞭を当てて下さいまし」

「お前の犯した罪は何だったけ？」  
「ハイ。殺人未遂でございます」

「フン。極悪人じゃないの、お前は。重罪人なんだよ。何よ、虫も殺さないような顔してて。さ、お尻をおっ立ててごらん。フ、フ、フ、鎖がきつく喰



い込んでること」

二十以上の鞭を全身に浴び、一鞭毎に両手を合わせて、御礼を云わされた十四号は、更に塗られた治癒促進剤の痛さに地面にしがみついて呻きました。

### 女奴隷十四号の話

「どうしてこんな身になったかって訊くの？ そうか。あなたはもう……監獄にブチ込まれていたのね。ほんとに馬鹿なことしたのよ。後悔してるわ。けど、いくら罪の償いだっていっても、こんな……監獄にずっといた方がよかったかも知れないわ。十年足らずの違いなら」

四、五日経ちますと、十四号も残酷な鎖錠にも少しは馴れて来、私も少しは疼きが軽くなりました。昨夜は旦那様が来ましたが、十四号には眼もくれず、一言の言葉すらかけられませんでした。所詮諦めてはいるでしょうが、流石に女心の悲しさ、十四号は一晩中、天井を見上げて嗚咽していたようでしたが、今夜は少し元気でした。奥様の御機嫌が良くて、余り痛めつけられなかったせいもあります。私達はお互いのことを話し合いました。

「あなたも御存知のようだけど、私、女優だったのよ。そう、私の映画見たことあるの」

天与の美貌をもった彼女は一躍トップスターになり、天下のファンをうっとりさせました。私が鎖に繋がれる身になった頃は、彼女の全盛の時分でした。好ましく思っていた新進の監督にプロポーズされた彼女が、幸福の絶頂を味わいながら、その監督の下で主演する予定の大作の準備をしていた時のことでした。

「ちよっと鼻の棒に気をつけてね。横になるわ。ああ、フー。それでね、私も、もう映画に入ってから大分になるし、人気もこれから落ちる一方だし、スターの座を維持するのも骨だしね。その大作が済んだら都合によっては引退して家庭に入ろうかしら、とも考えたのよ。そこへあのカマトトのオチャッピイ娘が現われて、私の人生を台無しにしてしまったの」

つまり、新進の女優が、その大作の主演女優の位置と、そしてあわよくばその監督をも併せ獲得せんものと狙い、彼女が未だ唇のみしか許さなかった彼に対して、体を張って体当たりしたのです。身も世もなく苛立ち悩む彼女が、俳優崩れのある男に行き逢ったのが運の尽きでした。

「私、知らなかったのよ、その男が殺し屋みたいなことしてたってこと。顔見知りだったもんでいろいろ話してしまったの。そしたらつきまとってさ、始末してやるって誘惑するのよ。ああ、腋の下が痛いわ。俯伏せにさせてよ。有難う。あなた、ずっと仰向けで痛くないの？ 今日はここに来てから初めて鞭なしだったわ。鞭ってやっぱり痛いわねえ。暫く当てられなかったせいかな本当にこたえるわ。やられると眼がクラクラしちやって。えーっと、どこ迄話したかしら」

彼女はとうとう甘言に乗せられて依頼してしまったのでした。そして殺し屋は周到にも、打合せの模様を、ポケットに忍ばせた録音器に記録してしまっただけです。憎い女の姿が撮影所に来なくなるのは、今日か明日かと彼女は悔恨と期待に胸ふるわせて待ちました。が、全然音沙汰ありません。主演女優は、やはり元通り彼女に内定し、喜んだ彼女は、殺し屋との契約を取消さねばと、やきもきしま

した。

「やっぱり主演することに決った晩、彼とおそく迄デートしたの。楽しかったわ」

彼女は、檻の床の三角棒の間に頬を埋めて、黒目勝ちの美しい眼を長いまつげでかけらせながら、うっとりとして遠くを見る目付をしまった。

「あの人、どうしたかしら？　今頃はもう可愛い子供も二、三人出来て……」

まつげを大きな涙がホロホロと伝わりました。

「何をコソコソ話してるのよ。早く寝ないと明日えらいわよ。馬鹿ね、二人共」

突然、奥様に天井から叱られました。

翌日、十四号が足鎖を床に当てて小さな傷をつけたかどで窄衣をかけられて檻へ入れられました。私も連帯責任とかでギッチリと締め上げられました。こうされては、話どころではなく、私達は呼吸すらが漸くの苦しみで、長い一夜を喘ぎ通し悶え抜きました。

次の日、針玉を両脚の間に吊られて二時間ばかり車を曳かされた十四号は、檻の床に白いボロ切れのように横わって、身動き一つせず涎れを垂れ流して呻き呻き寝入ってしまったのでした。

「おとといの晩はほんとに済みませんでしたわ。私のためにあなた迄窄衣されちゃって。けど、こんなところも珍らしんじゃない？　この労役そのものは楽なもんよ。手錠足錠嵌められたままでも充分出来て余る位よ。なにせ、こんな小さな家に奴隷が二人もいるんですもの。ただね、手錠を鼻環に結ばれてさ、脚を吊られて膝を伸ばせないもんだからもたましてしまうわ。それに鎖を床なんかにか

てちゃいけないっていうんでしょ。夕方になると背中が板みたいになって膝がガクガクして仕様ないわ。夜は夜でこんなでしょう。結局、労役も労役だけど、つまり私達を苦しめるのが目的だと思えないわ。大概の所じゃ働かせるために奴隷を持つてるのよ。有無をいわずにこき使われるのは当り前のことと覚悟してるけど、こんなじゃ。お互いにほんとに運が悪いのね。え？　この鎖のこと？

初めてじゃないわ。監獄で嵌められてたことがあるの。あなたの時分には未だ使ってなかったのね。この鉄の腰枷でもね、今のこれなんかピッタリ合ってるから苦しいこともあるけど、却って楽なのよ。監獄のはね、小さ目のを無理に嵌めて締めつけるもんだから、そりや痛かったわ。鎖を思い切り締め上げられて獄外労役させられたこと度々よ。それも多勢で連鎖されてる時はまだいいのよ。そんな恰好で独りで曳かれる時は堪らなかったわ。鼻環じゃなしに禪の下金具に曳き鎖をつけるのよ。労役がやっとなで、自分で後手錠にして地べたで正坐して待ってるよね、いきなりその曳き鎖を引張り上げるの。その時の気持ちたら……」

私が監獄から解かれて奴隷になってから後、懲役囚の取扱いは一段と苛酷になったようでした。

「話が傍道にそれちゃったわね。えーと、それでね、彼とデートした翌日のことよ。撮影所に行って聞いたの。前の晩、あのオチャッパイの小娘の自動車がトラックにぶつけられたってこと。けど乗ってたのは、あの女じゃなくて、二人共ワンサの女優だったのよ。二人共大怪我して、一人は可哀想にどうともならないかたわになってしまったわ。私、それを聞いてね、相手のトラックはどうとう分らず仕舞いでしょ。ほんとにハッとしたわ。何とか例の男に連絡しな



くなちゃ、もしあの男の仕業だったら、本当に申し訳ないことだと思  
って……。けど撮影が始まるし、忙しくなってそのまま半年近く経  
ったの」

大作も既にあらかた撮り終り、あとせいぜい十日もあれば、とい  
う頃のことでした。メーキヤップも済ませ、カラー撮影のため燃え  
るような長襦袢姿で、愁嘆の濡れ場の出番を待っていた彼女は、や  
って来た刑事達に逮捕されました。

「芝居の上では、縛られたことも沢山あるし、女囚に扮したことも  
あるけど、ほんとに手錠かけられた時は、腰が抜けそうだったわ。  
腰縄を打たれて警察へつれて行かれて。実現はしなかったけど、後  
暗いこともあった訳でしょ、眼の前が暗くなったわ。首に鎖をつけ  
られた時は死に度くなったわ。身体検査をされると、皆集って来  
てジロジロ眺めるのよ。今じゃもう、いくら見られたって諦めて  
から平気だけど」

彼女の容疑は謀殺未遂でした。例の男が少し前に別の事件で捕っ  
て、出て来た録音テープから彼女の逮捕となった訳でした。法的に  
見れば彼女は共同正犯ですし、間接的とはいえ、二人の婦人を傷つ  
けていることとて、彼女の社会的名声に拘らず、取扱いはきびし  
く、帰宅を許して貰える筈もなく、手錠のままで独房に入れられま  
した。

「翌朝から取調べられたけど、いい訳が出来る筈もないわ。泣きな  
がら全部白状したら、一時間ばかり手錠外してくれたわ」

撮影所では幹部の緊急会合の結果、撮影中の大作は是非完成した  
いこと、そして彼女が出るシーンは殆ど愁嘆場だけが残っているの  
だから彼女の心境は却って好都合であること、そのためには検務当

局へ強力に働き掛けて、彼女を仮釈放して貰うこと等が決まりま  
した。

「けど初めてでしょう。ほんとに恐ろしくて、みじめで、悪いこと  
はほんとに出来ないと思ったわ。三日程はドロドロの食事なんか殆  
んど咽喉を通らないし、じっと正坐してるのが苦くて苦くて。初め  
て鞭を背中に当てられた時の味は、今でも忘れられないわ。手錠を  
外して下さいって、手を合わせて拝むんだけど、とうとう五日目の  
夕方、仮釈放される迄外してくれないの」

撮影の残りを一生懸命やるなら、完成迄監視付きで出してやる。  
もし誠心誠意やらないようなら容赦なく再逮捕する。しかしどっち  
にしろ、二週間の後には検事局へ送る旨を申し渡された彼女は、差  
入れられた衣服を着て、自分の自動車で自宅に帰りました。勿論監  
視役の婦人刑事が一緒です。

「お風呂に入ると鞭痕がとても泌みたわ。首と手首には痕がついて  
るし……。所長さんがあの人と一緒にやって来て頼むし、私も生涯の  
思い出にしたいし、喜んで撮影を完成させることにしたの。会社の  
方でも、出来るだけ刑が軽くなるように尽力してくれるとか、あの  
人と話していると泣けて来て泣けて来て……。」

天井の穴が開き奥様の御命令が降って来ました。

「二匹共お起き。これから旦那様をお迎えに行くんだよ」

外は雨でした。胸枷はそのまま、足錠だけ外された私達は、滑り  
止めのための藁縄を両足の甲から足裏にかけて二まわり宛巻き付け  
て重い軛を掛けられ、車上の奥様にくつわの手綱を握られます。篠  
つく雨にしとど濡れる背や尻や腿に当てられる鞭は一しおみじめな  
思いでした。

「御苦労、御苦労。不意に帰ったもんでな。生憎の雨でタクシーも中々ないのだ」

出張から帰ってきた旦那様を、深夜の停車場に迎えて帰った私達は、檻へ入れるのも面倒になったのでしよう、駐車用の足枷を掛けられ、濡れた体を拭うこと等、許される筈もなく、車に繋がれ軛を肩に背負わされたまま、車庫の端でうずくまって朝まで過しました。

「昨夜はひどい目に会ったわね。けどお陰で今日は御機嫌がよくて助かったわ」

次の夜、十四号は語り続けました。

撮影中は、痕がつくと困るので、鞭はもとより、手錠も嵌められませんでした。しかし、四六時中、鋭い監視を受けている味気なさ。撮影所の人々や同僚達、特に女優連中のさげすみの視線に耐えるのは並大抵のことではありません。彼女は自分の責任を果たし、そして愛する男の仕事を完成させる為め、心身を鞭打ってひたすら演技に没頭したのでした。

「鉄の手錠やなんかは勘忍してくれたけど、夜ねる時は監視出来なからって言ってさ、寝る時は革手錠かけられたの。革手錠知ってるでしょ。ホラ、私娼なんかの矯正所で使ってるという太い革バンドよ。それを腰に締められて後ろで錠が掛かるの。前の腰骨の辺りに別の革バンドが二つ付いてて、それで両手首を別々に括られるのよ。もう痒い所も搔けないし、雑誌を読むことも出来ないし、涙が出る程情けなかったわ。段々撮り進んで来たんだけど、あの人の情けでね、二週間ギリギリの日迄引伸して下さったのよ」

最後の日、何でもない一シーンが撮り終わると、彼女は人間の社

会から引き離されました。婦人刑事はシオルダーバッグから取出した赤い襷を彼女に投げ与えました。激しいビンタを喰って身も世もなく啜り泣く彼女の姿に、男達は却って顔をそむけ、若い女優達は愉快そうに見物します。

「もう連れて行くんですか？　せめて少し休ませてやって、出来たら食事でもさせてやって下さいませんか？」

若い気鋭の監督の声は、ふるえて居ました。

「ホホホホ、駄目です。何しろこんなことは、前例もないことですし、一刻も早く収監しないと……。これっ、未だぐずぐずしてるのっ！」

死ぬ程の思いをこらえて、やっと襷一本の姿になった彼女の右手の指が握られ銀色の手錠が右手首を叩いて激しく鳴り、間髪を入れず婦人刑事の手先は素早く動いて、左手首にも鋼鉄の環が喰い込みます。もはや容赦はありません。

「腰縄を打たれて、手錠をお腹のところで押えられて、その上に、縄をきつく掛けられたの。まだ刑も決まって居ないのに、あんまりだと思ったわ」

腰の辺りを、縄尻を持った婦人刑事の手で邪慳に押されて門を出ますと、新聞社のカメラの放列が待つて居りました。

「車に乗せて下さいって、土下座して頼んだけど、鞭で打たれて引き摺られたのよ。多勢の人が集まって来るし……。駅迄歩かされて、電車に乗ったけど、床に坐らされて……。その時の気持は思い出せない程、もう体中真赤にして無我夢中だったのね。ずっとあとで、その時の写真の出てる新聞見せられたけど、口をあけてボンヤリした顔して、割合悲しそうじゃなかったわ」



電車が駅に着いて、婦人刑事は荒々しく縄尻を上方へ引き絞りました。腰縄がギュッと締め、哀れな女囚は身をもみ乍ら、ヨロヨロと立上がったのでした。

「いくら大スターだったか知れないけど、もう、あんなっちゃ、おしまいよね」

「そうよ。けど、何だか可哀想なような、いい気味なような、妙な気持だわ」

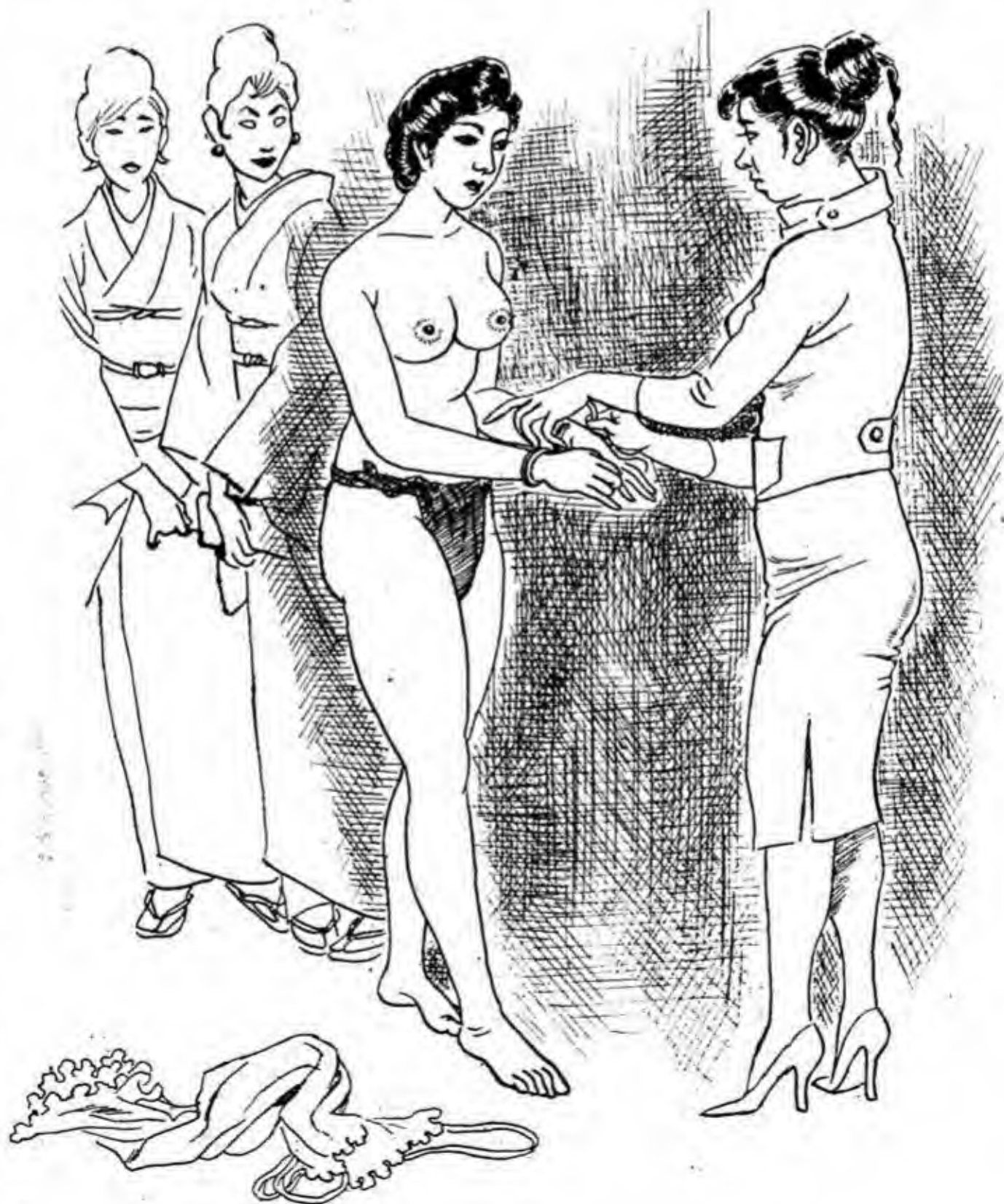
「おい、見ろよ。やっぱり綺麗な肌してやがるじゃねえか」

人々の嘲けりの声も遠くの方で聞えるようでした。

「じかに検事局へ送られたの、看守に引き渡されて……。もう駄目ね。けどもの扱いよ。首環と腰枷嵌められて、番号を体に刷られて、自分で手枷足枷嵌めさせられて……。重いので驚いたわ。髪を切られた時は泣けて泣けて。そして、うるさいって、お尻をぶたれたの。監房の中で正坐して初めて泌々と悲しくなったわ」

彼女を担当した検事は五十位の婦人でした。

「お前は素直に皆白状したし、同情できる動機でもあるから、余り



長い刑にはならないと思うわ。しかし、今迄が今迄だから、ずい分と辛いだろうね」

男の看守は割と寛大でしたが、婦人看守、それも中年前後の婦人看守の意地の悪さには、彼女も泣かされました。

「そりやもう、どんなことされたって手向いはおろか、嫌な顔さえ出来ない身だってことは分ってるけど、チャンと坐ってるのに、足を崩したと云っては廊下に引摺り出して鞭を当てたり、寝相が悪いからって云っては、大きな木の首枷嵌めて三日も四日も放つといったりするのよ。女の方が概して残酷な様だわ。殊に抵抗の許されない者に対してはね」

彼女に下された刑の宣告は懲役十五年でした。

## 女囚誕生

「お前達、今夜は横にさせてやらないよ」

何の罰か知りませんが理由を知って見た所でどうともなる事ではありません。私達は胸枷をつけられ、鼻の連結棒はなしで檻に蹴込まれました。お清も中に入って来て、私達を背中合せにし、鎖鐐の金具と金具を短い鎖で繋ぎ合えました。檻の天井が低いので既に上体をそれぞれ前に倒した姿勢なのですが、更に其の鎖の中央を檻の天井にグッと吊り上げられ、後頭部と背中を天井に接して爪先立ちにされます。鼻環がゆるく天井に結び付けられました。喰い込む鎖鐐の痛さは灼きつく様でした。奥様は天井から小気味よさそうに私達の浅間しい恰好を暫く眺めて居ました。奥様が寝まれた後も、私達は低く呻き合い乍ら脂汗を垂らして、一晩中苦しみ通す外ありません。

「ひどいわネ。こんな鉄の腰枷や鎖の鐐なんか、一度でも自分が嵌められて見たら、とてもこんなこと出来るもんじゃないと思うわ。」

ああ、苦しい……

翌朝になっても中々解いて貰えません。奥様がやって来て、「ほんとにいい恰好だわね。どんな恰好だか知り度いだろ」

と小さなカメラで四方八方から、更に天井からも撮影された後、やっと連結を解かれた私達はいつもの通りの労役を課されました。「ほんの少し、一時間でも、いえ半時間でも休ませて下さいまし。お慈悲です。もう足が動きません」

私は庭にひれ伏して哀願しましたが、小娘はせせら笑って、鎖鐐の真下から足鎖に伸びる鎖を握って乱暴にしゃくり上げました。悲鳴と共に立てた尻を蹴り飛ばされ、私は地べたで顔を強く擦ってしまいました。

「動けるじゃないか。キリキリ働くんだよ」

それでも、私達の鈍い働き振りを、少しは大目に見ては呉れた様でした。それから二、三日の間は、口を利く気力もない私達は、檻にブチ込まれるや、唯呻き乍ら泥の様に眠ってしまったのでした。「どこまで話したかしら？　そうね、刑の宣告の時は傍聴する人で一杯だったわ。そして鼻に孔あけられて、環を通して、首環も鉄のに嵌め替えられて街のど真中で晒しものにされたわ。さんさん苛められて恥かしい思いさせられて、涙も出なくなった頃監獄へ送られたのよ」

家畜用同然の貨車に積込まれノロノロとした長い道中の末、彼女が収容されたのは、北の涯の阿場尻監獄でした。

「そうそう、拘置所で監獄送りを待って苦役させられてた時にね、例の事件で怪我した二人の女が見物しにやって来たわ。一人は片手がなくてビッコひいてるの。ほんとに済まなく思っ、心から謝ま



ったんだけど。足蹴にされて鞭当てられて、唾迄吐きつけられたりする、矢張り口惜しくなっちゃったわ。又、暫くすると、若い女優達が四、五人つれ立ってやって来たの。その時は、丁度運悪く初めて鎖褌されてた時なのよ。意地の悪い婦人看守がね、私の腰つきが気に入らないから直してやるって云って、腰枷の前後の金具に二、三日前からつけてしまっていたの。もう情なくて恥かしくて堪らなかったわ」

さんざん弄られた彼女は、立ち去る女優達を拘置所の門迄送られました。前から腰鎖を曳かれ、後からは鎖褌の下につけた捕縄を取られて、嘗て仲間だった華やかに着飾った女優達に浅間しい姿を取り囲まれて、からかわれ乍ら門の所迄曳立てられました。

「額を地べたに摺りつけて、代る代る頭や背中を踏みつけられたわ。無性に着物が着たくなって、靴をはき度くなって。額が離れたと云って、鎖をしゃくられるし。皆は笑い乍ら出て行くけど、私はもうそこからは動けないのよ。情けなくてねえ。小娘みたいな奴がからかうのよ。出たいだろうって。出来ることなら、絞め殺してもやり度い程腹が立って。鉄の手錠の硬さが泌々と骨身に泌みたわ」阿場尻監獄は、冬の一カ月程は十度位に気温が下ります。しかし懲役囚は一片の布さえまとう事は許されません。

「私が繋がれたのは冬に向う頃で、すぐに寒くなったわ。夜なんか監房のコンクリートの床の上でガタガタ震えて過すのよ。鉄の首環が冷いことったら。暑いのも苦しいけれど寒いのはもっと辛いわよ。まんじりともせず一夜が明けると、情容赦もなしに曳出されて鎖で連鎖されて、北風に吹かれ乍ら開墾場へ土方仕事に追い立てられるの。思い出してもゾッとする程、みじめなものだったわ。そ

してね、看守達の御気嫌を少しでも損うと、両足首に鉄丸つけられたり、鎖の褌かけられたりするの。辛かったわ。ほんとによく勤まったと思うわ。私の隣の房に居た若い男なんか、余程憎まれたのね、鉄の腰枷と鎖褌されて、両足に鉄丸をつけられて毎日々々苦役してたけど、十日もすると動けなくなっちゃ、熱出してウンウン云ってるのに、窄衣で締め上げられて地下の暗房に放り込まれてたけど。その後、姿を見なかったから、きっと死んだのだと思うわ」

自らの非を悔いて一生懸命に刑に服し、与えられる苦痛や屈辱を甘んじて耐え忍んだ甲斐あって、彼女は半年程で首都郊外の監獄に移送されました。

「そこに二年程居たかしら。奴隷にしてやると云われて嬉しかったわ。あと六年で自由の身にして貰えると云うんだもの。最初はキヤバレーの女給として働かされたの」

其の大きなキヤバレーは、奴隷女を接客用に使うことを認可されて居る店で二百名程の女給のうち、四十人程は女奴隷でした。

「鼻環を外して貰った時は、嬉しくて泣いたわ。鞭痕や枷の痕を整形して直して貰って、髪が伸びる迄雑役婦の仕事させられたの。私の事、知ってるので、皆から特別に、しょっ中からかわれたけど、もう平気だったわ」

未だ髪もよく伸びないうちから彼女は店に出されました。午後になると女奴隷達は檻から出され、掃除に一汗流した後、入浴し、お仕着せの店着をまとい、化粧をし、フロアの隅に立たされます。胸や背の奴隷番号を消す訳には行きませんので、お仕着せは和服で、革の腰枷と革紐とで両膝は三十センチ程に括られるのです。

「奴隷は御客様の席以外では坐れないのよ。そして普通の女給さん

達の世話をしなくちゃいけないし、御客様に見えない所でなら私達を撲ってもいいのよ。けど、久し振りに着物を着て、はきものをはいた時は涙がこぼれたわ」

御客様の御気嫌はもとより、ボーイや女給達に気兼ねし乍ら、女奴隷達は不自由な脚に悩みつっ立ち働いては媚を売らねばなりません。店が済むと着物等を取上げられ、膝枷を解いて貰う代りに革手錠で両手を腰に縛られ、更衣室に鉄格子で接した四つの檻の中に追いつまされるのです。着替えて三々五々に帰る女給さん達を鉄格子越しに眺める口惜しさは、当然のことと諦められますが、成績が悪いと容赦なく罰せられるのでした。

「罰は大抵減食か操り責めなの。勿論まともな食事じゃなくて料理の残りを犬みたいに喰べる訳だけど、私達は御客様の席でも水一滴口には出来ないんだから、その食事を抜きにされると飢しくて堪らなかったわ。そんなにして、未だ成績が上らないと今度は鉄の手錠や足錠でまりみたいに括られて小さな檻に体を折り曲げて押込められてさ、三、四日放つとかれるのよ。どうしても、御客がつかない女なんかね、お店に出ると、手錠足錠の痕を御客様に見せたりして泣いて頼んでるの。どうしても物にならなきや、あっさりと売飛ばされるだけの話よ」

美貌と元スターというだけに忽ち凄く人気が集まって、彼女の成績は抜群でした。

「けど、それならそれで、又、女給さん達にやつかまれて苛められたわ。何しろ分際が分際なんだから、どんなに口惜しくても、口答え一つ出来やしないし、よくトイレの中で泣いたものよ。御客様にしつこくいたずらされるのは諦めてたけど、膝枷でダンスするの、

難かしいわよ。フロア見てたら奴隷女はすぐ分ったものよ。でも、その店に一年半程居たけど、数え切れない程のお客の中には、優しい人も居たわ。とうとう一人の成金みたいな男に買い取られて、その男が左前になったら、又、別のキャバレーに売られて。又、買われて今度は芸者屋に売り飛ばされて……。一年程前に、この旦那様に買取られたのよ。あと二年とちょっとの筈よ。あなたは、未だ長いねえ。お気の毒に……」

この旦那様に買取られた彼女は、付けられたおばさんに苛められつつ、我身可愛さのため、一生懸命に旦那様の御気嫌を取って居たのですが、此の家の奥様の策謀のため、とうとう現在の苦しみを受ける身となったのでした。

「いきなり学生みたいな与太者の様な若い男が入って来て、私を突き倒して、いくら叫んでも、おばさんも誰も助けに来ないの。あらそうお。すると、やっぱりあの女のたくらみなね。おばさんもグルね。そこへ又バツタリと旦那様が帰って来て……。その男ったら、私を自分の恋人のように云うのよ。どうでもいいわ、と思ってふてくされてたら、旦那様に凄く撲られて、鞭打たれて。その時のおばさんの笑い顔はハッキリ憶えてるわ。こんな目に会わされるんだったら、あの時にもっとよく言訳して謝ってさ、堪忍して貰ったらよかったと思うわ」

その時天井の穴から奥様の白い顔が現われ、事もなげに云いつけのままに、私達は腰を浮かせ、檻の天井に二つ並んだ金具にそれぞれ鼻環をカチリと嵌め込み、朝迄を呻吟したのでした。

(未完)





遅ましき空想

## ヘルニヤ少年特別検診

森

太一

森太一は中学三年の時、父に連れられて病

た。

「特殊検診って、なんやろ。」

「手術されんのんと違うやろか。」

「痛い目に遭わされるのやろか。」

「君、脱腸やよって辱ずかしいと思うか。」

「僕はなあ、小学校の時身体検査の時が一番

いややった。皆、僕の脱腸を見よってなあ、

笑いよったけれど。」

「風呂へ行った時かて、よう笑いよるな。」

「せやけど、僕は平気やで。」

「俺とこの大将も、脱腸やさかい、脱腸帯毎日しておかんと怒られるのや。」

「脱腸帯、どう思う。」

「僕は、毎朝締める時、下腹がぐっと締まっ

てええ調子や。」

「ゴムでただれへんか。」

「布を巻いたらいよいよ。」

「君等、脱腸帯をして風呂屋へ行けるか？」

「俺、そうや。お前は？」

「今日、やっと平気になってしもった。」

稚小僧達だった。

少年達は最初は、初対面で互いにためらっていたが、やがて親しく話し合うようになった。

「僕も同感や。」

「小さい子が脱腸帯締めているのん見ると、その子、可愛いって仕様がなねん。」

「そやそや、小っちゃい脱腸帯している恰好を見ると、たまらんわ。」

「大人の中にも、脱腸帯に興味を持っている人いるで。」

「そんな人知ってるわ。僕の働いている工場の主任さんな、工場の風呂で僕の脱腸帯を見てな、下宿屋へ呼ばれて行った時、脱腸帯一ぺん貸してくれ言うて締めよった。」

「その主任さん、どない言った？」

「わしも、ヘルニヤになりたい言うて、えらい喜んでいた。」

太一も、こんな会話をしていると愉快だった。皆、同じヘルニヤ患者で脱腸帯を締めていることを少しも辱ずかしく思うどころか、誇りにさえ思っている気持を知ったのだ。

「これから皆、仲好くしようよ。」

「賛成。いつか集まって遊ぼうか。」

「うん。ひとつ裸になって脱腸帯ひとつで相撲しようか。」

「ええ、思い付きや。」

「会にして名前をつけようや。」

太一達は、こんな無邪気な話の結果、銘々

名前を考えて集まりに持ち寄ることになった。

いよいよ時間が来て、太一達は、附添に離されて別室へ案内された。多勢の来診者達が少年達の一団を異様な目で見送る中を、白衣の婦長が廊下を曲がり曲がって三階へと誘導して行く。「第三内科」と札のある診察室だ。暖房がよくきいてむっとする。広いその部屋は、南向きに面し、明かるい。数名の医師達と、数名の看護婦が厳然と少年達を迎えた。

「少年ヘルニヤ特別検診者、十二名、全員揃いました。」

引率の婦長が、主任医師に報告した。主任医師は、少年達の前に出てこう言った。

「君達は皆がヘルニヤ患者ですが、この病院では、君達の体を特別に診察して、最良のヘルニヤ治療方法を研究する事になったのです。ヘルニヤは手術をすれば簡単に治せるものですが、良い脱腸帯が出来れば手術せずに治すことが出来るのです。どうか、全国の多数の同病者のためにも研究がうまく行くように協力して下さい。君達は、病院が特に選んだ少年です。どうか誇りを持って診察を受けるように頼みます。見渡すところ、皆さんは

ヘルニヤである事を少しも卑下せず、大変元氣そうな態度を見て安心しています。病院の先生方は、皆立派な方ばかりです。安心して診察を受けて下さい。」

次いで少年全員の名と学歴や職業が婦長によって読み上げられて医師に紹介された。

「森太一、十五才、中学二年。父、昆布商。」

「安東公明、十五才、鉄工所工員。」

「迫水三郎、十五才、家業酒屋手伝い。」

「三原明治、十四才、中学二年。父、酒屋。」

「大前未治、十四才、材木店員。」

「浪花吉春、十四才、魚屋店員。」

「都下金次、十三才、乾物屋店員。」

「佐東芳夫、十三才、八百屋店員。」

「渡辺伸、十三才、中学一年。父、すし屋。」

「盛田茂雄、十三才、中学一年。父、日雇。」

「木村圭介、十二才、小学六年。父、工員。」

やがて少年達は、夫々の脱衣籠へ着衣しているものを脱いだ。誰一人として躊躇する者がなく、一斉に脱腸帯だけとなって、一列横隊に整列した。その光景こそ、ヘルニヤ少年の誠に逞ましい元氣溢れる健気な姿だった。少年達は、感心しているであろう医師や看護婦達の顔を見て、厳然たる姿勢でいたのであった。少年達は種々様々な脱腸帯をしてい



た。しかし、腰を取り巻く部分と、患部を押さえ、その先端が股間をくぐっている型は皆同様だった。

医師達は、少年達を一人一人見回って歩いた。それは唯、眺めるだけではなく、体への密着状態や、大きさ等を手に取って調べる医師もあった。各少年の脱腸帯の着装状況調査がひとしきり済むと、全部の医師が太一の周囲に集まった。太一は、自分の脱腸帯が他のどの少年よりも最もびったりと体に密着して装置が良いのに違いないと思っていた。

医師達は五つの机に夫々分かれて診察椅子についた。机の横には、一名ずつ看護婦が付いてカルテに記入するのである。少年達はその五人の医師の前に分けられて並んだ。そして、脱腸帯の密着状況があらゆる角度と姿勢から調べられた。又、脱腸帯による苦痛や精神的病状等が質問された。太一は医師の前で終始明快に答え、そして行動した。医師は、さもありなんと言う顔でうなづいてくれた。

太一は、体中がぞくぞくする程嬉しく自分でも妙な位、勇気凛々として来るのであった。普通の少年であれば、脱腸帯ひとつの丸裸で医師の診察を受けるなんてとても出来るものではない。いくら天真爛漫な少年達とは

言え、何らかの逡巡を覚えるのが普通であろう。だがこの少年達は決して羞恥の情を示さないものであった。綿密な外検が済むと、内検となる。内検はカーテンの中で行われた。太一が検査場へ入ると、医師と看護婦二人が、整然と並べられた様々な測定器械や手術道具、試験管台の前に位置していた。此処で脱腸帯をはずした。医者は、脱腸帯装置跡の皮膚を入念に検診した。次いで患部の診察があり、大腸下垂圧力が測定された。

太一は満ち足りた晴ればれとした気持で病院を辞した。それから一週間程して、再び病院に招かれた。太一は独りで行った。特別待合室には、一週間前の、あの時の少年達が十名共集まっていた。

少年達は、今度は、中学生や小学生は学生服、職業のある者は、仕事をしている時の服装であった。

太一は、厚司や紺の帆前掛、角帯、法被、盲縞の着物、作業服等の仲間と話し合っていると、むしろ嬉しく、誰彼の区別をせず、肩を抱いて廻わった。

定刻、例の婦長の案内で、この日は屋上に引率された。

小春日和の暖かい日だった。さんさんと降

り注ぐ太陽が、白い屋上のコンクリートを照り返えてまぶしい。

屋上の中央には、凡そ十米四方の台が組まれ、その周囲には、白衣の医師や看護婦、それに医療器具問屋の主人と写真師が十数名取り巻いていた。太一達は裸になった。裸になる方が暖かい。そして、十名の新案脱腸帯製造業者達の手によって、銘々の製品を装置された。

十種類の違った脱腸帯を締めた十名の少年達が、中央の台上に並んだ。少年達を凝視する人達は、冷徹とした態度であった。少年達は一列になって行進したり、駆足をしたり、跳んだりねたりした。又、体操もした。少年達は、伸び伸びと、若鮎の如くピチピチと行動した。これらの光景は、すべてカメラに収められた。

この結果、太一の締めていた脱腸帯が最良の製品として選定された。それで、その脱腸帯宣伝用のポスター写真が、特別室で何枚も撮られた。又、来月の医師学会で太一の身体測定と特別検査のデータが研究発表される事に決定したのであった。

(おわり)

雪

責

抄

北

潤

雪 責 抄

## (一)

孔雀邸を夜のとぼりがつつむと、乳色の霧がただよいだした。広い洋風の庭園に灯るアーチ灯の青い光茫に、しっとり乳色に煙って霧はさすらった。半月型のプールの、まっしろい大理石の孔雀のひらいた羽根と、高くてべた長いくびと、紫水晶の瞳が、さすらう霧にしっとりとしめっていった。

霧は、庭木の木立ちの奥へまでさまよい込んで行き、その一本の黒松の幹に縛りつけられている、御堂夫人の白い肌もしめらしていった。

御堂房子の素肌は氷のようにこごえ、さつきから、幾度となく、がちがちふるえる声で許しを乞うている。

近くに、許しを乞う相手が居るのだろうか？——暗いので、よく分らない。

邸宅の方から暗い木立ちを縫って、懐中電灯の光が近づいて来た。

「だんなさま」

と、まだ若々しい声である。

懐中電灯の光の先に、夫人の白い肌が浮び上ると、ハツとしたように、光が消えた。

「なんだね、急用か——？」

黒松のうしろから御堂武雄の声が応じた。

「お客さままでございます」

すぐに行く、と御堂は答え、足音が遠ざかって行くと、青竹を振り上げ、

「房子、音をあげるなよ。音をあげると客の耳に聴えるぞ」

青竹がしなうほどの烈しさで、ぱしっ、と夫人の白い背を打った。

「うっ……むむう」

背中と臀部を交互に存分に打ち責めると、御堂はやっと夫人の縄をほどき、寒さと痛みのために身をちぢめてかがみこむその白い姿を尻目に、木立ちの中から出て行った。

青いアーチ灯のもとを横切って行く彼の姿



は、猫背の年老いた人の姿であった。

「三郎さん——」

書生部屋の出格子の窓を、しなやかな手がたたいた。すぐに窓がひらいて、二十五、六の若い顔がのびだして、「おくさま……」

「見ちゃいやよ」

豊かな胸を片腕でかこい、房子は身をすくめる。

「だんなさまが着物を隠してしまったの。探がさなきやいけないの。懐中電灯を……」

「着物は僕が探がして来ますから」

三郎は庭に出て来て、「さ、早く中にはいってらっしゃい」

「だんなさまに内緒にしてくれる……？」

「もちろんですとも」

三郎の部屋にはいると、夫人は、彼の黒い書生服を着て火鉢にしがみついた。火気にふれると、かえって、まるでオコリにかかったように、全身がふるえて来た。

「探しまわって、やっと……」

寒さで紅潮した顔で三郎は戻って来た。

「ありがとう。助かったわ……」

三郎は、夫人の下着と着物を彼女の膝前に置きながら笑いかけた。笑いが、妙にこわばった感じだった。

「着替える間、あっちへ行つて。お客さまに挨拶に出なければいけないわ」

「着物をばくに探しに行かせたって、だんなさまにいいつけますよ」

ハツとした夫人の美しい顔をじっと瞋める三郎の顔も白ざめてこわばり、黒い眼に熱い光があった。

三郎は野性的な眼の光りで、自分の眼の前で着物を着替えるように、いうのだった。

## (二)

客は、尾崎博英と、その伴れの女である。

客間のソファに坐って、御堂と談笑していた。ストーブの暖気で、客間は汗ばむほど、あたたかい。

尾崎博英は、御堂と同じく六十年配の、もうすっかり髪がまっ白で、小柄な男である。

御堂には罌丸がないが、尾崎にもない。

日支事変の当初に従軍して、上等兵の御堂と、三等兵の尾崎とが、激戦の最中、至近に敵の砲弾が炸裂し、その破片で、二人ながら決定的な損傷を受けたのである。

客間のドアがひらいて、化粧を直していった。そうあでやかな顔の房子が、はいつて来た。「いらっしやいませ……」

しとやかな会釈に対して

「奥さん」

尾崎が笑顔でいった。

「この女は初めてでしよう」

「初めまして、紀子と申します」

女がいった。夫人はあらためて、まともに女の顔を眺めた。

色が白く、細面のまず整った顔だちで、口もとに愛嬌がある。親しげに口もとをほころばせていた。年は二十七、八に見えた。

「ひとつ、鞭痕をご披露しましょうかな」

尾崎はそういつて、「さあ」と紀子に頷をしやくった。

「……」

紀子は黙ってソファを立つと、御堂からよく見える位置に進んで、その黒い上品なスーツを脱ぎだしていった。

肌が露わになっていくにつれ、その白い肩や胸のむごたらしい鞭傷が、いやでも房子の眼にはいった。白い肌に、青いみみずや赤蛇がのたうっているような妖しさである。

尾崎と御堂は、立ちすくむ女のまわりをぐるぐるまわりながら、その形を、いろいろといい合った。御堂は賞め、尾崎は、けなす。どちらも品物かなんかを見るみたいだ。

紀子は羞恥の余り、うめき声をもらした。人形のような立姿が、そのうめき声で、新鮮に息吹くようだった。

房子夫人の眼が涙ぐんで来ている。

これまでの何人かの尾崎の女と同様、このひとも所詮、金の枷にはめられたものだろうと、身につまされて哀しかった。

「ところで、ひさしぶりに奥さんの鞭痕も拝見したい」

房子の前で尾崎がいう。

致命的損傷をうけている彼等は、じっさいには「男」ではない。しかし、その彼等と伴れの女性の前で、衣類を脱することの苦痛から房子がまぬがれることはないのだ。烈しい羞恥が夫人をとらえる。

ソファを立ち、尾崎の眼の前で眸をつぶって帯をほどいていきながら

(さぶろうさん……)



夫人は、胸の中で彼の名を呼んだ。つい今しがた、三郎にも肌を見せた。そのときの羞恥感、底に、なにか一種甘やかなものが流れていたことを彼女は意識していた。羞恥が、歡びにすれ変りそうだったのだ。

傷のしだいを、御堂が、手ぶり身ぶり、房子の悲鳴まで真似て、尾崎に説明する。

「庭木に縛りつけて？、なるほどね」

二人は、声を合わせて笑った。

「ふたりとも庭へ出そうか」

「鞭で追いまわすのも面白いだろうな」

「いやいや」

御堂は笑いながら

「われわれの足では追いつけない」

「二人三脚でね、脚を縛って放すんだよ」

「なるほど」

御堂は手を打たんばかりに

「そいつはいい」



## (三)

ゆるしてください、かんにんしてください。ふたりの美しい女は、それぞれの夫の足もとにひれ伏して哀願したが

「うはゝゝ」

男たちを、いっそう興がらせるだけなのだ。

「さあさあ、二人三脚のはじまり！」

鞭がおのおのの肩口を襲うと、紀子も房子も「ああ——」と身をよじらせながら、命ぜられるまま脚を寄せ合った。

脚を一つに縛る役目は、尾崎が買って出、彼は威圧的に鞭を横睨えし、麻の細引でぎりぎりと縛り上げた。

「さあ、立て！」

御堂の声が頭の上から降った。

ふたりが立ち上ると

「歩け！」

同音にいい、すさまじく鞭を素振りした。

その鞭のうなりにせき立てられる気持で、ふたりの女は、歩調を合わせて廊下を辿りはじめ、やがて縁側の硝子戸をひらいて、寒気のきびしく張り詰めた庭へ、はだしのままに下りた。

「ああ……さむい……！」

紀子は、もう齒を鳴らした。

次の瞬間、びしっ、びしっ、と二条の鞭が同時に襲った。火で吹かれたように熱く、背肌が裂けたようだった。

「ううっ——ひい……」

紀子は地面に肘をつき、えびのように身を折り曲げてうめいた。

「紀子も奥さんも、立って逃げるんだ」

いらいらした声で尾崎がいった。

「さあ、さあといったらっ」

「房子、起きないか、こいつ！」

怒りの形相で御堂が鞭を振り上げる。

「ま、待って——」

夫人は腰を起し

「……紀子さん、立ちましょう」

声をひくめ

「いうままにしなければ、もっとひどいことをされるわ……」

背から流れる血をそのままに、夫人がよろよろと立ちかけると、紀子とともに立ち上った。

「走れ！」

の懸声に、二人三脚で二人は走り出した。

よたよたと、ぶざまに尻を振りながら。

「そらそら、もう転げたぞ。うははは」

「それ、それ、また転げたわい」

「転げた転げた」

鞭をびゅびゅ振りまわしながら、猫背と、小柄で髪の毛のまっ白な、二人の老人が後を追いまわして行く姿は、悪魔めいて映った。

黒い覆面に黒いマントをつけさせたら、さぞ似合うことだろう。

「転げて見せるのよ、何度でも……」

息切れしながら房子は紀子の耳にいった。

「二人を偷しますのよ。そ、そうして鞭打ちから逃れるのよ。これしかないわ……いい？」

どさっと転げて見せる。

「痛い——」

しっかりして、鞭で肌を裂かれるよりもまだわ、房子夫人は気丈に紀子をはげます。

「そりゃそりゃ、走れ！」

鞭を振りまわして、二人が追う。彼等も烈しく息を弾ませていた。

二人三脚の不自由さでも、彼女たちは、男たちよりも若い。息をあえがせていてもまだ氣根があった。

「もうよし」

御堂も尾崎も音をあげて了ったのだ。

## (四)

昔ながらの古めかしい書生部屋の、古い柱時計が、もう午前二時を指そうとしているのに、三郎はまだ起きていて、出格子の窓からアーク灯の消えた暗い庭と、遠くの黒い庭木の林とを眺めていた。

アーク灯は消えていたが、さっき、その青い光茫に照らしだされた猛烈な鞭打ちと二人三脚の光景は、まだ彼の脳裏から消えずにあった。雪になるかも知れない……三郎は、ふとぼんやり思ったが、また、にわかに火のように熱いものが頭に走った。

(いまにみる……)

三郎は憑かれたように思う。

(御堂の爺の会社も、尾崎の爺の会社も、ダイナマイトで爆破してやるからな……)

ダイナマイトを三郎が持っているわけではない。かりに持っていたところで、鉄筋中層ビルの会社が粉々に吹っ飛ぶわけではない。

御堂商事会社は新宿に偉容を誇り、尾崎商事会社は神田に、でんと構えている。

いずれも貿易である。彼等の個人財産は、何億あることか測り知れない。

マイトの一本や二本投げ込んだところで、どうなるというものではない。

しかし、三郎は

(爆破してやる……)

子供のようない他愛ない空想に頭を炎やすのだ。それは、しかしその根底は、いうまでもなく、虐げられる房子夫人への同情と恋心だ。

自分の目の前で着替えをした、美しい、白い顔が、またもまざまざと浮び上って来ると、その美しい幻を抱きしめるように、三郎は夜具の中にもぐり込んで、やがて声を忍んで泣きだした。

心というものは妙に通じ合うものかも知れない。宙を走る電波のように。

御堂房子は、ベッドの上で夜具に顔を埋め天井の一点へ眼を放って、三郎の黒い瞳を胸に描いていた。

御堂の額で背肌を打ち裂かれ、血の糸を垂らしたまま、紀子と二人三脚で、転がっては起きながら走るときに、書生部屋の格子窓から、その哀れな恥ずかしい姿をじっと見つめている熱い、黒い瞳を房子は感じていたのだ。

格子窓に三郎の顔が見えていたわけではない。だが、顔が見えないだけに、いっそう硝子の内側の熱い眼が感じられていた。

(さぶろうさん……)

夫人は胸で呼んだ。たまらなく切ない感情

が、うしおのように胸の内を差し満たして来た。

いつも、主人を鬼畜とののしっている三郎を、このいびつな冷たい空気の邸に繋ぎとめていたものが何であつたか、はつきりと思ひ当る思いがした。

彼の恋情が縄のように、自分の心を十重二十重に掴み締めて来るような気持だった。

「ううっ……」

ちよっと、からだを動かしただけで、打ち裂かれた背肌が火を噴くように痛む。尻にも青竹打ちの痛みがある。その二つが一緒になって、からだを責めつけるようだった。

御堂の眼を醒まさぬように、うめきを押し殺し、夫人はそっと寝返りを打って腹這いになると、白い腕をのべて水差しを取り、口の方を寄せて水をふくんだ。

と、ふと視線を感じた。

「……さま——」

おくさま、と声にならぬ声が、向こうのベッドから呼んだ。半身を起している紀子の顔が灰白かった。「起きていたのね、あなたも——」声にならぬ言葉を、こちらのベッドから房子夫人も送った。

お話がしたい、紀子はそう言いたげだった。



じっさいに手で何やら合図した。

たがいに、その夫の意識を醒ますまじく、  
気配を殺し、軟体動物のような身のうごきで  
ふたりの女はベッドから這い下りた。

哀れな境遇を共に語って慰め合いたい、そ  
んな気持が房子夫人にはあったのだ。実家は  
手広く織物問屋を営んで来ているけど、内情  
は資金繰りに苦しく、店舗も倉庫も土地ぐる  
み御堂の融資金の担保にはいつていて、すで  
にその期限は切れ、言わば自分は新しい抵当  
の形で泣く泣く彼の妻になったということ  
も、房子は何か激情的に紀子に打明けてしま  
いたい気持だった……。――

「おくさま――」

ひくめた声でそう言うと、紀子は、しなや  
かな指で夫人の手首をそっと握って、急に引  
き寄せた。

# (五)

明日は雪ではないか、と三郎が、ぼんやり  
思ったのは当たった。朝、しんしんと雪が御堂  
邸に降りこめていた。

初雪である。

食事の支度から拭掃除までする三郎の手  
が、あかくこごえ、彼は何度となく、かじか

んだ指先に息を吹きかけた。

「……三郎さん――」

その時、かすかな房子夫人の呼び声がした  
ようで、雑巾がけの手をやめて、三郎は長い  
広廊下をぐるっと見渡した。

幻聴に似て、どこにもその美しい人の姿は  
ない。

邸内はひっそり閑として、洋風の庭園に、  
ただ白く雪だけが舞い降っている。

廊下の雑巾がけを終った頃にお抱え運転手  
の松山が出動して来て、これも冷たいガレ  
ジの中で車洗いをするのだ。

バケツをさげ、唇を白くして三郎がキッチ  
ンに戻ると、そこに、ガウン姿で房子夫人が  
佇んでいた。

物も言わず、三郎は夫人のからだを抱きし  
めた。少しの抵抗もなかった。

夫人は自らはげしい口づけを挑んできた。

その時、寝室の方で、悲鳴がひびいた。

すると、とたんに夫人のからだは硬直した  
ようになつて

「主人が起きたわ」

彼女は脱兎のように調理場を出て行った。

「どこへ行ってたのだっ！」

鞭を手に垂らして御堂は呶鳴った。

「おトイレに……」

夫人は彼の足もとに跪いて

「お許しください、おトイレに暇どって……  
おゆるしください」

「ばかめ」

鞭がしなつて、肩口を襲った。

「ううっ――」

「ああッ――」

横で紀子が叫ぶ。尾崎の鞭で打たれている  
のだ。

二条の鞭が、それだれの奴隷を、快よげに  
思うさまに打ち責めた。

紀子も房子も泣きわめいた。

ふたりは、いつしか二頭の犬のように並ん  
で、打たれに打たれつづけた。

御堂と尾崎は充分たんのうすると、ようや  
く鞭を放り出した。

「尾崎君、雪だよ」

御堂がカーテンをめくって言った。

「ほう」

尾崎は驚いたように

「早い雪じゃな……」

「房子」

「……はい」

絨氈の上に突っ伏して、夫人は苦痛に歪む



凄艶な顔をねじむけた。

「キッチンに行って三郎を手伝え。おまえが腕をふるって、尾崎君に美味しい料理を御馳走しろ」

夫人は痛みを耐えてうなずく。

「聞えてましたよ」

三郎は青い顔色で言った。

夫人は黙ってガス・コンロに手をかざす。

「すごい悲鳴でした」

涙に濡れそぼっている夫人の横顔を見つめ

ながら、三郎は言う。

「どんな責めをされたのです、いったい」

「いつものように鞭責め……」

言ううちに、房子は両掌を顔にあてがい、せきあげだした。

「どこを打たれたのです」

「……残酷だわ、そんなこと訊くの——」

三郎は、やり切れない悲しい表情になって

「料理をするんでしょう？」

「……ええ」

「じゃあ、早くしないと……」

三郎は氣をつかって言った。

# (六)

食事が済むと、御堂は常と変わらず、甚だ几帳面に会社へ出かけて行く。厚い外套に猫背の身をくるみ、大きな黒靴をさげた姿は、ボンチ絵に出て来て高利貸めいている。

彼の車に尾崎と紀子は同乗した。

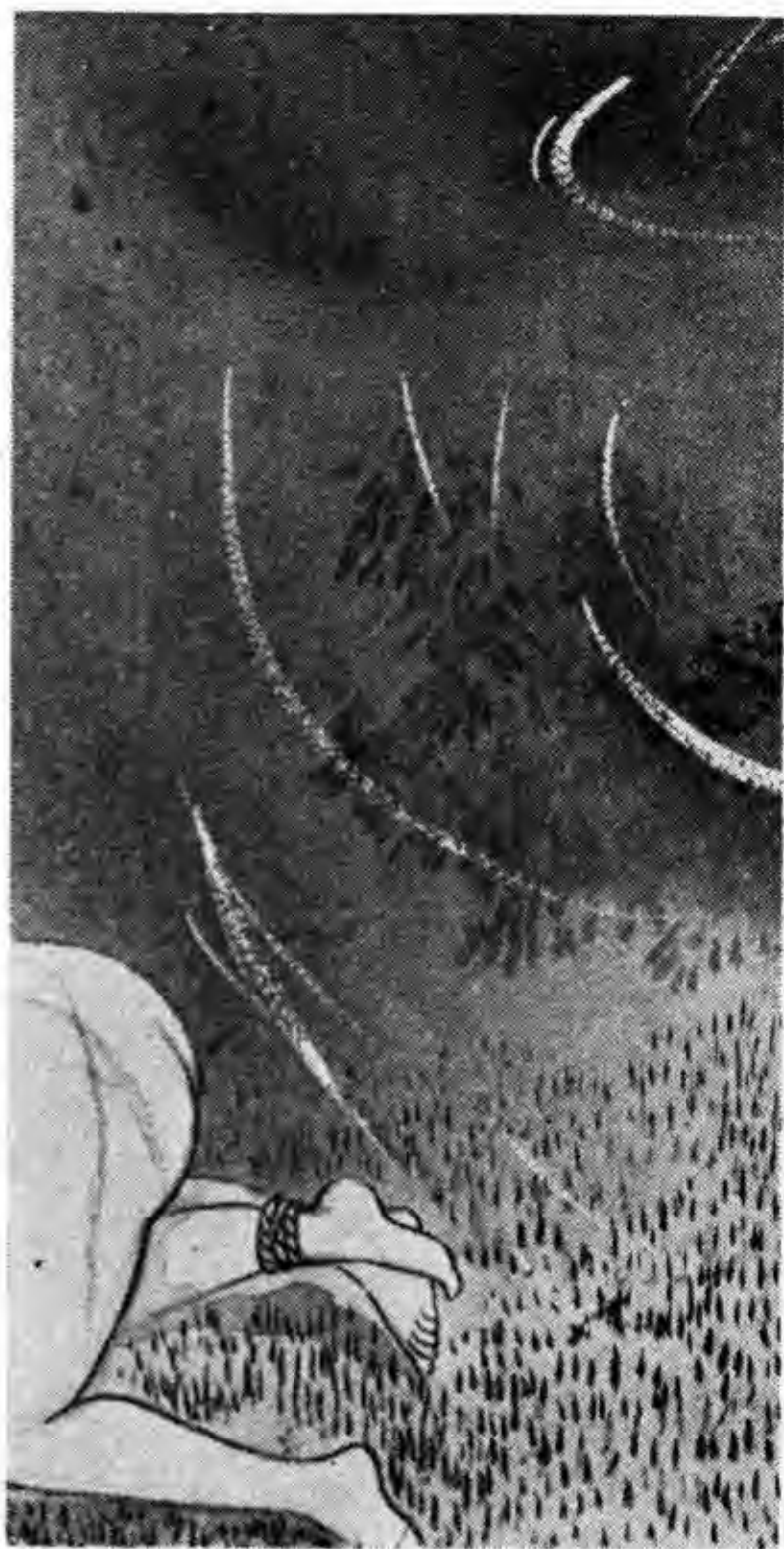
房子夫人は、玄閑の式台に手を突いて、三人を見送らなければならない。

ポーチの石畳を濡らす雪は、すっかり小降りになって、もう間もなくやみそうだった。

しかし空の色は灰色に翳っていた。

式台の夫人を、紀子は車の窓からねじ向いて見ているようだったが、その白い顔も、見る見る遠くなって車は門を出て行った。





車はアーチ門を出て行ったが、夫人は式台に坐ったまま、肩をわななかせていた。声を殺して泣いているのだ。

三郎が、うしろへあらわれた。

「泣かないでください」

そのくせ、彼の声音もどこか潤んでいた。

ストーブの燐えるサロンで、ふたりは立っ

たまま、くちづけを交した。房子の涙は乾き

その瞳には情熱がともった。

雪は、すっかり熄んだ。

空には青い色がのぞき、残雪の薄白い庭に

は薄陽が差し洩れて来た。

「三郎さん……」

彼女は、うつぶせになって言った。

「責めてごらんなさい……」

「――」

「ねえ、御堂がするように鞭で打ってごらん  
なさい……」

「――」

三郎は、まだ我耳を疑う思いだった。

「……鞭で打てと言うんですか？」

彼がその言葉を吐くと、夫人は二度つづけ  
ざまにうなずいた。

「どんなにひどく打ってもいいわ……」

夫人は腰を胴よりも高く上げた。

「――鞭は？」

どこにあると訊く三郎の声音は、妖しい興奮を隠しようがなかった。彼の眼は、けもののような琥珀の光をたたえ

「寝室のテーブルの抽出ですね」

「ええ……待ってよ。あたしが取って来るわ、三郎さん」

夫人はソファを下りた。

ベッドのそばのナイト・テーブルの抽出の中に、二条の黒い皮鞭が蛇のようにとぐろを巻いている。ついさっき、紀子と夫人のからだを責め抜いた二条のそれは、女の膏を吸い取ったように、つややかに光っている。その一本を白い華奢な指が掴み出して、それから不意に崩れ折れるようにその場に蹲まって顔をおおい

（あたしはマゾにされてしまった……）

それが、さも悲しいというように、暫く蹲まって顔をおおいつづけていた。

その夫人のなまめかしいうしろ姿を、寝室の入口で三郎が見まもっている。

三郎が黙ったまま歩み寄って来ると、気配を察して房子夫人は、うしろ手に鞭を差し出し、そしてそのまま、その場に両手を突いて

腰を胴よりも高くした。

「打つてよう——」

あられもないポーズの羞恥と、被虐の願望とが不思議に悲しいニュアンスで入りまじった、弱々しい声音だった。

三郎の胸の中で、とどめようとするものと、けしかけるものとの斗いが、真剣に睨みあっていた。御堂はこの豊美な女体を思うさまに打ち責める。それなら自分も思うさまに加虐してみたい。夫人を鞭打つことで、彼は御堂という大きな存在へ立ちむかう気になった。

「打つてよう三郎さん——」

夫人は、ほそい声で願った。ほそい声の語尾が消えるよりも早く、三郎は横薙に鞭を振っていた。

びしーっと、むざんな蚯蚓腫れの部分に鞭はひびいて新しく赤い血筋を走らせる。「ううッ——」夫人は呻きを洩らす。

「つづけて打つて頂戴——」

化石したようなこわばった顔で、乞われるままに、びしーっ、二の鞭を加える。

「ああッ——むうう……っ、続けて！」

愛しいと思う者から鞭打たれる苦痛は、ふかく胸の深部まで満してくる歡びと、すれかわるものだった。これこそマゾの法悦だろう。

三郎の鞭打ちによって初めて御堂房子は、甘美な桃源の世界へ魂を達せしめていた。

「もっと打つてえ、牛か馬かを打つつもりでびしびし打つてよう」

白い肌を彩る炎症のむごたらしさに、三郎が、つい手控えると、夫人はなじるような語気で、せがむのだった。

「よし」

高く、三郎は鞭を振りかざした。この美しい愛しい女性を、願いのままに、牛の臀を打つように徹底して打ち責めてやろう！加虐の炎が、三郎の内部に舌をあげて来た。

「ひいっ！ああッ——」

凄まじい鞭打ちになった。

## (七)

「おどろいたでしょうね……」

やさしく三郎から傷の手当をされながら、房子夫人はうるんだ眸で三郎の横顔を仰ぎ、

「でも……」

「でもなんですか？」

三郎は傷薬を塗り込んでいく。

「自分から鞭責めを願ったのは、はじめてなのよ。今がはじめてなのよ。——三郎さん、あなただから打たれてみたかったの……」

わかってくれるわね、御堂のときとはちがうのよ、夫人は、もどかしそうに言った。いちずな、ちもんだ瞳のいろで。表情は傷の疼きに歪み、黒い眼だけに感情がともっている。ふたたび、雪が舞い落ちだしたのは、そろそろたそがれ近くなつてからだった。

御堂の車は、黒い屋根に薄く雪を積んで帰って来た。

夫人が、玄関の式台に跪き両手を突いて出迎える。

「お帰りなさいませ」

車の窓が雪をかぶっていたので夫人の眼には分らなかったが、車から降りたところを見ると、あの尾崎と紀子がまた一緒にいて来ているのだ。

紀子は昨夜のことを意識しているようで、幾分、照れくさげに、房子の顔を見ないようにして靴を脱いだ。その靴も一緒に夫人が靴箱にしまうときに

「御堂さん、あんたの思いつきは、なかなか面白い。ははは……」

声を合わせた笑い声が、痛く房子夫人の耳朶を打った。

どういうことを御堂は思いついたというのだろう。何か変った責め方を、それは考えだ



したのにちがいがなかった。

「雪がもっと降ればいいが——」

御堂は広廊下を歩きながら言い、立ち停まって、うしろを振り返ると

「房子、なにをぐずぐずしてる！酒の支度をするんだ！」

——雪は、二老人の酒宴の間に、朝よりもおおいっそう激しい降り方になった。みるまに庭は積雪し、庭木の枝々が雪の重みで、しなだした。

「ぼつぼつはじめるか。うまい工合に雪が積んでくれた」

御堂が腰を上げると、尾崎も酒の酔いで、てらてらと輝いた顔で立ち上り、

「さあ、紀子も奥さんも着物を脱いで庭に出るんだ！」

「哀願は許さんっ！」

房子の合掌を、御堂は一蹴した。

彼等は帽子をかぶり厚い衿巻をし、外套に身をくるんで雪の庭に出ると、おのおの小豆を五十粒ずつ、ぱっと雪中に、ばら撒いた。

雪の庭の辺り一杯に、ばら撒かれたその小豆粒を、房子と紀子は、ともに跣足で拾い取らなければならなかった。

ひとり五十粒ずつ掌に集め戻さなければなら

ない。二十分以内にだ。

雪は霏々とばかり降りしきって、美女の全身を濡らし、小豆の粒をたちまちのうちに隠してしまふ。

凍える指先で、ふたりの女は雪を掻きのけ掻きのけ、相争いながら、時間内に一粒でも多く拾い取ろうとして、哀れに、ぶざまな恰好で必死になって努力した。

「あたしが見つけたのよ！」

「あたしが先よ！」

争い合うのを、げたげたと笑って御堂と尾崎は見物した。女たちの髪は雪をかぶって真白だ。

「このひとつたら！」

紀子が、ぱしっと夫人の頬をたたいた。

「人が探したのを横奪りして！」

「あたしが先に見つけたのよ！」

「うふふ……」

尾崎の満悦の笑いである。御堂が腕時計を眺め、「時間だ、やめ」と言った。

検査して見ると、夫人が拾い集めた小豆粒は十三、紀子は十七。

拾い残した数だけ、青竹で撲たれるのである。五十から十三を引いて三十七へん、夫人は青竹で撲たれ、紀子は三十三べん撲たれね

ばならない。

黒松の枝にロープが掛けられ、まず夫人が両手万才の形で半吊りにされた。

「ゆるして……」

雪の冷たさに、その声も凍るようだった。猫背の御堂武雄が青竹を構えた。——そのときである。三郎がぱっと庭へ躍り込んで来て、いきのまちに刃でロープを斬り落し、夫人の縛めを断ち切り

「こ、殺してやるっ、この糞爺いっ！」

「やめて！」

実家の店はどうなってもいい、御堂の手にとり潰されたってもう構わない、三郎と一緒に今日限りこの忌わしい邸を出て行こう。

その思いを全身に漲らせ、夫人は、たけりたつ三郎の背中を抱きすくめて叫んだ。

「三郎さん、包丁を捨ててッ！」

雪は、しんしんと降りしきっていた。

(完)

## 告 謹

☆マゾヒズム特集号売切れ☆

御好評を戴いておりました「別冊・マゾヒズム特集号」は、今般、全部売切れとなりました。御通知と共に、厚く御礼申し上げます。

馬化狂隨筆

乗馬風流譚



＝倉 仁 成 人＝

馬と云う動物は世俗的には随分とエロティックなもので、昔よりいろいろと風流嘶や笑いに登場している。これとは別だが、乗馬も考えようによっては、至ってエロティックな（ここでは感覚的という意）スポーツとも云える。特に女性の乗馬に関しては一層で、このために一般の雑誌類にも仰々しく書きたてられている。

本誌でも既に紹介済だが、昨年の週刊実話、週刊事件実話、本年一月の同誌等々いくらでも挙げる事が出来る。その内容はいずれも同様で、女性が馬に跨った際の感覚について、殊更にエロティックな表現をしたりしているし、また見出しなども「しびれる感覚／男より馬の方が好き／」（本年一月週刊事件実話誌）と云うようなショッキングなものまである。

所で私も実際に乗馬をやって居り（もっとも私のは仲間の間でも口頭馬術家と云われている万年初心者だが）、つくづく思う事は、やはり乗馬は、男よりも女に向くスポーツだと云う事である。確かに女性は男性に比べて始めは消極的だが、少しなれると断然巧くなってくる。これは動物を御すると云う事が女の本能かと思っている。



もう一つの相違点と思えるのは体格構造の上のことである。私などはサポーターもつけず馬に乗っていて、速足などの際に尻の上げさげのタイミングが誤ったりすれば、たちまち鞍の前あげに急所をつき上げられ、思わずうなってしまうような事が必ずある。その痛さと云ったらたまらない。まさか跳びあがることも出来ず、落馬しそうになって冷汗が出てくる。これはあるいは私が未だ馴れないから?とも思い、気易い友人に話してみるのだが、

「いやあ、俺だって同じさ。あれあ、たまったもんじゃねえよ。」

「そうかい、それなら安心したよ。俺はまた西郷さん級で乗馬はとても向かねえのかと思ったよ。」

「何いってやがんだ、自己惚れるんじやねえよ、ハッハッハ。」

と云った調子である。

こんな時ほど、女はいいなあと羨やましく思う事はない。

ここで一寸話をすすめるために妻の事を書かねばならない。私はまだ結婚していくらも経っていないが、私の妻は、乗馬に関して娘時代から会社の乗馬部で大分長い間馬に乗

っていたので、能書きも、また技術の方も相当うるさい方である。今でも時々馬場へ行くが、何分一介のサラリーマンの女房では、その乗馬に熱も上げられないし、熱をあげられただけ困るのである。私は今の妻と一緒にいる前には、他にもいくつかの話はあったが、私の生来の性癖から乗馬の経験があつてサド的な女性と一緒にいたかったのである。そこで私は只彼女が乗馬が好きと云う、それだけの理由で決して美人ではないし、女としての特技もとれない今の妻と一緒にいたのである。但し私の期待したサド的傾向は今の所、全然日常生活においては、現われていないのが不満であるが。

さて話を前に戻して、妻の云うには、馬に跨ってセクシーな気分を感じると云うようなことは、始めてから少し馴れた頃にはともかく、今は殆んどないと云うことであつた。と云うのは、人にもよるが、よい鞍に正しい姿勢で跨っていれば、そんな事は全く無い筈であり、初めの頃は姿勢が悪いので、往々にしてそう云う感じが有り得ると云う事で、今はわざとでもしない限り、そんな事は絶対にならぬのである。

たしかに私の経験から云つても、鞍の前の

方に跨って(どの乗馬教師も鞍の前に跨がるようにと教えている)上体を起せば良いのだが、凝固位(胸を前へ出し過ぎて、臀部を後へ引いた良くない姿勢)をとると、そういう現象が起り得るだろうと思われるのである。序いでに云つて置くが、よく知らない人は駆足のリズムが問題だなどと考えがちだが、まるっきり逆である。駆足の最中はとてもそんなひまなどない。

私がよく描くブラジャーとショーツだけで乗馬靴を履いた女性が馬に跨っている絵について

「あんな恰好じやあ、とても普通の馬術なんか出来やしないわ。まして障害なんか、とんでもないことよ。」

と妻に云われるが、そんな事はとうに自分でも判っている事で、あれはあくまでも頭の中だけの想像の産物なのだから致しかたない。

ところで乗馬服についてだが、馬術界の大御所小津義郎氏は、内外タイムスの「粹人粋筆」で「近ごろの女性は乗馬の時も乗馬服を着ないで馬に乗っているが、乗馬ズボンだけでしかも乗馬ズボンの下はショーツ一枚と云う姿で馬に乗ると、鞍に跨った時ズボンが

ピッタリと肌につくので白い乗馬ズボンなどでは特にショーツの線がハッキリと表われ、見ている男性には誠にありがたいがあらぬ事を想像させてしまう。だから乗馬の際は長いパンティを履いて乗馬服を着れば、乗馬服の長いすそはスッポリと臀部をおおって、乗馬中の腰の動きが見えないから安心だ」と云っている。

女性の乗馬に関するエピソードは、この他いくらでもある。

例えば、昔吉原では女郎を馬に乗せて腰をきたえたとか、芸者の間でも乗馬をするものが出てきたとか、また明治時代の新聞を読むと、一時婦女子の間で乗馬が大流行して、街を歩けば必らず馬に乗った婦人に出合う程で、当時多くの人々のひんしゅくをかったと云うような事が書かれてある。

兎も角、一度馬に乗った事のある女性であったら、あの跨乗のスリルは決して忘れられないだろう。

近頃は方々の会社でも乗馬部を結成するところが多く、若いB Gが嬉々として馬に跨っているのをよく見掛けるが、少し馴れてくると彼女等は馬乗りが楽しくって楽しくってしようがないと云った表情である。初心者のB

Gも今でこそ、おっかなびっくりで、速足などをやられると悲鳴をあげて鞍にしがみついているが、あと少しすれば腕もメキメキ上達して、服装もGパンなどはやめて、グッと立派になり、乗馬靴も履くようになるだろう。私は今からそれを楽しみの一つにしているのである。

次に人間馬に関してだが、男性が女性の馬になると云う事は、最近ではサド、マゾなどと云う問題を通り越して、全く一般的なエロティックなものになってしまっているように思える。映画や一般雑誌に現われるのも珍らしくはなく、数えあげるならば十指にも余るだろう。しかもその人間馬の写真は、それらのいずれをみても半裸または全裸に近いような姿の組合せで、私がスクラップして本誌編集部に送ったものも、全部その例外ではない。私も時々実際に四つ這いの馬になった事もあるが、どうしてなかなかの重労働である。しかし、背中に軽装の女性が乗った感覚は満更でもない。

いつも私は思うのだが、この人間馬の運動は健康のためにも、美容のためにもよくて、その上に征伏感が伴うのだから一石三鳥である。また木馬遊びなどは尚一層よい運動であ

る。これは男が立って上体を曲げて椅子などで身体を支える。そしてその背中に女性が馬乗りになるわけだが、この場合女性は両足を充分に延ばせるので乗っている感じは尚更快適だと思ふ。この状態で男性は上体を馬が駆けている状態より揺らすのである。但し前の場合より一層疲れるが、腕立て伏せなどより余程益があると云うものだ。

これらの遊戯はもはやサド、マゾの領分ではなく、夫婦間の愛のテクニクの一つとして、これから必要なのではないかと真剣に考えてみたりするが、こんな事により、もしも家庭が円満にいくならば、これに越した幸せはないわけである。

### 乗馬とサド、マゾ

乗馬は、サドとマゾが表裏一体をなしているように云われる。馬に乗る事を「馬を責める」と云うことから何かそんな匂いがうかがわれる。この乗馬のサド、マゾに関しては多くの人達が、心理学的にも研究しているで、今さら若輩の私が能書きを並べることもあるまい。そこで私はこれから、あくまで自己の体験から得た感じを生のまま、私なりに書いてみようと思う。



## 中村玉緒さんの乗馬姿



先ず馬に跨った時の優越感たるや、乗馬に少し馴れてきた者にとっては、これ程素晴らしいものはない。高いところから人々を見下すばかりでなく、この大きな動物に打ち跨がり、自分の思う通りに動かした時などは、正に乗馬の醍醐味であろう。地上からポカンとして見上げている人間共が、皆阿呆に見えるから愉快である。馬上から沢山の家来共を見えるなどという状況は、思っただけでぞくぞくする程気分がよいものだ。將軍はさぞ得意であつたに違いない。

これらの光景を所を変えて想像してみたならばどうだろうか？美しい女王様が馬に跨つて現われ兵卒共を閲兵するならば、私などはまさきに馬前に膝をついて心から忠誠を誓うであろう。

また、戦時中に私の家が兵營の近くにあつたので、よく将校が鞍持ちの兵卒を従えて、馬に乗って通っているのを見ていたが、もしも今、私が美しい乗馬のお好きなお嬢様や奥様の下男であつたならば、馬で外出される度び毎にお供して、よろこんで馬の後からトボ

トボとついて行くことだろう。

これらの事はあくまで想像であるが、真実のところ、私は馬に乗られる女性方の下男として、徹底的に御奉仕申し上げたいのである。現に私は馬場にいるときなどは、女性が馬に乗ろうとするのを探すようにして、まさきにとんでいっては、頼まれもしないのに扶助して、乗るのを手助けしている。その方法も、大抵の場合は馬に乗るのを扶助して貰おうと云う時には、乗馬者は左足の膝を曲げて、その膝を扶助者に持ちあげて貰って馬の背に乗ると云うのが、扶助者に手を汚させないための一つのエチケットなのだが、これではまるで馬の背によじのぼると云つた方がよい位で、傍目には甚だみっともない。

私が女性の乗馬を手伝う時は、左足を蹬にかけさせて故意に掌が汚れるように両掌を右足の長靴の裏に当てて、女性の体重を持ち上げるのである。これならば馬に乗ろうとする女性は恰好よく馬背に乗ることも出来るし、また私のマゾ的な気分を満足できるわけだ。このようにすると大抵の女性は大変恐縮するようであるが、「ありがとう」一つ云わない女性もいる。しかし何にしても、私がお礼を云いたい位である。

拍車をつけてやる場合も同様で、私はわざと馬に乗る前には拍車をつけさせないで馬に乗せ、少し馴れて来たところで拍車をつけてやっている。彼女等は馬に乗っていて足を蹬から外して私の前に差出す。私は乗馬靴を腹の所で抑えて拍車をつけ、バンドを締めてやるわけだが、馬上の女性が、よく磨かれた素晴らしい豪華な乗馬靴を履いた足を差し出した時などは、思わず息が止まる程の嬉しさが身内を走るのを覚えるのである。辺りに他人が居なかったならば、この拍車をつけた黒光りする乗馬靴のつま先に接吻したい衝動にかられるようなことは一再ならずあった。

兎も角自分の服が泥で汚れるのもかまわず、このようにして乗馬女性に奉仕して、奴隷としての気分を味う事は、私のささやかな一つの秘密の楽しみである。

次に乗馬のサド的な感覚であるが、誰でも一旦馬に乗るとひとつ思う存分動かしてやりたいと云う気分が生じる。マゾを自認する私でさえも、何とかして、思い切りいためつけてでも自分の気持のなすままに、自由に馬を動かしたいと思う。ところがそうは問屋がおりさない。大体、乗馬を習おうとする時は「お馬様に乗せて貰う」と云うような消極的

な態度では全く進歩がないと云ってもよい。何しろ馬はトボケていて、なかなか狡いところがあり、何とかして少しでもサボろうとする。タチのよくない馬になると、いつもチョロチョロ横目をつかつていて、隙があると今までノソリノソリ歩いていたのが、サッと駆け出して乗り手を落そうとする。そんな馬に乗ったら、それこそ災難である。だから足許をみられぬように、例え恐怖感があったとしても態度に表わさず、落馬など恐れず「馬は乗るためのものであり、これからお前に乗って責めつけてやるぞ」と云った気概で練習した方がより進歩が早いようである。そうかと云って親愛感も持たねばならず、そのかねあいむずかしい。

よく乗馬教師は、馬に乗ったならば何が何んでもけとばせと教えるが、ただけとばすだけでも口で云うのと実際では大違いである。いざ乗ってみると、まるで他人の脚みたいにくろうとしても云う事を利かないのが初心者の方である。その上多くの初心者は、馬腹をけるとき無意識のうちに反動で手綱を引締めてしまっているのだから、馬は「歩け」と命令されて「止まれ」と云われているようなものなので、絶対動こうとしないのである。例

え正しい姿勢で馬腹をけったとしても仲々思うようには歩かず、カーッと頭へきて、私などもシャクにさわって思い切り馬をいじめたくなるときさえある。

これが女性の場合、初めのうちは只オロオロするばかりだが、相当数の鞍数のある者が馬に反抗されると極端に頭へ来るらしいのである。特にそれらは大学の女子学生に多いようだが、これは男子と一緒にファイト一本やりで練習しているためだからであろう。私も実際に見ていてハラハラした事であるが、昨年の馬術競技会の折、障害飛越で女子選手の馬が拒否した時などは全く凄いものであった。ヒステリックに馬の尻、腹、肩、首筋等を滅多打ちに打ちまくり、タイムオーバーで失権になって柵外に戻ってから、激しく鞭打つのをやめようとしなかった。

対抗校の男子学生などは「それっ／＼ヒステリーを起したぞ」と大喜びでひやかしていたが、競技会に出るくらいの女性は、馬術の方でも相当な自尊心があるのだろう。その自尊心を衆人環視の中で傷つけられたのだからたまらない。私は興味を持って最後まで見ていたが、友人になだめられて下馬した後、顔を真赤にして鞭を振り上げ、大分昂奮



していたようであった。

これが練習中となると尚更、一層鞭打の回数が多くなる。男子学生がコーチするにも「そこだ、それっ鞭！」と云った具合で、まことに凄じいものである。あまりに激しく鞭打つものだから、馬も反抗して首を上げようとするのへ、そこをすかさず耳と耳の間にピシリッと一発打ちすえている練習ぶりなどは、見ているこちらが昂奮してくる情景である。

もっともこの両耳の間を鞭打つのは頭を上げたり、前足を上げようとする馬を懲戒するためには最も効果のあるものだが。

拍車の使い方なども女性とはいえ、私などより余程乱暴である。何しろけりつけておいてぐるのだから、馬もたまったものではないだろう。

しかし、兎に角女性の乗馬姿というのは「週刊現代」の十月八日号のグラビアにもある通り優美そのものである。本誌に於いては乗馬女性がグラビアを飾った事は、過去に僅か一回のみであったが、記事の方では我々は結構思まれているような気もする。これから大いに伸びて貰いたいものだ。

次に人間馬に関してであるが、この問題は

既に前項で述べた通り、全く一般的になって了っていると思える。一体、乗馬靴を履いた女性が男性の背中に跨っている写真は、出来ないものなのだろうか？ 何んとかして実現をさせたいテーマである。

### あとがき

婦人公論の十月号に「あなたの中に潜むサドとマゾ」という記事が出ている。内容は、人間の心の中にはサドとマゾが同居しているものであって、肉体的なサディストには精神面でのマゾが多く、反対にマゾヒストはサドが多く潜んでいるというような論旨のものであったと思う。

たしかにマゾの中の馬化狂を自認している人達をみても、皆さん、なかなか勝手な面がある。尤もこれは馬化狂だけでなく他の趣味の人々でもそうであろうが。

例えば、女性がただ単に馬に乗るという事に対してさえも、ある人は正式の乗馬服に乗馬ズボン、拍車のついた硬胴の乗馬靴という服装をして乗って欲しいというし、他の人は靴は長い編み上げ靴が良いともいう。私みたくにそれこそ下着だけで素足に乗馬靴を履き、充分蹬を長くして深く跨って貰いたいと

思うものさえいる。

妻もよくいう事であるが、本誌に投稿している人達は、皆勝手な事をいつているというのだ。私はいつも

「そんな事はあたりまえだ、夫々個性があり趣味も違うんだ。君の考えるような簡単なものじゃないよ」

と、反論してとり合わないことにしているが、妻の買って来た雑誌を読んでからは「ハア、これも我々の心の中にひそんでいるサド的な精神かな？」と苦笑させられる。その上、妻からは

「あなたなんか全然家のこともやってくれないし、マゾだなんていったって当てにならないいわね。」

などと皮肉られると、マゾだと自認しているものの、家にいる時はいつもゴロゴロしている自分は、やはり世間並みの亭主関白の一人かと考えて、いとも奇妙な心持である。

以上は、私の体験を基にしたもので、全くのノン・フィクションであるが、これからは大いに馬に乗って、口頭馬術家の汚名を無くし、いつか、これらの経験を生かして拙い創作でも書いてみようと思う。



マニア  
愛好家の記録

## わが生涯の良き日

とやまかずひこ

### ジュース

あるスポンサーからの依頼で、モニターとして月々定期的に、いやでも十本内外のテレビの番組を監視していなくてはならない義務を、かずひこは負っている。

きょうのモニターは、カラーTVで、大相撲をいう註文で、三時から五時半まで、二時間半も、席をたてないのだった。

同じくモニターとして女性の声もという要望で、主婦、BG、新劇見習生と、三人の間がみるのだが、三人とも若く、三十才前のきれいな女性なのが嬉しい。

いつものように定刻、席について、モニターがはじまる。

みんな、ブラウン管をみつめて、真剣に、コマージュをきいている。

三十分はどたつと、『フアンタ』という、ジュースがだされるのも、いつもの通りだ。

さわやかな、ジュースの味をたのしみながら、同席をうかがうと、みな、それぞれに、美しい唇で、ストローを吸っている。

ここで、かんがえる。

かなりの分量のジュースは、それぞれ彼女たちに吞まれているのだ。しかも二時間以上も席を立ったひとはいない。とすると、いまごろ、あのジュースはどのへんをさまよっているのだろうか。

トイレへゆく様子はないのだから、当然、体内にとどまっている筈だ。

ただでさえ、おいしい味のジュースが、さぞ、うまくなっているであろう、こんなことをおもっていたら、それをのみたくて、たまらなくなってしまう。

こうしているあいだにも、ジュースは生理的变化をおこしつつ、ますます珍味になってゆくだろう、そろそろおこるトイレの必要をかみしめながら、隣席の新劇女性のうつくしい横顔をぬすみみるのだった。

シミ、

終電車も近く、夜のおそい車中は、わりに空いていた。

大東京を一周する山ノ手線の、T駅近くに住むかずひこは、この夜、親友が、都下へ転



居するためのおわかれの宴によばれ、はなしこんでのかえり、酔ったからだを、快適な車の震動にまかせていた。

異変は、そのときおこったのだった。

ちようど左となりのにりあわせた、バーずとめらしい女性が、ひどい酔いかたで、つれの仕事仲間らしいのに、介抱され、半分ねむったまま降ろされていった。

その、つれのひとのひそやかな、つぶやきが、かずひこの耳をとらえたのだった。

「アラ、つやちゃん、やったわネ」

げに酒はおそろしいもの。わかい女性をして、人目のなかで自制心を失わせしめたらしいのである。

かの女の座っていた、否、へたり込んでいた座席の辺りがいじめんの大洪水。

そのシミを尻目に、二人は、フラフラしながら、降りていった。

キタナイ——とふつうのひとは、おもうであらう。しかし、中で、タッタひとり、このシミを、尊いものを拝む心地で、みつめているおとこがある。

かれは、人目をばばかり、おそろおそろそのシミに手をやり、ぬれた指先の、においをたしかめ、あげくに口をよせてみる。

下車駅は、とつくにすぎえており、下手すれば、終電車を逃がしてしまうかもしれないのに、かれは、そんなことは、平氣の平左で、

指先を、しきりに運んだ。

人目がなかったら、ガバとむさぼったにちがいない。しかし残念ながら、人目が、それをゆるさないものである。ある日のかずひこの、思わぬ収獲に、胸のふるえを禁じ得ない様子を想像して頂きたい。

## 下 着

朝日新聞（東京）十月一日附朝刊は、すばらしい特集をやってくれた。

題して『下着』という一ページにわたる商品の知識。トップに、いきなり四体のブラジャーとパンティ、ガードルをまとた人形、つづいて、これもナイロンスリップをつけたマネキン人形、紙面の殆ど全部にわたりパンティ、ペチコート、ブラジャーの文字がポンポンとびだして、目をうばわれた。

等身大の人形による、ブラジャーとパンティをつけたシャシンは、それぞれのスタイルで、マニアの目をとらえるのだった。

## ふ ん ど し

週刊文春誌十月九日号八九頁を開いて、ドキリ。小見出しにいわく『六尺しめた東北のあねっこ』

花はずかしい娘さんが六尺フンドシをきりりとしめて入浴するという、山形県のある地方の風俗がスケッチされている。

ところは、山形県最上町最上村日山という由、実に壮観だろうだから、六尺フアンのみなさんは、現地をみにゆかれたらいいかが。

## 男 の 銘 柄

同じく、文春誌、十月二日号の、円地文子氏の評判作『男の銘柄』四六頁の項は、主人公のすばらしいMシーン。馬にされ、バンドで叩かれ、加えて、バスルームに曳かれて、頭から、シブキを浴びさせられる。

「動く、殺すわよ」

なんて、シゲキのセリフがとびだして、息もつかせないのである。天下のMファンよ。これだけはぜひおよみなさいと、おすすめておこう。

## ツ め

ある日の、新聞の投書欄に、こんな記事がでていた。

「このごろ、若い女の人の間でツメをのばしてとがらせるのが、はやっているようです。でもこの間荻窪で関東バスに乗って切符を買ったら、車がゆれて車掌さんのツメが私の手にあたり、ちよっと痛い目にありました。はやりだからといって、やたらにツメをとぐのは考えものですよ。（杉並区・主婦）——」

のりもののなかで、女性から、おもいがけ

なく、けられたり、のられたり、踏まれるのは、よくあること。

この主婦のひとは、手にツメをたてられて痛かったそうだが、これが、かずひこだったわが肌に、ツメをたてられるなんて、ねがってもないこと、随喜のナミダをこぼしたいところだ。

### 十二月号をよんで

十二月号のKKは、かずひこには、とくに嬉しい内容だった。

辻村隆氏の『三十九夜』。なんといったらよいか、これこそロマンティックコプロの真骨頂。鶴子と、陳の、その後の生活を想像すると胸がおどる。

その辻村氏が、一二一頁では、かずひこにツバでぬれた彼女のサルグツワの手拭いを贈ったら、と考えていくくださる。おまけに一七七頁では西田仁氏が、川柳をつくってくださる。おまけにKKが送られてきたこの日、午後は、コプロを研究する某大家と、半日を費して、たのしい『コプロ談義』を交わしたという、二重三重の『生涯の良き日』だったのだ。

なおその大家のお骨折りで、ちかくS女性とめぐりあえるチャンスが生れるらしい。かくて、生きていることのたのしさをしみじみと味った一日だった。

## ●新版マゾフォト●『女王様と奴隷』

全部未発表の最近撮影のマゾ・フォト(絹川文代——海野弘三)

大手札印画紙(9×13センチ)焼付 各組三枚一組 三〇〇円(送共)

### 奴隷の誓い 略号(とれ)

美しくも気高い女王様の足下にひれ伏して、その麗しき御み足の垢を舐めさせて頂き、踏みつけられ蹴り倒されて、有難く奴隷の誓いをさせられる幸福な男のフォト物語。

### 便器の奉仕 略号(へん)

女御主人様のビデとなって奉仕するところ、最高の喜びを感じる男が、美女の寝室に伺候して、親しくその液体と固体とを捧げ頂き、感泣にむせぶという麗しくも悲しきフォト

### 顔乗り 略号(かお)

ふっくらと肉づきのよい足の裏がM男の顔にぴったりとふさがり、やがて全体重がかかる。鼻も口もひしゃがり塩辛い足の指が口に入る。荒縄で後手に縛られて、指の口で、只、顔を振って呻くだけ。

### 足舐め 略号(あし)

「この横着犬奴が」と、さんざん鞭で仕込まれた挙句、女御主人様の素足の指先や足の裏を舐めさせて貰う犬男、無理矢理口の中へ押し込まれる足の指、しかし首輪を持たれた犬はどうもできない。

### 従属の極致 略号(そく)

嬌慢で美貌を誇る妖女の生きた玩具となつて、気ままな思いつきで脇腹を短刀で抉ぐられ、肩先を切られて血まみれになりながらも、美女に傷つけられる幸福に酔うマゾヒスト。

### 首絞め 略号(くひ)

すらりと長く伸びた白い脚がM男の首をがっつきと捕える。後手首を揃えて括られた男は這いまわって逃げ、執拗な脚はしなやかに動いて首を締めつける。今や断末魔の恍惚境が訪れるのだ。

### 犬の芸 略号(いぬ)

首輪を締めて鎖を持たれた可愛い犬、女御主人様の前でチンチンをし、お預けをし、ムチうたれながら仕込まれる犬の芸。うまく覚えたら女御主人様の食べ残しを足の指に挟んで貰って頂く。

### 尻敷き 略号(しり)

勝ち誇った生々とした美女と、女の大きな尻の下に呻吟してもがくMの醜男の哀歎と喜びとを織りませて、絶妙のコントラストをもって描いた、快心のMフォト。是非Mの慰安のために一組を。





過大評価の反応と伝播反応の共鳴という現象が所謂エロの構成に密接な関係を持つている。見た奴は誇大に話したがるものだ。是は何事に寄らず共通するが、そうで無くとも、聞く者の立場にもそれが有る。

何故かという、人間には事を好む、或は人の不幸を喜ぶといった妙な心理が有る物で、それが事実を過大に評価させてしまう。すると行為以前から、何か凄いエロチックな雰囲気が存在していたかのような錯覚が起って来る。是が過大評価の反応で、それが四方に伝播されると、あれもエロだ、是もそうじゃないかという共鳴が始まり、野放図に発展して行く。

パイブルに、色情を持って女を見る者は既に侵したるなりといっているのは連鎖反応の因子が有る

ことを論じた言葉であり、人より出ずる物人を汚す、といったのは伝播反応によって概念が固定化することを感じたものだ。

そこでKK誌はエロ誌かということに成るのだが、読者というマニヤにも色々あるけれども、大別して私は二つのタイプが有る物と思う。前者は研究者、または或る事物にのみ強い興味を持つ者、後者は興味の内にセックスを感じる種類の人である。

後者の感じ方は局部的で有り、一元的であって、例えば強く緊縛された時の女体の乳房の盛り上りとか、美少年が打ちのめされた時

の姿とか、兎に角一個所に集中されている場合が多い。そういう読者が有るといふ事も、マニヤ誌の特長なので、従ってエロだといっても正確に測り得るスケールが無い。勢い他からそれを借用することになるのだが、是が誠に不都合なのである。

どうして不都合かという、スケールその物が目ざねであると同時に、測る可き物が異質だからである。巷間のエロ誌の内容を見ると、大略三部分より成る集合体である。第一類は読み物、第二類はストド（面も写真も含まれる）第三類は漫画で、第一類は如何様にも曲筆舞文出来る変幻自在な物だ。第二類はストドその物はエロで無いとしても解説その他でエロ化する融通性を持つている。第三類は諷刺、ユーモア等のカブセルにエロを引っくるんで吞ませてしまふという特技を備えている。

漫画家という者は、こんな盛衰を心得ている者で狡い遣り方だといえるかも知れないが、是はKK

誌も参考とすべき点である。諷刺やユーモア等によって内容の面積を拡げ、面白くすることも出来る筈だ。然しそれは読者も編集者もKK誌はマニヤ誌であるというプライドをハッキリ肚に据えて置かねば危険である。

以上述べた如く、巷間のエロ誌は場合によっては「いやお笑いで御座んすよ」「これこれしかじかの諷刺ですハハ」と胡麻化せる融通性を持つているのだから、その辺から借用したスケールがチャランボラなのは当然で、それで融通性の少い異質のKK誌を測ろうとって土台無理な話なのだ。

若し完全にKK誌がエロかどうかを測定せんとするならば、各部に亘って綿密な規定でも作らねばなるまい。『緊縛に於いては、女性の乳房の上下五厘以内に縄または是に類する物を掛けるべからず』というような規則がゴチャゴチャ出来たら、こりやまた味も素っ気も無いことになる。だから、部分的に、これはどうかと思う？と評することは出来ても、全体にエロを云々することは出来ぬ。まして、エロ誌なのに云々等に至っては、言語同断、味噌も糞も一緒にしたという外はない。

## KK誌はエロ誌か

南村俊平



あるカメラマンの自伝

白　い　肌　と　縄

毛利敏久



背丈は五尺二寸五分くらいはあろうか、中学校時代は家の百姓仕事を手伝ったことがあるというだけあって、がっちりとした中肉で着物を着ていたときは、着ぼそりして、すらりとした長身の感じだったが、裸になってみると、むしろ、ぼってりとしていて、丸いという感じだった。

肉がよくついているので、肌が全体に張りきつていて、それに第一、色の白いのが気にいった。あのような不健康な商売をしている女にしては、肌の艶もよかった。

毛利は、今こそ、第一回の注文の作品を、この女によって立派に完成しようと思った。この女の裸身の美しさを最高度に発揮させ、そして、その最上の美を、何百分の一秒かのシャッターの開閉にかけて、フィルムに刻印しようと思った。

今こそ、毛利のカメラの技術が毛利の青春が、この一ときに燃えつきようとしているかのようだった。バッグからカメラを取り出す彼の手は、緊張のため、心なしか震えていた。裸にむかれた女の方

も、初めて経験するモデルという立場にとまどいながら、股の間にバスタオルを挟んで中腰のまま、かがんでいた。冷たい床の感触が足の裏から忍び寄ってきて、思わず素肌に鳥肌をたてさせた。

カメラの装飾を終えた毛利は女の側へ近寄ると、乳房を載せていた両手を背後へ回して縄をかけていった。手首は骨太でその上肉がよくついているので、持ちこたえがあった。胸もつんと突き上げるように前に出ていて厚味が、縄を握る毛利の手にもよく分かった。

出来るだけ手首を背中に沿って肩口に近くつり上げ、胸にも乳房の縄を掛けた。がっちりとした身体つきなので、毛利も手加減することなく、充分力一杯に引き締めて縛ることが出来た。

両膝を揃えて中腰にさせ、こちらを向かせた。両腕を背後に固定された女は、さすがに羞恥に頬を赤らめてうつむいた。胸はむくむくと盛り上がり、臍のあたりでくびれるように細くなっているが、腰はもともと大きな骨盤の持主なのに、よく肥っているので一層張り出たように見えた。

緊縛ポーズ特有というが、その

狙いともいうべき可憐さというものがいささかも感じられない体格なのだが、若い女のヌードとしては、ポリウムはあるし、それに身体各部の均整がとれているので鑑賞価値は十二分にあった。あの注文主は、どのようなタイプの女をモデルとして好むのか、聞き洩らしたが、毛利自身としては、好ましいタイプの女だった。

複雑なバックを単純化するためレンズを開放にして、前、側面、から数枚撮った。特に、胸に喰い込む縄目にピントを合せて、「縄と若い肌」というムードを出そうと思った。続いて、うんと絞って女の肌の感触と縄のとげとげしさとのコントラストをアップで数枚撮った。

「縛った女」というテーマに、とり組んだのは、毛利にとっては始めてだったので、専ら写真的に女性の美しさを捉えたいということに心を努めたが「若い女」という被写体は、独身の彼にとっては楽しい労作であり、しかも、一糸まとわぬヌードというので、一層セクシャルに感じられた。

縛りということとは、毛利にとっては、本当に最初のことなので、あの注文主が何故このような変っ



た注文をつけたのか、一向に彼は判断のつかないことだったが、今自分自身の手で、若い女の肌にかに縄をかけていてみて、その面白さというか、楽しさというか男心の琴線に触れる何ものかを感じとって、それが、何んでもあるか彼自身にはよくわからないのであるが、もやもやとした、そういうたものが、感じとられるのであった。

幾百人か幾千人かの顧客に接してきたであろう、この女の中に、縄に緊縛されて示す恥辱のポーズが、まるで生れ換ったような新鮮さで毛利の目の中に飛び込んできた。しかし、それは、女の方に於ても同じことだった。思っても見なかった新鮮な刺激は、全身の毛穴をわくわくとさせる程のものであった。現在の新地に来るまで、過去に二個所も住み換えてきた、いわば三年選手の自分で、男という男を知り抜いていると思っていたのだが、今、ここに、この男に縛られて、カメラを向けられたときには、自分が、四年前の生娘にかえったような錯覚に陥った。

これは、何んということだろうか。思わず、彼女は全身を赤く染めるのだった。

## 巷に拾う

## 「浣腸」の絵

栗瀬 長

某月某日、所は東京九段坂下、落葉した街路樹銀杏の根元に落ちている紙切れ。普段は道端の紙切れなど目も呉れないのであるが、その日に限って、何気なく眼をやれば、おお何と浣腸の絵ではないか。

道端で何か拾い上げるのは、聊か抵抗を感じる次第だが、これは

## 連作「少女」

牧村 興次

## 「取調べ」

若い女共産黨員に対する取調べは、男性である取調官にとっては、まことに興味あるものに違いない。まして、その女性が美しければ、彼が職務に逸脱した行為に出たとしても、一概に責めることは出来まいだろう。それは万人の心奥に潜む悪魔だからだ。

かりは一寸捨て置けない。人通りもまばらなのを幸、靴の紐を直すような恰好をして拾い上げる。

図の如く、大して上手な絵ではないが（これは失礼）矢張りマニアの手さびびであらうか、上質紙にさらさらと書き流してある。

孤独のマニア、独り寝の床に自ら施薬する楽しさに耐え兼ねてか或は、奇巧を読みつつ、自ら挿絵する積りであったらうか、などと何れにせよ趣味を同じくする人の手に成るものと思われるだけに、限りなき近親感をいだいたことで

あった。

貴重なる拾得物として、大切に保存しているが、或は奇巧同好の士の作品であれば、お返しもしないければならぬと思う。これを機会にとんだ御交友も願えはせぬだらうか、などあらぬ想像を逞しくしながらペンをとった次第である。

それにしても、とやま・かづひこ氏、馬場好男氏ならずとも、一寸注意すれば、巷にも我々アブ・マニアを喜ばせて呉れる素材に事欠かないものだ、改めて感を深くしたことであった。







## ガン作・マニヤのノート

(とやま氏に——私のバーでの会話)

芳野眉美

### A、グラビヤ

奇クの旧刊号以来の悪友である  
医学博士のN(専門は精神科)が  
愛用のルノーで私のバーに立ち寄  
った。例によって三冊ばかり奇ク  
を支入れている。Nの開業してい  
る町では手に入らないので、上京

するとまとめて求める由、Nの書  
棚には旧刊号から全刊そろってい  
る。

隣に他の客がいようが、かまわ  
ず奇クを開ける。九月号の『尻の  
下に敷かれてみたい』のグラビヤ  
「見るや、これ」

「ほう、ショックですね」と私。  
「パンティを脱いでいるところと  
かおせているところがあると、も  
っとよかったんだけどな」

「そうですね」

「今、脱いだばかりという感覚、  
かおせているという進行形の感覚  
は最高だからな」

そのグラビヤを覗いた店の十九  
の女の子が「いやだわ、Hね」と  
いう。すかさず

「俺は、麻美ちゃんのをかぶりた  
い。」

こんなことを平気でいうのはN  
だけ。

「あたし、穿いてないわよ」

「おっ！」

「女のパンティを頭にかぶせられ  
て喜んでいゝなんて、最低よ」  
「俺は、その最低でいいんだ」

「ヘンタイ——」

### B、紙のパンティ

そのままパンティの話になって  
「ポケットのついてるパンティ  
があるんですってね」と私。

「週刊紙で読みましたよ」

「何を入れるんだらう？」

「知らないわ、あたし、処女です  
もの」

「麻美ちゃんにプレゼントしよ  
うか」とN。

「いらないわよ、あたし、穿かな  
い主義なんだから」  
「そう遠慮するなよ、チップがも  
うかるぞ」

「どうして？」

「スカートをさっとめくってさ、  
パンティのポケットを開けて、チ  
ップ頂戴」

「あら、やだ」

「誰だって入れるぞ、グッドアイ  
デアだ」

「いや、お尻にさわらないで、穿  
いているのよ。紙のパンティだけ  
ど——」

「三枚百圓のアレかい？」

「そう、よく御存知ですこと、N  
さんって。あたし、洗濯するのキ  
ライでしょう。紙のパンティだっ  
たら汚れたら捨てればいいもの」

「どこに捨てるんだい？」とN。  
「どこにだって、いやだわ」

### C、忘れられたパンティ

「紙ばかりじゃないだろう」  
「変な心配しないでよ。押入れに  
まるめてほうりこんであるわ」

「脱ぎっぱなしか」

「うん」

「俺が洗濯してやろうか」  
「たくさん」

「でも、どうするんだい、それ」  
「冬になったら洗濯するわ」



「夏中、紙だったのかい、やれやれ」

「あれ、あのパンティ、麻美のじゃないだろうな」と私。

「何よ、マスター」

「トイレに脱いであったのさ」

「パンティをかい、マスター」

「うん、ラベンダーの」

「汚れていたの？」

「まあね」

「あたしじゃないわ、失礼ね」

「麻美のじゃないよ、麻美のは紙だろう」

「紙で悪かったわね」

「そう、カミカミいうな」で大笑い。

「まだ、あるの、それ」とN。

「捨てましたよ」

「マスターらしくない」

「それ、どういう意味」と麻美。

「誰が脱いで忘れていったか、知っていたから」と私。

「ラベンダーのナイロン・パンティか、見たかったな」

「あきれた」と麻美。「二人共最低よ、ストリートでじゃんじゃん飲んじゃえ」

「おいおい、ビールにしるよ。サントリーの角なんか、痛くてかなわん。俺は麻美ちゃんがカクテルしたなま温かいビールが飲みたいんだ」

「馬鹿ヤロオ」

「俺、その人にここで会ったことある」とN。

「まだいつている」と麻美。「そんなにほしいの」

「うむ」

「汚れたパンティを」

「うむ」

「あげようか、一枚くらい」

「有難い」

「高いわよ」

「いいよ」

「でも、どうするの、それ？」

「グラビヤの通り」

「やめた」

D、ヘヤー・ブランデー

麻美がトイレに立つと

「もったいないな、捨てなくてもいいのに」

その、さもちつたいたい、というNの表情が私は好きだ。麻美との話をオードブルにして、いいことをいってNは楽しく飲んでいく。酒に飲まれたことはない。Fマニヤの見本のひとつといっているだろう。

麻美と入れかわりにNもトイレに立つ。もどると、麻美に五百円札を渡してハイライトを買いにやらせる。ビールがあるのに

# ＜写真＞私の切腹

須賀綾女



「ブランデー」と注文した。

ポケットから大切そうにまるめられた紙を取り出すと私に笑いかけた。紙をひろげて私に見せる。

「麻美ちゃんのだ」

二三本黒いものがついている。Nはその一本をつまむと、ブランデーに浮かした。

水を流しながら用を足すから、最後は水が無くなって、あとに紙だけが残ったのだろう。そんなこともあるものだ。

ブランデーを飲みながら

「いい香だ」とか「最高だ」とか麻美の顔を見ながらいつている。麻美は気がつかない。

「おつりは麻美ちゃんにあげる」

「もうかった」

モヘヤのセーターの前をつまんで胸に落した。

「今日は酔ったよ」

店の前のルノーまでNを見送った。



# 孕女秘戯図

羽村京子



奇ク十一月号グラビヤ「膚はコ  
ードにくびれて」(モデルは大塚  
啓子さん)のうち、左ページ上段  
右の写真、面白いと思いました。  
胸一杯に空気を吸いこんで、腹を  
ふくらませたらしく、胴体がソー  
セージみたいになくなって、下腹  
が見事に丸く張っています。蛙腹  
とまでは行かないかも知れませんが、  
もともと啓子さんは地腹が大  
きく、グラビヤの中では異色があ  
りました。奇クが、世間のヌード  
とはちがって、豊満な女の腹(蛙

腹)の美しさを演出しようと努力し  
て来られたことに敬意を表したい  
と思います。  
啓子さんの腹だけでなく、梨花  
さん、東浦さんなどについても、  
多かれ少なかれ同じことがいえる  
かと思いますが、私はことに桜井  
葉子さんに注目していました。体  
つきから見ても、彼女こそ蛙腹にち  
がいないと思うのに、どうしたわ  
けかオッパイは別として着衣のも  
のばかりで、十一月号で脱いで見  
せたポーズも、残念ながらせつ々  
くの腹が駄目になっています。や

はり直立した姿勢で腹を前に突き  
出し、クローズ・アップした蛙腹  
を十分に鑑賞させてくれるもので  
なければと思います。  
啓子さんの写真を見ていて私は  
彼女は便秘して腹が張っているの  
ではないかしら、ガスがたまってい  
るのかな、あるいはもしかした  
ら空気を吸って……などという失礼  
な空想をしてしまいました。しか  
し本当はやはり、本物の妊婦であ  
ったら、と思います。妊娠第十カ  
月、臨月の妊婦の、すばらしいト  
ルソ。妊婦のモデルは何とか得ら  
れないものでしょうかしら。

## 二

おまよりあ社の神保明世著「耽  
笑うきよえ秘聞「痴談」」という  
本に、孕み女の秘戯図のことが、  
前後三カ所出ています。それをつ  
ぎつぎに紹介してみましよう。  
第一は、浮世絵の祖といわれる  
菱川師宣の描いた半紙版二つ折りの  
絵本「玉の酒月」(たまのさかづ  
き)の中の一枚で、  
「第五図『後ろ懐』(うしろい  
だき)年増の女房が僧に後ろか  
ら抱かれてゐる。よく見ると女  
房の腹は異常なふくれようだ、  
孕み女なのだ、おまけに毛の先  
は短く刈り揃えてあるのが、妙

に気になる」

と著者は解説しています。  
次に、鳥居清長。柱掛けの細長  
い型式をそのまま横にして、横長  
の特異な画面構成をとった「梅色  
香袖の巻(うめのかさそでのま  
き)」といわれるものの一つ。

第五図、夫婦である。  
妊娠している女房は、腹帯を締  
めて、うつむいている。  
下の方が切れていて、大きな腹  
は、あからさまには画かれてはな  
いが、乳の下と線と、背から臀部  
にかけての、線の引き方で腹部の  
大きさを、ちゃんと面き現わして  
いる。

後ろの男の顔は半分しか見えな  
い。なかなか大たんな図だ」  
エロティック・ミステリー十一  
月号のグラビヤ最後のページにあ  
る、鳥居清長「孕女房図」はこの  
絵の一部と思われます。

最後に、葛飾北斎の名作「浪千  
鳥(なみちどり)」から。

## 「第八図

大年増、髪を無ぞうきな天神の  
ような結い方をして、伝法であ  
る。腹帯を締めているので孕み  
女と知れる」

以上はいずれも浮世絵の巨匠た  
ちはかりですが、この本に紹介さ



れている秘画はごく限られた数であることから見て、有名無名の画家たちの作品の中には、同様のものが沢山あることと考へられまゐる。私自身残念ながら、このような秘画は、ほとんど見たことがありませんけれども。

## 三

ところで、前述鳥居清長の「梅色香袖」の中には、もう一つ面白いのがありますから、引用しておきましょう。

「第二図、町家の女房と亭主らしい。女の頭は（おいわ）という、年増の結うもので、今の人は殆んど知らない名称の髪である」

この図、ペデラスティだ、つま

り後門である。

女房に対して、男色好みな、一応愛嬌的なものだが、男色は何時の時代にもひそかに行なわれていたし、時には大っぴらに流行をする時代もある。

女に対しての、こうした興味をもったものは、当然考えられる行動である。

だがこの絵決して、奇を好んだという風はなく、至極自然に描かれてゐる。

著者は画家らしく、髪形の形にくに注意しています。公刊される書物として当然の制約でしょうが、簡単な文字の上の説明だけで、実物の絵がどんなものか、なかなか想像できないのが残念です。秘蔵

ノレール（騎乗式軌道）説もあつたとか。

コーヒーで呑み取る気なり

フェチ喫茶

オール読物「十一月号オール横丁」というページ。群馬のある喫茶店に五日間通いつめるとその美しいウエイトレスの使用済みパンティを呉れるとか。彼女たち自身そう明言しているそうだ。

家の方の投稿をお待ちしています。

ベッドの女神

遠藤春一・画



捕物の恨みは深しうしろまえ  
笛手錠ひだを前にと点呼とり

婦警さんのスカートには活動に便なるよう前に深いヒダがある。ところがそれを嫌ってうしろまえに穿くのが御当地大阪で大流行と「週刊読売」10月22日号。なるほどイザというときに脚が開かなくて困るだろう。泥ナワというのはあるが泥スカというのはあまり聞かない。

長ズボン相手にママは  
勝つ気なり

ついこのあいだまで、いたづらをしてはママに見つかって捻じ伏せられ、ぎゅうぎゅうの目に遭わされていた隣の坊やも中学生。さすが山を抜くママの力も衰えたか。とても叶いませんとアパートの廊下で立話。鞭打つ母の手のすでに老いたを知って涙したという孟子の故事いまは遠し。

まぞ川柳自註

## 騎乗式

西 仁

騎乗式なら橋渡し致しませう

鉄道敷設にからむ汚職事件で元高官夫妻逮捕さる。「怪物」と恐れられる御良人を凌ぐという才色兼備の令夫人。計画は再転してモ





## 最近号読後感

8月号とを手にして  
8月9日

近藤

奇巧も愈々充実の一途を辿っているものと心強い気がしますね。グラビヤもページ数を増した上にバラエティに富み、奇巧サロンの拡充や読者通信欄の活用も奇巧の大きな特徴の一つになっていきます。編集態度にはマンネリズムを避ける意欲が常に窺われて楽しく拝見しています。殊に特写フォト活用のレポートは私の好みにピッタリとマッチするもので、塚本氏と編集部各位に深く感謝しています。

愉しみの多い反面、辻村隆氏の「奇譚三十九夜物語」が姿を消したことは残念で、次号には氏の快作が欲しいもの。

最近の緊縛フォトの中心が梨花

嬢であることは大方の首肯される処でしょうね。「緊縛フォト撮影の実際」における活躍を含め、如何にも可憐な美しい姿態を誇り意欲的な作品を次々に発表して下さいのは快い限りです。

小柄ながらスタイルも佳く、ヴォリュームも被縛に適し、巧みな表情と相俟って哀愁の漂うムードは、悦慮そのものといえるでしょう。

8月号の「座敷牢の麗嬢」「雨装束とチューリップ」は進境を示す美しい佳作ですし、特に前者と関連する9月号の「柱と荒鷲」は甘美なお仕置に陶酔する女体の喜説が全身に滲み出ているようでした。

9月号の「恐怖の塩水」と「ロソクの拷問」は彼女ならではのドキドキさせるシーンでしたね。8月号9月号に亘る「逆さ吊り」は確かに大胆な労作ですが、8月号は乱雑で美観を損ね、しかも膝の後で吊ったせいかわが伸びず、足首の縛りめは観んできて、腹部にも女体の艶が乏しい憾みがあります。

9月号では薄く眼を開いた表情といい、女体のポイントを活かす瞳目の美しさといい、遙かに勝れています。この上の希望では足首で真直に吊るすことと、逆さ吊りの女体の背面を觀せて欲しいことですが……

塚本氏とコンビの「亀甲縛り」「高手小手縛り」のモデル役は梨花嬢にうってつけで、柔軟な肢体と従順で意欲的態度、それに近代的理智に富む美貌は、これからも貴重な作品の出現を約束してくれて欲しい。梨花嬢には、このままスクスクと悦慮の性を伸して頂きたいものと、9月号花田一郎氏の通信を拝見して思いました。美貌NO.1の絹川嬢は、9月号の「手足吊り」が特に素晴らしい他はすべて平凡、このままではマスクだけが売物のお人形に墮ちてし

まいそうで心配です。絹川嬢は演技力もトップクラスですし、性格的にも申し分ないモデルですから思いきった残虐を行って不朽の美を抽出することが必要でしょう。

さし当っては、セミ・ヌードの逆さ吊りとか、水着姿の水責め、腐屋でリンチされるやぐさ、避け得ない運命によって奴隷化される美人秘書などが涼感を呼ぶことでしょう。もう少し涼しくなれば、和装で「八百屋お七」「白子屋駒子」などの演技も望まれるものです。最近S役に境地を拓いているものの、姐御として思いきったやぐさ風になるか、冷たく洗練された貴婦人役であって欲しいものです。8月号よりは9月号が見られます。

印象的な存在は、8月号9月号の大塚嬢と、9月号の東浦嬢の二人。大塚嬢は何といってもムチムチと微かなヴォリュームが利点で「耽溺」「陰翳」などは芸術の香りさえ感じられます。「彫像」「逆エビ縛り」「吊人形」「柔肌断片」そして「オシメ・カパーの悪用」に至るまで、逞ましきこそのあれ、かわい女体の痛々しさが妙く、安心して愉しめる作品が多いのです。いわば最も活力のあるモ



デルですわ。

久々の愛川嬢の「縛り」は厳しい縄目と腿の縄目が佳く、ほっそりした肩口に対照的な胸の隆起の見事さが女体美を極立たせています。

新人東浦嬢の「珍妙な飾物」はモデルの遅ましさに対して生ぬるいお仕置でウェストはギリギリ絞りに上げ、要所要所をキリッと締めないと、折角遠慮の要らない素質の女体なのですから、もったいないと思うのです。「海老責」は出色、これではなくてはいけません。首と脚を結ばれ、男の足に踏み蹴られる一葉は見事なもの。このような本格的な海老責は、かつての川端嬢を彷彿させてくれました。

川端嬢といえば8月号で私に宛てた手記を寄せて下さった上に、9月号にも手記を発表して頂き、奇クを愛する者の一人として大きな喜びでした。9月号文中のR氏が私でなかったのは、個人的な淋しさを誘いましたが、とにかく得難いプレゼントでした。

連載の水田真紀子さんの「アクロバット残酷記」は明るく新鮮なムードがあり、次第に惹かれてきた矢先、9月号であっさり終結とか。結婚なさったら沈黙を守って

平凡な生活をなさるのかと思うと些かお気の毒にもなりますが、幸福を掴まれるようなお祈りしましょう。

8月号、交野弘氏「白豚」と市川透氏「和解」は清々しい作品でした。ここに見られるような男女の哀歓こそ、堅実で永続する悦虐というものだと思いが信じるせいでしょうか。「宇宙のどこかで」や「白い女家具」は、確かに力作として拝見していますが、私の好みからは、Sの分野に限定せず、広く人間の哀歓に触れる作品にも同じような感銘を覚えます。それでも、私の嗜好の純調はあくまでもSに在るので、雪後遙氏の傑作「影の国」復活は9月号の大きな喜びになりました。

初て、次号では暑氣私いの佳作が期待されますが、大いに心をゆさぶるような作品を発表して下さいよう編集部各位にお願いして欄筆します。

### 「奇クサロン」の

原稿を募る

「奇クサロン」向きの原稿を広く募ります。奮ってドシドシお寄せ下さい

マゾ画廊

「ボート」

春川ナオミ





△誌上通信▽

女奴隷に憧れる

四宮節子

編集長様へ

私は友達に見せて貰った雑誌の中に記されていた奴隷の記事を読んでから女奴隷に非常に興味を持つ様になった一女性です。

始めの中は私達女性に加えられた最大の恥辱だと思っておりましたが、だん／＼と気持ち変って参り、牛や馬の様に自由に売買され思いのままに飼い主に調教され一個の商品として財産の中に入れられていたという昔の女奴隷に限りない憧れを抱く様になりました。

それから良く図書館等で中世紀の歴史の中に出てくる奴隷の記事を探し求めました。中でも戦前に出されている奴隷虐殺史という書物には堅い言葉で書かれてはいませんが、私達の胸にこたえるものがありました。

海賊や豪族達が沢山の軍費を喰う為に生け捕ってきた美しい娘達を次々と奴隷市場に送り込み、換金したという事です。始めの中は召使や二号として買い求めていた

金持の人達も、次第に安く入手出来る様になったのと食傷ぎみになったので犬や猫や小鳥の様に愛玩用に買っておいて退屈な時には引き出して子供が玩具をもてあそぶ様にして遊んだそうです。

市場側も何とかして高く良い値で好色な男性や珍しい遊びを探し求めている貴婦人達に奴隷には中でも美しい白人の女奴隷には数限りない用途があつて、召使いの他に、こんなにも沢山の用途があるという事を説明する為に目ぼしい客席を見つけると、すぐ地下室や、秘密の部屋に案内しました。

様々な形の台の上に上野の秋の美術彫刻展覧会の様に、あらゆる肢体をさせ、過げる心配もないのに皆、ずっしりと重い鎖で首や手首をつなぎ、身の自由を奪って出品し客の目を惹きつけ、次の間には主人の命令に叛いた奴隷に飼主の威令を知らしめる為に、お仕置場があつて、鞭を持った調教師



があわれな悲鳴を挙げる犠牲者を息も絶え絶えになるまでムチ打つて、主人としての奴隷の飼い方を説明します。

次は退屈で物憂い時の遊びの方法としてトランクの中に詰め込んだり、小さい体が入りかねるオリの中に詰めたり体を三つ折りになんてくるくる巻きにしたり、ゴムまりを作つて子供の運動会の王冠をがしと同じ様に巻くものこのまりをハイヒールでけりながら競争をする方法や、お互いに奴隷を持ち寄つて金棒に宙にぶら下げ、相手側の奴隷をムチ打つて早く落

した方が勝利という様な遊びの方法。

次の間では、買い手に食事のサービス。テーブルの上には処せまじと女奴隷達が並べられ、腹の上には山海の珍味が馳走され、お酒が置かれます。奴隷達は身動きも出来ない様に、きつく縛られてるので、どんなに腹の上をホークやスプーンが動いても、何とも出来ません。食事が終わりますと、何日もの間、わざと餌を与えないで飢えていた大きな犬達によって、身体中をペロペロと舐められながら、残飯の片づけをされます。





写真「檻」

美柳輪生



○ それにつけても、つい幾日か幾十日か前までは大勢の下女達にかしづかれてきた美しいお姫様が神のいたずらか。悪人共に捕えられた女奴隷として真赤に焼けた鉄の印判を押されて馬市同様にせり売り台の上に立たされ、ムチの雨の中を特に高級の女奴隷の場合は美しく衣服を着せられ、興が湧いてくると、買い手の本能をゆさぶる

為に、片っ端から衣服を引き裂き引きちぎって全裸にして、せり売りの人の命令通り、手を挙げ足を挙げ、腰をひねって、前に後に、体の総てをあます処なく観覧に供して人間の姿をした一個の商品として家具として、家畜として、上流貴婦人や好色の老人に冷たくも重い鎖でつながれて買いとられて行く女奴隷。

生かすも殺すも、飼い主の自由であり、古くなったり興がなくなったり、きずものになれば、もともと商品であり消耗品であるから屑物として売り飛ばそうが、土の中に生き埋めにしようが、自由であり、本当に重宝なものです。

それでも、私はこんな奴隷が自由にならずに売られていた昔の時代に生れ、鼻に穴をあけられ、牛の様に鼻環を通され、又全裸にされて馬車馬の様に走らせられる奴隷馬車になり、又他の奴隷達と一緒にベツドの綿がわりに入れられ、又縛られてローソク台にされても、その方がより幸福だと思えます。

思いのまゝ、とめどもなく記しましたが、どうか、出来得る限り女奴隷の記事を、特に中世紀頃の奴隷市場の記事を少しでも多く載せて頂けませんか。かしこ

香川県綾歌郡宇多津町新町

四宮節子



# 怪少女スリー-X1



私はスリー-X。どうせよくして  
スパーマンじゃないのよ。先づ  
始めにフラックキヤットをやっ  
つけた時のお話ししよう。それ  
私は正義の少女なのよ

## 【短信往来】

○女性のモデル募集いたします。  
御希望の方は写真に身長体重記載  
の上お送り下さい。報酬は御相談  
に応じます。なるべくなら若い方  
を望みます。

○マゾ・モデルの男性応募者は大  
変盛況なので喜んでおりますが遠  
距離の方には、どうも御期待にそ  
いかねます。今のところ出張して  
までという段階には達しておりま  
せんので悪しからず。

○竹野ひろ子さんは十二月号から  
「ひろ子緊縛記」で登場、今月号

では「おしめカバー・ガール」と  
して口絵に本文に活躍。さて、次  
号では、どのようなポーズを見  
せるでしょうか。

○吊り娘として定評のある梨花悠  
紀子さん、益々円熟してきて、如  
何なる吊りの妙技を見せるでし  
うか。どうか御期待下さい。

○大塚啓子さん、今度ゴルフのキ  
ヤデイとしてアルバイトの由。太  
い胸が愈々太くならないかと今か  
ら心配ですが、余り食欲はないの  
に秋はやはり肥るそうで、うんと  
慮めてやらなくては、と、今から  
手ぐすねを引く人もあるとか。

## △レポート二題▽

### (或る割腹事件)

一家五人の惨殺死体

福岡、長男が無理心中か

(十月二日読売所載)

(福岡発) 一日午前九時ごろ福  
岡県蓬来町大衆食堂「阿波屋」  
の住み込み女中渡辺キミ子さん  
(一七)が二階廊間で目をさま  
すと西側の六畳の間に寝ていた  
経営者の御手洗キクノさん(五  
一)と三女紀恵(としえ)さん  
(二〇)がフツンの中で頭を鈍  
器のようなものでなぐられたうえ  
刃物で背中や手首の動脈を刺さ  
れて死んでおり、フスマをへだ  
てた東側の八畳の間でも長男の  
福岡小麦販売組合事務員勉さん  
(三〇)同妻洋子さん(二八)  
夫妻と二人の長男幸一ちゃん(三  
三)が同様フツンの中で血ま  
みれになって死んでいた。キミ  
子さんの知らせで北村福岡県警  
捜査一課長、鑑識課員、博多署  
員が検視したところ、洋子さん  
のまくら元に血のついた細身の  
庖丁とハンマーがあり、勉さん  
の死体だけにハンマーでなぐら  
れたあとがなく、腹を自分でか

き切ったように死んでいるので  
無理心中の疑いを強めている。  
キミ子さんの話では同日午前二  
時ごろ店をしめて全員就寝、店  
の間の電話線は切断されていた  
が、カギは内部から完全にか  
つていて外からの侵入口はなく  
室内を物色した形跡もない。ま  
た二階北六畳の間にはキクノさ  
んの二女沢子さん(二一)と内  
縁の夫タクシ一運転手出川順一  
さん(二八)が寝ていたが二人  
も朝起きるまで知らなかった。  
近所の人の話では沢子さんと  
紀恵さん姉妹はオシで、勉さん  
は長男としての責任に重荷を感  
じていたようだという。

(以上原文のまゝ)

### 娘二人刺し割腹

江東で二女は即死、  
ノイローゼだった

(十月20日毎日夕刊所載)

二十日朝四時ごろ、江東区大  
島町三の二八九、日本電線東京  
工場の検査工、佐藤昭作(三四)  
は、自宅六畳間で一緒に寝てい  
た長女、恵美ちゃん(五つ)と  
若草幼稚園〇と、二女、芳子ち  
ゃん(四つ)の二人を刃渡り十







# 春日ルミ女史に 奉仕した三日間

根岸悦夫

○「将を射んとすれば先ず馬を射よ」という諺がある。私の目的は春日ルミ女史であつた。しかし、私は先ず編集部の方々の労をねぎらうという意味で一席を設け、特に編集長と懇意になり、熱心な愛読者として印象づけた。

○以後、三度、私は編集長を呼んで酒席を共にしたが、自らの性癖については、一度も明らかにしなかつた。私はいつしか、彼の親友

のような恰好になつた。

○そこで、私は彼にそれとなく春日ルミ女史のことを話題にのせ、話のついで、にと一度彼女に逢わせて貰いたいものだと思つた。

○遂てを察知していたらしい彼は直ちに春日ルミ女史に連絡して紹介してくれた。初めて、編集部の一席を設けてから半年経つてゐた。

○彼からは自分の親友だと紹介されていたので、春日ルミ女史は私を鄭重に扱つてくれた。数度逢つてゐる中に、女史は私の願いをいれて私の計画に応じてくれることになつた。彼女は物事に判りが早くて

きばきとしていた。

○私が彼女のために借りた駅前のホテルはバス、トイレ、テレビ、電気冷蔵庫付の三部屋続きの一室だつた。寝室と応接間と居間と。そこは三階で、一階には食堂と娯楽室、売店などがあつた。

○春日ルミ女史は三日間の間、その部屋の女王様であり、私は賤しい僕として侍ることが、私の願いであつた。彼女は文字通りの素晴らしいサジスチンであり、私はその三日間、まるで天國にでも登つたような法悦境を味つた。

○その時の様子は刻明に彼女のカメラに収められて、今でも残つてゐる筈である。その感激の場面の中の一つを取り出して今、思い出しても、胸のわくわくするばかりのショッキングなシーンである。

○足掻めから始まつて女王様のお身体に対する奉仕は、嘗て私の日夜夢に描いてゐたシーンだが、現実には、もっともっとリアルで官能的な数々が展開された。

○私は自分の頭脳が痺れあがつて元に戻らないかもしれないという恐れさえ懐いた。もみくちゃにされた私は、今こそ、自分が本当のマゾヒストだということを自覚すると共に、彼女は偉大なるサジス



チンだと、今更ながら感嘆した。

○その頃、誌上で春日ルミ女史に対する呼び掛けが賑わつてゐたが、私は自分一人だけが、彼女から独占的に奴隷とされている幸福に対して心苦しく思つたことがあつたのだが、それらのマゾヒストが只口を開けて牡丹餅を待ってゐずに、何故積極的に努力しないのだからかと、不思議に思つた。













△告白・体験▽

## 釜ヶ崎の女

おさ  
長

だ  
田

すすむ  
進

その頃、私は二年半の療養生活を終えて、パリカン、剃刀等を理髪店へ売りつける行商をやっていた。療養生活を終ったといっても以前に勤めていた藤永田造船所での健康保険

の期限がきれたために、仕方なく放り出されたようなもので、退院の一ト月前に、三級から二級に昇格され、そのまま外気寮へ送られて、体のよい全快退院にされたのだった。

退院したといっても、私は、もう二度とあのリペットの騒音に沸く造船所の職場へ帰る自信はなかった。退職金を元手に、理髪用品を卸屋から仕入れると、それを風呂敷包みにして、一軒、一軒散髪屋を廻って歩いた。

別に確定した得意先を持っているというのではなく、只、行き当りばったりに飛び込みで売り込むというやり口だったから、馴染みの店を作り出す前に、私の身体の方が参ってしまった。生れつきのなまけ者で、その日その日がのんきに暮せればよいといった調子だったから、金のある間は、日中から映画を見たり将棋をさしたり、時には朝から夕方まで、パチンコ屋でねばったりした。

次第に金に詰ってくると、今まで住んでいた借家を権利金で他人に譲り、旭町のおデンの二階を月五千円で借りた。四帖半の二階は立って歩けぬくらい天井が低くて、表側にあるたった一つの窓も、窓際に看板があるので、日中でも電灯をつけないと新聞も読めなかった。

夕方までは眠むったように静かな街も、日暮れと共に活気を帯び出し、夜中の一時でも二時でも人通りがあり、時には酔漢が夜通しわめき散していることもあった。私も日中は

その穴倉のような四帖半の部屋でせんべい蒲団にくるまって朝寝坊をし、街にネオンが灯り出すころになって、やっと起きるという不健康でふしだらな日々を送っていた。

病後の身体に如何に悪い生活ぶりであるかは、自分自身でもよくわかってはいたが、骨の髄まで腐ってしまいそうな倦怠感、何に一つ意欲的なものを起さなかった。しかし、そのようなフクロウのような生活ではあったが、幸いに、身体の方は退院以来、別に異常はなかった。

一週間も十日も風呂へも入らず、着のみ着のままの泥だらけで、地下鉄の上り口で、じっと膝小僧を抱いたまま、走り交う自動車を呆然と眺めていることもあった。パチンコ代にも事欠いてくると、本当に、醉生夢死という言葉が、今の丁度自分であるのだ、という感じがした。しかし、それとても、切実に響いてくるというにしては、余りにも覇氣も氣力もなさすぎた。

目の前の交叉点で、赤信号でずらりと並んで一時停車した車が、まだ信号の完全に変らない中から、我れ勝ちに前へ出よう、前に出ようと焦って、エンジンの爆音を轟かせている一分一秒を争っている彼等と、何にもする

ことなしに膝小僧を抱いて終日うずくまっていける自分と、どちらが幸福なのだろうか。

私は、ふと、街の雑踏を眺めながら、そんな事を考えたこともあった。しかし、そんなことは、今の私には何ら感慨を起させる刺激も持っていないかった。

抜けるような虚無感、鉛の風呂に浸ったような倦怠感だけが、私の総べてを支配していた。頹廢と怠惰だけが、淀んでいた。

一本四円の串カツ十本とタダのキャベツで一日を過したこともあった。その点、ジャンジャン横丁は、私達のようなウジ虫には恰好の巣であった。温泉劇場の近くで三帖ばかりのドヤを持って、ジカ引きをしている通称タツちゃんと呼ぶ二十ばかりの女の子と知り合いになり、その子の紹介で、フジ子（どういう字を書くか知らない）という二十五、六の男娼とも知り合って、よく遊びにいった。フジ子は両刀使いらしく、自分は男娼の商売を続けながら、タツちゃんと結婚したいといっていたし、彼女もその氣でいるらしいという全く、アブノーマルな生活ぶりだった。

私が、三年ばかりの間、見聞きした釜ヶ崎の女のこと、それに、自分の体験をも混えて皆さまの興味のあるようなことを、少しばかり

り書いてみよう。しかし、この釜ヶ崎界限に永らく住んでいると、魚屋が生臭さを感じないように、鼻も自然に麻痺してくるので、その点、自分でも見落しているものも、沢山あるかもしれない。

私は釜ヶ崎界限で、ぶらぶらしていた三年間。別にこれといって、纏った収入の道はなかった。退職金の残りや権利金の喰い潰しをやっていたわけで、女をかうといった甲斐性なんか、勿論なかったのだが、この町に住んでいると、結構、女にも男にも不自由しないのだから面白い。

先ず第一の女、仮にトミ子としておこう。私も彼女の本名なんかきかなかったし、彼女もいおうとしなかった。皆んなが呼んでいたトミ子（トミ公であったかもしれないが）にしておく。

まだ理髪用具の行商をしておる時分、私は一日のコースが終ると、この庶民的な都会の恥部ともいふべき町に足を向けた。驚くほどの安い値段で例えば、一杯八十円のハイボール、一杯十円のホルモン、一本三円の串カツ一杯五円の黒砂糖湯等々が満腹するまで喰えたからだ。

その日は、早い目に切り上げたので、私が





地下鉄動物園前で降りたときは、三時前だった。何か食べるにしてい、まだ早いので雑誌の立ち読みでもしてやろうと、近道をして裏通りを入った時だった。一泊百円の安ヤドの前でかがんでいる女があった。私とその前を通りすぎようとした時、その女は突然立ち上って、「ねえ」と言葉をかけた。

毛虫の這ったような濃い眉毛は、如何にも男が好きだといった人相だった。

「うん、何んだね」

私は立ち止って彼女を見た。お世辞にも女らしいといえぬ顔かたちである。如何に女に飢えている（二年半の療養生活の間は、文字通り禁欲生活であった）私であったといっても、食指の動く相手ではなかったのだが、ここで一つの或る事件が起った。いや、事件と

いう程大げさなものではないのだが、これをきっかけに、私を彼女トミ子に近づけ、そして、やがては、私自身も釜ヶ崎の住人になり下るという結果になったのである。

私が、そこで立ち話したところを要約すると、彼女は、この旅館の一室を一回百円で借りているので、誰に気がねすることなく、ゆつくり遊んでゆかないか、というのだった。

ところが、この立ち話の最中、一人の職人風の男が通りかかり私に向って

「にいちゃん、この辺は危いぜ」

といい残して、足早やに通り過ぎようとした。勿論、私も、この辺の女には悪いヒモがついていてユスリやタカリをやるということを知っていたし、道々の立看板にも、西成警察署の注意書きが書かれているのを見ていて知っていた。だから、別にこの女を買おうなんて、毛頭思っていなかったのだが、若い男にそういわれてみると、急に怖くなって、露地へ逃げようとした。と、突然、女は先の若

い男の後を追ひ。

「お——い、その男を掴まえてくれ」

と、怒鳴った。忽ち、露地という露地、辻という辻から、住人が飛び出してきて、若い男の行き先をふさいでしまった。ステテコ一枚の二人の男に左右の両手を握られた職人風の男の前に立ちはだかったトミ子は

「あんた、私と遊んだことがあるの。遊んだこともないくせに、なんでケチをつけるの」と凄じい剣幕ですごんでみせるなり、飛び上るようにして、男の頬を二つ殴った。

住人たちに取り囲れて、今更逃げもならず、ただ、おろおろするばかりだった私を促して、トミ子は旅館へ引き返した。

旅館の部屋は、南向きの日当りのよい三帖の間で、隣りとは壁で仕切られており部屋一ぱいに蒲団が敷かれていて、足の踏み場もなかった。トミ子は私が人相から予想した通り全く好色な女だった。そんな事が好きだからこんな商売をしているのだ、と自分から公言して憚らない彼女だった。私は初めて逢ったときの彼女の狂態を誰か人に話してみたい、いや、文章にでもして、もっと多くの人々に知らせたいという気持ちにかられるが、その性質上、ここに書けないのが残念である。

当然のように、私は彼女に参ってしまったし、彼女も又、私を離さなかった。トミ子はこの界限では姐御株として名が通っていたので、私はいつの間にか、ていのよいヒモのような恰好で、この界限をぶらぶらするようになった。

これがきっかけで、それから直ぐ、旭町のおデニ屋の二階へ引越してきて、人間の屑のような生活をはじめたのであった。しかし、小心な私は悪事といったものに本心から協力するといった度胸もなかった。

小遣いかせぎのシケ張り、家出娘の監視等といったケチな使い走りや性に会っていたから、先にもいったように、パチンコ代にも事欠く有様だった。

八月の終り頃、安売りの西瓜を切り売りしている屋台店で四十すぎのポン引ばあさんと知りあいになった。大柄で肩のいかった男のような、この後家がいい寄ってきたとき、野良犬のような私は、道端に捨てられた肉片でも拾うような安直さでOKした。

砂を噛むような味気ない日々。この四十後家のポン引きも、私のような世の敗残者にとっては、有難いくらいの相手であったが、彼女は自分が十以上も年上であるという弱味か

らか、何かべたべたとべたつくようなサービスをするのだった。私の元気のない日が続く彼女、自分の引いてきた客とパン助との場面を覗き見るようにすすめた。

物置小屋になっっている一坪ばかりの部屋が私の観覧席であった。隣りの部屋とは、ベニヤ板一枚の仕切りがあるだけだったので、話し声は手にとるように聞えたが、それだけに私の方も物音を立てられないので、じっと中腰のままで永らく待たされるのは、やりきれなかった。ベニヤ板は素人大工がばんばんとやっつけ仕事で打ちつけたものだから、至るところ隙間だらけで、覗く穴はいくらでもあった。

私は客が入ってくる前から、その物置きに屈んで辛抱よく待った。私はそこで連れて来られた、いろいろの男の客たちの生體を眼前数尺のところで見聞した。それは、私のような世のすね者にとっても、一応興味ある見物であった。そんな日は、ポン引きの後家は、殊の外私を離さなかった。

飛田界限で実演の見物人を漁っているグループから、危うく、実演の男役にされそうになったこともあったが、その自虐的な興味と捨て鉢的な処世に対する興味も、生来の小心



さから、土壇場になって逃げだしてしまった私だった。

連込旅館の一室でポン引きの四十婆と一緒に、隣室へシケ込んでくるパン助を品定めしたことがあった。彼女の説明つきで、次々と変った客を連れてくるパン助の商売ぶりを見ているのは面白かった。彼女が閑な時には、若い商売女と二人で、旅館へ私を引っ張り込むことがあった。そんな時は、三人で破廉恥のかぎりをつくし、見るに耐えない聞くに耐えない行為をくりひろげるのであった。人生の退潮期にある彼女の欲望は執拗であくどく脂ぎっていた。

なんという類魔的な生活であろうか。しかし、まだ、それだけではなかった。私は、いつとはなしに、お茂さんと呼ばれる男娼と深い仲になっていた。彼女？は、すらりと背が高く痩せ方で、色が黒いのが難点だったが、濃化粧して夜の街に佇むと、本当の女よりも色っぽかった。しかし、私と逢うときは、生地のままの男をむき出しにして、男と女との双方をミックスした凄まじいばかりの色気で私に迫ってきた。

幸い、その「おかま長屋」は、私のドヤとは離れていたで、トミ子やポン引きのこと

も知られずに済んだ。私は、そのお茂を知った当座は、日中は殆ど彼女？の部屋に入りびたりになって暮した。当然、朋輩である男娼とも知り合いになったが、この奇妙な倒錯の生活を身を以て体験するだけでなく、彼等のエキセントリックな生活の全部を具さに見聞することが出来た。客としての通り一遍の体験ではなしに、男娼のヒモとして、そのグループの中にまぎれ込んだ生活から、自分の肌にじかに感じとることが出来た。

陽の高い日中から夕方にかけての数時間。男とも女ともない妖獣を相手とした爛れた生活は、すえきった私の身体を尚一層なまくらにし、頭の中は、いつも息をぬいたビールのように、ぼんやりとしていた。

もうどのような強烈な刺激にも反応を示さなくなった脳髄は、今では、目玉の飛び出すようなことを望んでいた。普通のことでは、も早や、糠に釘を打つに等しかった。朝から晩までお茂と過して、垢じみた蒲団の中から起き上ったとき等、流石の私も、余りのアブノーマルな生活に慄然とすることがあった。

私の足が遠のくと、お茂は、狂気のように後を追いつつ回った。トミ子に知れることを恐れた私は、口ふさぎの目的でお茂を訪ねて

は、そのまま、ずるずるべったり三日も四日も蛆虫のような生活を送ることもあった。

大阪駅でキャッチされたという家出人という娘が送り込まれてくる事もあった。若さに溢れた娘たちの肌は、びちびちと若鮎のようで、私達の目から天女にも見えた。そんな娘たちが、初めて客をとる日、隣りの部屋から覗き見することが出来た。無垢の生娘が、やがて箸にも棒にもかからないアバズレになるのかと思うと、一抹の哀れさが胸に湧いたが、しかし、そうかといって、落ちに落ちた私としては、そういった娘には、不思議とひかれることはなかった。むしろ、一種のサディズム的な嗜虐心が芽ばえたくらいである。

肝腎のところは詳しく書けないので、骨抜きのような事になってしまったが、実際の体験を刻明に描写したら、数冊の春本にしても見劣りしないものになると思う。

現在、私は足を洗って別の職業についているが、今から、あの当時の生活を思い出して特に後悔めいた感慨も起らない。長い人生なのだから、あのような生活があってもよい、ぐらいに思っている。

また、あの当時のことを思い出したら、メモしておいて、参考になるようなことでも投稿しようと思っている。小説のネタになるような事も沢山あったから。